

# 地域交流センター年報

令和5年度

VOL.26



三重県立看護大学  
地域交流センター



## 巻頭言

日頃より、三重県立看護大学地域交流センターの活動にご理解、ご支援賜り誠にありがとうございます。地域交流センター年報令和5年度第26号の発刊にあたりましてご挨拶申し上げます。

三重県立看護大学は、平成9年4月に初の四年制公立大学、看護の単科大学として開設されました。地域交流センター（開設時は地域交流研究センター）は、附属機関として開学と同時に設置され、本学の全教員が地域交流センターの構成員となって展開される多種多様な地域貢献事業は、三重県公立大学法人評価委員会からも高い評価をいただいております。

本学の教員の専門性を生かしながら展開される多種多様な教員提案事業、「みかん大出前講座」や「みかん大リクエスト講座」については、本年度は新型コロナウイルス感染症が2類から5類に引き下げられたことから実施できなかった件数は減り、実施件数は前年度を上回ることができ、県民の皆様の満足度も高く、本学教員の専門分野を生かし、安定した地域貢献を展開することができました。

年三回開催される公開講座についても、本年度は前年度に比較して定員を増やし開催することができました。特に、第二回公開講座は同窓会にもご共催いただき、看護師・僧侶である玉置妙憂さんをお招きし、「こころ穏やかに生きるため」のタイトルでご講演いただき、とても好評でした。

令和4年度から、特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同して開設した認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」については、令和5年度は2年目を迎え、入学した20名の研修生については、全員を修了させることができました。次年度は本課程の最終年度になりますが、5月には19名の研修生を迎える予定です。三重大学医学部附属病院の皆様、さらには本教育課程の講義や実習等でお世話になった皆様には、心より御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

令和5年度は第三期中期目標期間の3年目であり、引き続きこれまでの実績と反省点を踏まえつつ、次年度も地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の一層の充実を図ってまいりたいと存じますので、皆様には引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和6年3月  
地域交流センター長  
林 辰弥



# 目 次

・ 巻頭言

## I. 教員提案事業

### 1. みえ保健・看護力向上支援事業（看護職者に向けた取り組み）

1) 看護職者を支援する相談窓口事業	1
2) 「心電図を読もう！」	3
3) 看工連携ものづくりシーズ発掘	5
4) 災害時における新任期保健師の公衆衛生看護活動支援事業	6
5) 実践につなげるフィジカルアセスメント	8
6) 障がい児の切れ目ない就学支援事業	9
7) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪(その2)	13
8) シコウ Upgrade♾️ - 医療機関の高齢者看護	14
9) 仲間とともに育ち合う教育実践講座	17
10) Brush up! 急性期看護 Vol.2	18

### 2. 県民のヘルスリテラシー向上支援事業（県民に向けた取り組み）

1) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業	19
2) 手洗いチェックしてみませんか？	22
3) 医療的ケア児と家族のピアネット支援	23
4) みかん大健康バドミントン教室（中級編）	27
5) みかん大バリスタ for 認知症カフェ	29
6) 赤ちゃんをむかえるママとパパのための「みかん大ハッピーマタニティ教室」	31
7) 私たちに今できる災害の備え	34
8) 子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト	37
9) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援	41
10) みかん大よりみちカフェ	44
11) おいさないさ、みかん大ミニ講座	46
12) みかん大ヘルシーウォーキング体験会	48
13) 看護と情報リテラシー	50
14) 「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援	51
15) みかん大「暮らしの保健室」	54
16) 僕たち私たちでも出来る！夏の危険から身を守るための基礎講座	56
17) みかん大哲学カフェ	59
18) がん患者を有する家族：就学生の集い- I can cope with family -	61
19) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)	63
20) 「英国アフタヌーン・ティー」@みかん大	65
21) 看護職を目指したい小・中学生支援 「スピーチ・コンテスト」@みかん大	67

<b>II. 卒業生支援事業</b>	
1. 卒業生支援プロジェクト	69
2. 卒業生のきずなプロジェクト	72
<b>III. 受託事業</b>	
1. 三重県新人助産師合同研修	77
2. 助産師（中堅者・指導者）研修	81
3. 三重県認知症対応力向上研修	
・三重県病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修	85
・三重県看護職員認知症対応力向上研修	90
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業	94
<b>IV. リカレント教育</b>	
1. 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」	99
2. 認定看護師（感染管理認定看護師）フォローアップ研修	101
<b>V. 地域交流センター企画事業</b>	
1. 講師派遣	
1) みかん大出前講座	103
2) みかん大リクエスト講座	106
2. 看護研究支援	
1) 看護研究SEED	109
2) 看護研究エッセンス	114
3) ハウツー看護研究	117
4) その他の看護研究支援（施設単位看護研究支援・看護研究発表会支援）	121
3. 公開講座	125
<b>VI. 連携</b>	
1. 連携協力協定	129
2. 県内病院等看護管理者意見交換会	130
3. 人事交流教員支援	133
<b>VII. その他</b>	
1. 情報発信・広報活動	135
2. 各種事業案内と申込書	138
・編集後記	

## I . 教員提案事業





# I .教員提案事業

## 【事業要旨】

教員提案事業は、本学教員の教育・研究の成果を地域に還元することを目的としており、本学教員が各自の専門性を活かして、提案し実施する地域貢献事業です。また、大学が保有する人的・物的資源を効率的に活用しながら、成果に繋がりたいと考えています。

事業は、看護職者対象の『みえ保健・看護力向上支援事業』、県民の皆様対象の『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』を企画しております。『みえ保健・看護力向上支援事業』は、保健や看護力向上を目指した支援事業の実施を、『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』は、教員の専門性を活かし、地域住民のヘルスリテラシー向上を目指す事業内容となります。なお、令和4年度から関連するSDGsの目標を掲げて活動しており、今年度は下記の9の目標にアプローチしました。

SDGs 「Sustainable Development Goals」	目標に アプローチする 事業数
3.すべての人に健康と福祉を	23
4.質の高い教育をみんなに	12
5.ジェンダー平等を実現しよう	4
8.働きがいも 経済成長も	2
9.産業と技術革新の基盤をつくろう	2
10.人や国の不平等をなくそう	3
11.住み続けられるまちづくりを	5
16.平和と公正をすべての人に	2
17.パートナーシップで目標を達成しよう	5

## 『みえ保健・看護力向上支援事業』

No	事業名	No	事業名
1	看護職者を支援する相談窓口事業	6	障がい児の切れ目ない就学支援事業
2	「心電図を読もう！」	7	医療施設に広げよう看工連携による 特許の輪(その2)
3	看工連携ものづくりシーズ発掘	8	シコウUpgrade? - 医療機関の高齢者看護
4	災害時における新任保健師の公衆衛生看護活動支援事業	9	仲間とともに育ち合う教育実践講座
5	実践につなげるフィジカルアセスメント	10	Brush UP! 急性期看護 vol.2

『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』

No	事業名	No	事業名
11	社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業	21	おいないさ、みかん大ミニ講座
12	手洗いチェックしてみませんか？	22	みかん大ヘルシーウォーキング体験会
13	医療的ケア児と家族のピアネット支援	23	看護と情報リテラシー
14	みかん大健康バドミントン教室（中級編）	24	「認知症の人にやさしく寄り添う」 ための相談・支援
15	みかん大パリストafor認知症カフェ	25	みかん大 暮らしの保健室
16	赤ちゃんをむかえるママとパパのための 「みかん大ハッピーマタニティ教室」	26	僕たち私たちでも出来る！ 夏の危険から身を守るための基礎講座
17	私たちに今できる災害の備え	27	みかん大哲学カフェ
18	子どもたちに 「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト	28	がん患者を有する家族：就学生の集い - I can cope with family -
19	在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援	29	Re-mamma ReCafé (リマンマ リカフェ)
20	みかん大 よりみちカフェ	30	「英国アフタヌーン・ティー」@みかん大
31	看護職を目指したい小・中学生支援 「スピーチ・コンテスト」@みかん大		

## 1. みえ保健・看護力向上支援事業



# 1) 看護職者を支援する相談窓口事業

担当者：中西貴美子、小池敦、安部彰、上田貴子、多久和有加

## 【事業要旨】

三重県内の病院看護部の管理部門を対象に、キャリア・看護管理、教育・進学等に関する相談に対応し、組織の問題解決を支援する。また、社会的な背景から、病院看護部の管理部門が抱えていると思われるテーマを取り上げ、話題を提供するとともに、ディスカッションをする場を定期的に設け、組織内で解決するヒントとなるような機会を提供する。

## 【地域貢献のポイント】

施設の看護部が抱えている問題・課題について支援する場所が増えることによって、相談しやすくなり早期解決につながる。また、大学という第三者の立場からの支援は新たな視点での取り組みとなり、必要な組織の変革を促進することができる。以上のことによって三重県内の施設の看護の質の向上に寄与する。

## 【昨年度からの課題】

令和2年より3年間事業を実施した結果から、計画した相談窓口や意見交換の場を継続的に提供していくことには意義があると思われ、第2期として相談事業を継続している。従来から地域交流センター事業として開催されている「病院等看護管理者意見交換会」と並行して、病院施設相互の意見交換を主とする本事業を継続し、県内施設に貢献していく。

## I. 活動計画

[重点課題] 相談窓口について、県内病院への認知度を高める。

[数値目標] 意見交換会において前年度より多くの出席者が参加する。

[実施計画]

1. 看護職者を支援する相談窓口事業企画として、看護管理者情報交換会を実施する。
2. 県内病院への認知度を高めるための企画を検討する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 意見交換会

1) テーマ：コロナ禍の経験から改めて倫理を考えるー倫理教育の現状と課題ー

2) 開催日時：令和6年1月30日（火）13：30～15：00

3) 参加方法：対面（およびオンライン）会議

申込時に対面かオンラインかの方法の選択ができるようにしたところ、参加者の全員がオンラインでの参加となった。

### 4) プログラム

13：30～13：45 話題提供（担当：安部）

13：45～14：30 意見交換

14：30～15：00 意見共有・まとめ

5) 当日参加者数 5施設 11名 (令和4年度: 2施設2名)

6) アンケート結果 (回答数6件: 回収率55%)

(1) 参加者概要

看護部長3名、副看護部長3名、看護師長4名、スタッフ看護師1名

(2) 企画の内容

希望に沿う内容: とてもそう思う4名(67%)、そう思う2名(33%)

(自由記述) 倫理的課題について気づかされた

役に立つ内容: とてもそう思う3名(50%)、そう思う3名(50%)

(自由記述) 今後の現場に反映できると感じた

指導教育のヒントが得られた

(3) 開催時期

開催時期 (1月30日)	人数 (名)	割合 (%)
ちょうどよかった	4	67.0%
もっと早い時期がよかった	2	33.0%

開催時期 (希望)	人数 (名)
7月~9月	2
10月~12月	1
1月~3月	3

(4) 開催方法 (ZOOM開催): よかった 6名 (100%)

(自由記述) 参加しやすいので良かった、ハイブリット希望

(5) 今回の企画に対する満足度 (1~5点): 平均4点

## 2. 相談窓口事業

1) 相談件数: 0件

2) 県内病院への認知度

意見交換会のアンケートにおいて、関心がないという回答の施設が1施設あった。

### [評価]

意見交換会について、昨年度より出席者は増えてアンケートでは良い結果を得られた。今後も継続し、参加者を増やし活発な意見交換ができるよう工夫が必要と思われる。

相談事業について、実際の相談はなかった。今後、意見交換会以外の広報を検討する。

## III. 今後の課題

相談事業の認知度を高めるためにも、9月に大学主催の看護管理者意見交換会において、企画の情報が提供できるよう準備を進め、参加者の増加を図る。

## 2) 心電図を読もう！

担当者： 関根由紀、菅原啓太

### 【事業要旨】

本事業は、心電図を少しでも身近に感じ判読する力をつけるために刺激伝導系の理解をはじめ、心電図波形の基本から臨床で遭遇する不整脈の判読、不整脈出現時の対応を理解し、日々の看護実践に活用できることを目的とする事業である。参加対象は、集中治療室や循環器病棟といった部署は問わず、心電図に興味あるいは苦手意識のある方とした。

### 【地域貢献のポイント】

県内の医療機関において日常的に心電図に触れる機会のある集中治療室や循環器病棟に所属する看護師に限らず、心電図に興味・関心、苦手意識のある方が参加できる事業である。研修会では、心電図波形の正常と異常の判読のコツ、そして各不整脈における対応を知り、それらの知識を臨床で活用できるようになることで看護スキルの向上や臨床に還元することができ、地域貢献につながると考える。

## I. 活動計画

[数値目標]

本年度の参加目標数は、10名とした。広報活動は、県内の病院を対象に行った。

[実施計画]

企画運営の打ち合わせ：学内2回

日時：令和6年1月20日（土）13:00～16:00

場所：大講義室

プログラム内容：心電図の基本、基本波形を読む、基本的な不整脈を読む、リクエストのあった不整脈の説明と判読

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 研修会参加者

8月に県内医療施設17施設にチラシの送付を行い、参加者を募集した。研修会参加申込み者数は29名、当日参加者は24名（欠席5名）、そのうち6名は卒業生であった。看護師経験年数は1年目～26年目、平均看護師経験年数は6.2年であり、昨年度より経験年数および平均経験年数は高かった。参加者の所属部署は、ICUやHCU、循環器内科病棟、小児科病棟などであった。また、循環器病棟への異動や新卒でICU等の集中治療室に配属となった方も参加されていた。

### 2. 研修会の内容

研修会のプログラムは、臨床でよく目にする心電図波形および不整脈の見方と対応

方法に関する講義および演習に加え、参加者たちの知りたい不整脈を含めた内容とした。本研修会は、グループワークを取り入れ、グルーピングは同じ施設で偏らないように4人1組とした。なお、グループワークではマスクの着用を必須とし、ソーシャルディスタンスおよび換気に留意した。



### 3. アンケート結果

研修会終了後に Microsoft Forms を用いてアンケート調査を行った。その結果、回収率は 66.7%、有効回答率は 100%であった。

研修会の満足度は、満足 75%、やや満足 25%であり、その理由は、「心電図を学ぶ機会が今までなかったのですごく勉強になりました。」「グループで話し合いながらできたため、質問しやすかった」などであった。その反面、「解答や解説が少し速かったです」という意見があった。内容の理解は、理解できた 100%であった。研修会内容の適切性では、適切であった 63%、難しかった 36%であり、昨年度より適切であったという回答が高かった。開催時期は、「この時期でよい」94%、「もう少し早い時期に開催して欲しい」6%であり、その時期は夏あるいは秋頃を希望していた。

自由記述では、「今回基本波形が分かったので、次回は 12 誘導心電図編をしてほしいと思いました。グループワークで話し合いながらの判読は考え方が分かりとても勉強になりました。参加させていただきありがとうございました。」「活動電位や成り立ち、薬理作用などについて詳しく勉強できる機会もあればなと思います。」などの声があった。

[評価]

本年度の研修会においても参加者数は予想を大きく上回り、心電図の判読に対する関心の高さが伺えた。参加者のうち 25%が本学の卒業生であり、昨年度に引き続き卒業後も大学で学ぶ機会を提供することができた。

アンケート調査の結果から、今回の研修会の満足度は高く、開催時期や時間、内容も適切であったと思われる。研修会はグループワークとしたが、メンバーと相談できることで講義内容の振り返りや共有につながった。グルーピングは、昨年度のアンケート調査の自由記述にもあったように所属施設等を考慮し編成したが、これに関する意見はなかった。これらのことから、本事業の目的は達成できたと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

アンケート調査の結果から、研修会の内容は理解できたが、難しかったと回答された方もいた。本研修会は、参加者の看護師経験年数や所属部署が異なるためベースラインの設定が難しいところではあるが、初級編であることや参加者の傾向を踏まえると、心電図の基礎にもう少し時間を設ける必要があると考える。開催時期は、新卒の方や部署異動し初めて心電図に触れる方は早期の開催を望まれるが、現状と同時期で良いと考える。

本事業は、本年度で最終年度となるが、次年度より「心電図を読もう！基礎編」として、本事業が基礎編であることを提示し、継続することを予定とする。



### 3) 看工連携ものづくりシーズ発掘

担当者：斎藤真、大西範和、大川明子、大平肇子、ドライデンいづみ、長谷川智之  
市川陽子、田端真

#### 【事業要旨】

本学は平成 27 年度から（独）工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に採択され、さらに平成 30 年度からは新たな事業制度の下、看護学と工学の接点から創出される知的財産の発掘に注力してきた。本事業の目的は、今後需要拡大が予測される看護ケア用品の開発およびその知的財産の取得を目的に本学教員のアイデアを発掘すること、さらに県内外の企業と看護ケア用品等に関する意見交換を行うことである。

令和 5 年度は、これまでの経験を踏まえ教員同士の看工連携ブレインストーミングに加えて企業との看工連携ブレインストーミングに注力した。

#### 【地域貢献のポイント】

本事業は、本学の教員や大学院生の持つ知的財産のシーズ発掘や試作品から製品開発、販売に至るまでの地元企業との産学連携をすることも目的としている。したがって、知的財産のシーズ発掘は地方創生の観点からも有用性の高い地域貢献事業である。

#### 【昨年度からの課題】

地域貢献事業として県内外の企業とのブレインストーミングや共同開発等を行う。

#### I. 活動計画

1. 看工連携ブレインストーミングを開催し、シーズ発掘につなげる。
2. 県内外の企業と共同で看工連携ブレインストーミングを開催する。(2 件以上)

#### II. 活動の結果と評価

活動は「看工連携ブレインストーミング」を 3 回開催した(6/26、9/1、3/7)。そのうち 9/1 および 3/7 は県外企業(A社、B社)との看工連携ブレインストーミングであった。はじめに化学メーカーである A 社と自社製品の看護領域における新たな活用法、更には新製品開発にあたり未だ満たされていないニーズについて議論を行った。次にセラミック関係の B 社とはメディカル事業の看護領域における活用・評価、さらに在宅医療やデジタルヘルス関係の取組と課題に関する議論を行った。いずれも企業が製品の開発に看護学の知見を取り入れることの必要性和本学の看工連携事業の趣旨が一致した結果である。企業とのブレインストーミングは 2 回開催し、数値目標を達成した。

#### III. 今後の課題

今後の課題は、企業との共同研究および製品開発を活発に展開することである。

## 4) 災害時における新任期保健師の 公衆衛生看護活動支援事業

担当者：清水真由美、日比野直子、中北裕子、荻野妃那、一尾麻美

### 【事業要旨】

新任期保健師に、災害時における住民支援方法について知識技術の提供を行うとともに、避難所運営ゲーム(HUG)を通じて、公衆衛生看護の実践能力の向上を目指す。

### 【地域貢献のポイント】

1. 新任期の保健師に災害時の活動に関する知識技術を提供することで、公衆衛生看護活動の充実につながる。
2. グループワークを通じて圏域を越えた保健師同士が交流することで、保健師ネットワークを促進することができる。

### I. 活動計画

[数値目標]

1. 新任期保健師を対象にした研修会
2. 参加者 20 名程度
3. アンケートによる研修評価

### II. 活動の結果と評価

[結果]

#### 1. 研修会の周知

三重県医療保健部の協力を得て、県統括保健師経由で県保健師・市町保健師等への研修の周知とチラシの配布を依頼した。

#### 2. 研修会の開催

- 1) 日 時：令和 5 年 9 月 8 日（金）13 時 00 分～17 時 00 分
- 2) 場 所：三重県立看護大学 大講義室
- 3) 参加者：24 名
- 4) 内 容：(1) 講義：「災害時における公衆衛生看護活動」  
講師：中北裕子  
(2) 報告：「紀伊半島大水害を振り返り今後に備える」  
講師：日比野直子・中北裕子  
(3) 演習：「避難所運営ゲーム (HUG) から学ぶ住民支援方法」  
講師：荻野妃那・一尾麻美  
(4) HUG 振り返り・まとめ 清水真由美



【避難所運営ゲームを行う参加者】

## [評価]

参加者 24 名の経験年数別内訳は、1 年目 19 名、2 年目 1 名、3 年目 3 名、6 年 1 名であった。所属別内訳は、県 9 名、市町 15 名であった。なお、参加者 24 名のうち 8 名が本学の卒業生であった。

アンケート回答者は、23 名（回収率 95.8%）であった。研修を受けたきっかけは、「災害活動の学びを深めたい」が最も多かった。研修に対しては、「満足」19 名、「やや満足」4 名であり、その理由としては、『避難所運営のリアルな感じをイメージできた』、『HUGを通して他地域の保健師と繋がりができた』、『紀伊半島大災害で保健師がどのように対応にあたっていたか、どのように情報を統制していたかを学ぶことができた』などがあつた。HUGに対しては、「有意義」21 名、「どちらでもない」2 名であり、『実際の災害現場を想定した体験ができた』という一方で、『早すぎてわからなかった部分もある』、『もう少し深くグループで考えられる時間があるといいと思った』という意見があつた。

新たな気づきについては、23 名が「あつた」と回答し、具体的には、『所属市の特徴などをしっかり学ぶ必要があると改めて気づいた』、『市職員として、保健師としてしっかりと働けるように準備しなければならないと気づいた』、『避難所での保健師としての役割を学んだ』などであつた。今後の活動への有用性については、23 名が「役立つ」と回答し、『自分が応援に行った時も、受援の準備をする時にも活用できる』、『避難所運営など被災時の様子が理解できた』などの意見があつた。また、23 名全員が「本研修の参加を同僚や後輩に勧める」と回答した。研修時間については、「適切」22 名、「長い」1 名であり、『もう少し短時間の方が、集中力が持つ』という意見があつた。研修時期については、23 名が「良い」と回答した。

参加者数は目標を達成できた。また、本研修により、参加者は災害対応のイメージや心構えを持つことができ、災害時の保健師の役割の重要性、自らが担うべき役割の認識、平時からの備えに対する意識を高めることができた。さらに、グループで HUG に取り組むことで、参加者間の交流が深まり、圏域を越えた保健師のネットワークづくりを促進することができた。本研修に対する満足度は高く、保健師活動への有用性についても肯定的な評価を得られた。以上のことから、新任期保健師に対する災害時における住民支援方法について、今後も継続的に研修会を開催する意義はあると考える。

## Ⅲ. 今後の課題

参加者の多くが所属機関の公用車により来場していたため、研修後は職場に戻る必要があつた。しかし、研修終了が 17 時であつたため、ラッシュアワーと重なり、帰宅時間が遅くなるという意見が聞かれた。次年度は午前より研修を開始し、遅くとも 16 時には研修を終了できるように調整していきたい。

## 5) 実践につなげるフィジカルアセスメント

担当者：岡根利津

### 【事業要旨】

県内の認定看護師や呼吸療法士が講師を担い、現場のニーズに沿った「呼吸ケア」に関する研修を企画・開催する。年度ごとにサブテーマを設定し、講義やグループワークなどを取り入れながら、実践につなげる知識を習得できることを目指す。

### 【地域貢献のポイント】

呼吸ケアに関する研修を継続的に県内で開催することにより、標準的な知識の普及とアセスメント力の向上につながる学習の機会を提供することができる。また、コメディカルを対象とすることから、個人の能力の向上のみならず、多職種間の共通認識が促進されチーム医療の質の向上にもつながると考える。

### 【昨年度からの課題】

参加人数について、COVID-19などに伴う臨床現場の状況を鑑みて開催時期を検討し、数値目標達成に近づけることが課題であった。

## I. 活動計画

[数値目標]

参加人数（ハイブリッドでの開催を想定） ①オンライン：20名 ②対面：20名

[実施計画] COVID-19の感染状況を考慮して、開催時期を決定した。

- 日時：令和5年10月21日（土）13:00～17:00
- 開催方法：対面もしくはzoomでのオンライン参加
- プログラム：いまさら聞けないバイタルサインの基本、ワークショップ①  
いまさら聞けない検査・画像の解釈と早期離床、ワークショップ②

## II. 活動の結果と評価

[結果および評価]

参加者は20名（対面9名、オンライン11名）であり、全員が看護師であった。数値目標には至らなかったが、本事業のこれまでの実績を考慮すると、数値目標の設定が高かったと考える。17名（回収率85%）のアンケート結果より、フィジカルアセスメントを深めたいという理由で参加された方が最も多く、9割以上の方が研修内容に満足であったと回答していた。また、ワークショップでは、Google Formの活用により他者の意見を見ることができ勉強になったという感想もあり、全員が今後の実践に活かすことのできる研修であったと回答していた。

## III. 今後の課題

今年度は、COVID-19の感染状況が少し落ち着いた時期に開催したこともあり、昨年度より多くの方に参加していただくことができた。今後も事業を継続し、県内のコメディカルの呼吸ケアに関するアセスメント力の向上に寄与したいと考える。

## 6) 障がい児の切れ目ない就学支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、川瀬浩子、中北裕子

### 【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医療的ケア児）が在籍する特別支援学校・保育所・幼稚園等に勤務する看護職等の専門職は、配置される同職者が少なく、不安や戸惑いなどの困難感を抱えている現状にある。本事業は、医療的ケア児に対応する専門職同士の情報交換や資質向上を図ることを目的とした交流の場づくりを支援する事業である。

### 【地域貢献のポイント】

行政・教育・医療・福祉の専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、教育や福祉の場に携わる専門職者の交流を求めるというニーズへ対応する。医療的ケア児が通園する保育所、幼稚園、認定こども園等に勤務する看護職は、1人配置のことが多く、日々不安や戸惑いなどの困難感を抱えている現状に対し、配属施設を超えた専門職同士の情報交換や交流の場を通してネットワークづくりを支援する。

### 【昨年度からの課題】

COVID-19の状況で業務上の日程調整が難しい場合でも、可能な少人数での開催や、開催方法も対面・オンライン・ハイブリッド等の検討・工夫を行い、障がい児の切れ目ない就学に係る看護職等のネットワークづくりを支援する。

## I. 活動計画

[数値目標]

1. 事業の開催：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
3. 参加者：5名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

[実施計画]

1. 事業実施のため行政や保育機関等と連携しながら関係者が参加しやすい日程、オンライン等の活用方法を検討し関係機関に広報を行う。
2. 事業の実施
  - 1) 医療的ケア児の受け入れを経験した行政および保育施設の看護師等の交流会を開催する。
  - 2) 事業評価のためのアンケートを実施して評価する。
  - 3) 学生ボランティアを募集し医療的ケア児を取り巻く環境の理解につなげる。
3. 事業後にアンケートを実施し、課題の検討を行う。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 障がい児の切れ目のない就学支援に関わる関係者の意見交換会

## 1) 概要

### (1) 日時・場所・方法

令和6年2月16日(金) 14時00分～16時00分 於：三重県立看護大学  
会場参加16名とオンライン参加3名

### (2) 参加者・関係者

行政関係者：A市3名(看護師・保健師)、B市2名(行政・教育委員会)、  
C市2名(看護師)、D市3名(行政・保健師・保育士)

施設関係者：相談支援専門員1名

本学関係者：修了生1名(看護師)、卒業生2名(看護師・保健師)、本学学生2名、  
本学教員3名(看護師・助産師)

## 2) 内容について

本事業の趣旨と取り組みについて説明し、以下のプログラムを行った。

- (1) 調査報告：本学関係者から、医療的ケア児に関わった経験のある行政と保育所看護職の思いに関する調査報告を行った。
- (2) 意見交換会：各行政からは、医療的ケア児を受け入れるにあたって工夫した取り組みや整えた資料等について意見交換がされた。また、保育所等の看護職からは専門職1人での対応で困ったことや悩みについて意見が出された。施設関係者からは医療的ケア児の母親や家族からの要望や期待の声などの紹介があった。





### 3) アンケート結果

19名参加のうち17人（回収率89.5%）から回答が得られた。

本事業の満足度は17名（100.0%）が満足（満足～不満の4件法）と回答した。

<そのように思った理由（一部抜粋）>

- ・ 普段、交流のない方と交流でき、ありがたいです。
- ・ たくさんの方の意見が聞ける貴重な時間だった。
- ・ 他市町の状況が聞けたことがとても嬉しかったです。
- ・ 各市町の取り組みの実際や、悩み、課題を直接聞くことが出来たから。
- ・ 医療的ケアにかかわる看護師の状況が分かった。また、他市の状況がわかり参考になった。
- ・ 他市の保育所看護師の状況を知ることができた。
- ・ 他職種の立場からの意見が聞け、勉強になった。
- ・ 各市町の方の意見も病院勤務の看護師の方の意見も改めてお聞きできて良かった。
- ・ それぞれの立場、他市の実情を聞かせてもらえてよかった。時間がもう少しあっても良かったと思う。
- ・ 何もなかった時代からの、大きな変容を感じました。
- ・ 最前線の話しを聞くことができたので。

<本事業で印象に残ったこと（一部抜粋）>

- ・ どの市でもやっぱり看護師不足は課題となっていて、他職種連携を求めている声が多いということがわかった。
- ・ 法律ができたことによる不安の増大もあるということが印象的だった。
- ・ 看護職の配置、離職についての問題。
- ・ 他職種連携もですが、看看連携が大切だと思いました。
- ・ 病棟とは違う看護師の困難さを学んだ。
- ・ 鈴鹿市をはじめ、他市の進んだ取り組み（正職看護師の配置等）。
- ・ いろいろと取り組めそうなことがありました。
- ・ 少し前へ進めそうです。
- ・ 法律施行後に、4つのセンターが開設されて相談もできる場所ができたこと。

<本事業への要望（一部抜粋）>

- ・ 今後も定期的に続けていただきたいと思います。

- ・こんな企画をして頂いたことに感謝です。また、開いて下さい。
- ・ぜひ、意見交換会を継続してほしいです。次年度も開催してほしい。
- ・やはり定期的に会を開いていただくと嬉しいです。
- ・このような意見の交流は本当に大切だと感じました。
- ・オンラインでの出席が可能だったため、大変助かりました。担当室長にも出席をお願いしやすかったです。
- ・医療的ケア児を受け入れる中での、災害時の対応や、備えていることなどの交流をしたい。
- ・看護師が一人で背負っていることの大変さを感じた。また、そういう情報交換や交流の大切さについて痛感した。
- ・市内だけでなく、他市町との情報交流などがあれば離職や孤独感の解消につながると感じた。

#### [評価]

目標値についてはすべて達成することができた。参加者アンケートの結果及び参加者の肯定的な声からも本事業の参加者の評価は高く、日ごろ交流の難しい保育所勤務の看護職がもつニーズに対応することができたと評価できる。また、各行政の課題についても他市の情報を共有することで、解決策の参考や糸口になったと思われる。

本学の学生や修了生も参加することができ、病院内の看護職とは違う行政や保育所の看護職の困難を知る機会になった。本事業は、各施設や市を超えた看護職のつながりやネットワークづくりの一助になったと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

保育所等に入所する医療的ケア児の疾患や必要な処置・ケア内容は様々であり、ケアの内容も重複しているなど、個々の子どもにあった関りや対応が求められるなど、保育所・幼稚園等に勤務する看護職等の不安要因は多い。そのうえ、相談できる同職者が施設内にいないなど、不安や戸惑いなどの困難を抱えている現状が続いている。

今後も、医療的ケア児に対応する専門職同士の情報交換や資質向上を図ることを目的とした学びの機会、ネットワークづくりを支援していく必要がある。開催にあたり、全ての参加希望者の要望時間を調整することは難しいが、オンラインでの参加を組み入れるなどしながら南北に長い県内各市のネットワークの繋がりを深めていくことが必要と考える。



## 7) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪 (その 2)

担当者：齋藤真、大川明子、大西範和、大平肇子、長谷川智之、市川陽子、岡根利津

### 【事業要旨】

本事業は、地域の医療機関と連携して看護実践に役立つケア用品の開発を目的としている。本学教員がファシリテータとなり、県内の各医療施設のスタッフと看護における困りごとを話題に「発明ブレインストーミング」を行い、解決策として知的財産となり得るシーズを発掘する。ここで取り扱われた研究は、各医療機関の院内研究として活用することも視野に入れている。

### 【地域貢献のポイント】

「医工連携」は多々あるが、「看工連携」の活動例はない。地域の医療施設の看護部が知財を保有し、それを有効に活用している例は皆無である。県立大学が地方の医療機関を活性化する手段として、知財発掘とその有効活用が地域貢献である。

### 【昨年度からの課題】

今年度も未だに続く新型コロナウイルス感染拡大のため、活動は停止している。新型コロナウイルス感染の影響がなくなり次第、各医療機関に出向いて「発明ブレインストーミング」を開催することができるよう準備を進める。

## I. 活動計画

### 〔重点課題〕

地域の医療機関に「知的財産」の必要性、「看工連携」の概念を広める。

### 〔実施計画〕

年間 5 件程度の医療機関に参加してもらい、看工連携ブレインストーミングを実施する。さらにそれらを院内研究に発展させる。

## II. 活動の結果と評価

### 〔結果〕

令和元年度に 3 病院を対象に「発明ブレインストーミング」を開催したが多くの病院が外部者の訪問に制限を加えていることから、事業を停止している。

### 〔評価〕

令和 5 年度は開催していないため、評価は困難である。

## III. 今後の課題

新型コロナウイルス感染拡大が収束し、各医療施設の許可が下りた時点で「発明ブレインストーミング」を再開することになっている。

## 8) ショウ Upgradeのー医療機関の高齢者看護

担当者：田端真、清水律子

### 【事業要旨】

高齢者は健康障害とともに生活することが多くなるため、医療機関の看護職者は高齢者のもてる力に着眼し、望む生活を見据えた目標志向型思考を用いていくことが大切である。そこで、看護職者が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深め、高齢者への看護の能力向上につなげることを目的に、医療機関の看護師を対象に講座を実施する。

### 【地域貢献のポイント】

1. 看護職者の老年看護に関する学習機会となり生涯学習の一環となる。
2. 医療機関における高齢者への看護の質の向上に寄与する。
3. 看護学実習受け入れ病院の学生への教育の質の向上につながる。
4. 高齢者の望みや生活（暮らし）を見据えた看護により地域包括ケアシステムの構築に沿う取り組みにつながる。

### 【昨年度からの課題】

1. 事業の目的に沿った活動に向け参加しやすくかつ確実に参加できる様式を検討する。
2. 参加者の幅をさらに広げる。

## I. 活動計画

### 〔重点課題〕

医療機関の状況に応じて本講座に参加しやすい様式を構築する。講座を受講することにより参加者全員が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深める。

### 〔実施計画〕

1. 連携協定病院を対象に看護部教育担当者と講座に関する打ち合わせを行う。特に、参加者の選定と開催方法は施設のニーズを把握して具体的な実施計画を立案\*する。
2. 看護師の交替勤務の状況を配慮し\* 1施設内で数回の講座を開催する。
3. 年度末までに参加者に対して受講後の看護活動に関するアンケート調査を実施し、講座の評価および課題を明確化する。 (\*:昨年度の課題を反映)

## II. 活動の結果と評価

### 〔結果〕

#### 1. 講座の実施と内容

連携協定病院の看護部教育担当者と連絡調整を行い(図1)、2施設で講座を実施した。開催日時は、参加者の勤務等の状況を優先して9月19日、10月2日・16日、11月13日・27日、12月11日・14日とし、時間は看護部教育担当者と柔軟に調整した。参加者については、本講座の内容の定着のためにもう一度参加したいという意向を受けて昨年度の参加者11名を含めた合計28名であった。各施設の会議室にて、パワーポイントの映写と配布資料を用いて45分程度で講義形式の講座を行った。

内容は、①高齢者への看護の考え方、②目標志向型思考とはどんな思考か、③事例を用いての目標志向型思考による看護展開の例示、とした。

## 2. アンケートの結果

### 1) 参加者の属性と受講後の反応

講座後に参加者へのアンケートを行った。

アンケートは28部配布し、本年報への使用に同意が得られたのは26部であった。参加者の属性を表1、参加者の反応を図2および表2に示す。

本講座への参加者の年代は20代から50代と幅広く、今年度の本学の老年看護学実習の実習指導者と経験者は約2割であった。

「目標志向型思考」を知っていたかについては、14名が「はい」であり、どこで知ったかは、「昨年度の本講座」が10名、「介護の視点の研修会」「実習中に教えてもらった」「大学での学習」「無回答」がそれぞれ1名であった。

本講座の受講を通して、講座のタイトルにある

「シコウ」を一番当てはまりがいいと感じる漢字で表すとするならという問いには、約4割が「思考」であり、その他に「志向」などの7の漢字があげられた。漢字を当てはめた理由は「自分の考え方や思いなども、新しい知識を取り入れてアップグレードしていく必要性を感じたから」「今の自己の思考をさらに高める必要があると思いました」「高齢者の看護について考えていく必要があると思ったから」「高齢者の望む生活について考えたり、そのために意思確認や他職種との連携が大切だと思ったから」「思いや、のぞんでいる生活について一緒に知り、共に考えストレスをみつけだしていくという点で」など様々なものがあげられた。

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための要点を知ることができましたか、「目標志向型思考」を理解することは高齢者看護の能力の向上につながると思いますかについては、「できた」「思う」の回答がそれぞれで7割以上であった。

表1 参加者の属性

項目	内訳	人数
年代	20代	1
	30代	8
	40代	10
	50代	7
「目標志向型思考」を知っていたか	はい	14
	いいえ	12

令和5年度 三重県立看護大学地域交流センター 教員提案事業  
シコウUpgrade-医療機関の高齢者看護

高齢者は健康障害とともに生活することが多くなるため、医療機関の看護職者は、高齢者のもてる力に着眼し、望む生活を見据えた目標志向型思考を用いていくことが大切です。  
そこで、学生の実習指導を担当している本学の教員が目標志向型思考で看護を展開するためのエッセンスを紹介します。  
学生指導や日々の高齢患者様への看護に・・・  
高齢者看護のアップグレードを目指しませんか!?

開催日時  
令和5年9月～令和6年1月の老年看護学実習前・期間中  
それぞれのご都合に合わせて決定します。  
講座の所要時間は、45分程度です。  
(1施設につき同内容で2～3回を予定)

開催場所  
各施設の控室等

対象者  
学生指導を担当される看護師様  
高齢者看護に興味のある方

目標志向型思考とはどんな思考か  
日々の高齢者看護にどのように取り入れていくのか  
事例の「アセスメント」「看護の焦点の明確化」「看護計画の立案」  
をとおして考えます

\*継続事業のため、令和4年度の内容と同じです

図1 事業チラシ

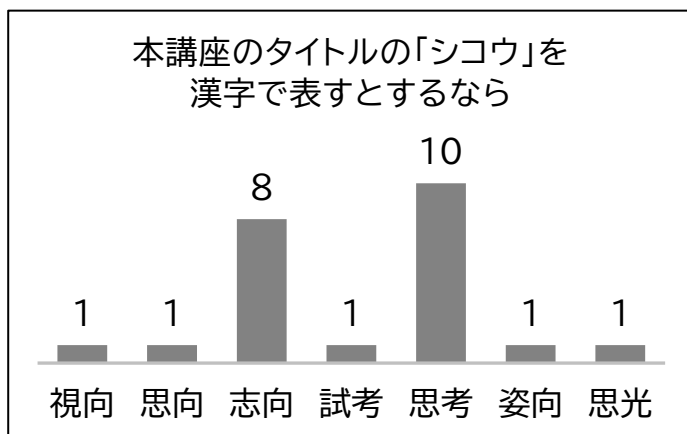


図2 参加者の反応①

表 2 参加者の反応②

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための要点を知ることができましたか	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
	19	7	0	0
「目標志向型思考」を理解することは高齢者看護の能力の向上につながると思えますか	思う	少し思う	あまり 思わない	思わない
	23	3	0	0

## 2) 自由記述の内容

本講座の感想を自由記載として設定した。結果、「目標志向型思考のことを初めて聞いて私自身、高齢者看護を行うにあたり問題立案に迷うことがあり、今回の講座を聞いてこのような考え変え方、焦点の当て方とても参考になりました。」「臨床では問題点ばかりに焦点を当てがちなので、患者の強みに焦点を当て可能性を広げていく看護は素晴らしく、私たちも意識していきたいと思いました。」「長期入院の方がみえますが、その方なども、このような視点で看護できたら、患者のその人らしい生活が送ってもらえるだろうと感じた。」「何十人もの看護師が同じ講義を受け仲間にしていきたい。学生への支援だけにとどまらず、スタッフへの支援や指導に同じように関わることができれば高齢者看護の捉え方が少しずつかわり、高齢者のもてる力を活かした本人の目標が共に立てていけたら、どんなに素晴らしいかと感じた。」「今年は病棟でもこの目標志向型を取り入れています。」など、今後の高齢者看護や実習指導への展望、今年度の取り組みを含めた感想が得られた。

### [評価]

重点課題に対応するため、参加者の勤務の状況を踏まえて看護部教育担当者と随時の調整を行い、複数回の講座開催日時を設定したことで参加しやすい体制をとることができたと考える。また、参加者の幅を広げることに加え、繰り返し受講したい参加者の意向を反映したことで目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深めることにつながっていると考えられる。今年度は、「多くの看護師を仲間にしていきたい」「病棟で取り入れている」のような個人単位から病棟単位の展望もみられた。そこで、引き続き課題を達成させていくとともに、次年度は受講後の変化や臨床での状況などのリアクションにも着目していきたい。

## Ⅲ. 今後の課題

本事業を継続して計画的に取り組むとともに、受講後の変化や臨床での状況などのリアクションに着目し、個人および集団への効果について捉えていく。

## 9) 仲間と育ち合う教育実践講座

担当者：上田貴子、ドライデンいづみ、岡根利津

### 【事業要旨】

本事業は、後輩指導や学生指導など教育に携わる看護職者が、学びを通して教育能力を高めるための教育実践講座である。毎回テーマを決めて、調べる・作成する・実践するといった教育実践を行う。参加者全員がともに学び合うことで、自らの教育力を高めていくことを目指す。

### 【地域貢献のポイント】

- 看護大学の専門知の提供
- 大学施設設備（教室・情報処理室・体育館など）、情報機器（パソコン・プロジェクタ・マイク・実物投影機など）、通信サービス（インターネット通信・Wi-Fi）、教育用ソフト（統計ソフト SPSS・Office365 機能など）の活用機会の提供
- 大学図書館およびリファレントサービス（資料検索・データベースなど）の提供
- 県内看護職者の自己教育力向上に寄与

### I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 開催回数：3回程度
- ・ 事業参加者：3名以上／1回

[実施計画]

1. 参加者の募集（広報）
2. 運営方法
  - ・ 大学施設設備や情報機器等を使用して教育実践を行う。
  - ・ 教育実践は、グループ単位で、参加者一人ひとりが主体となって行う。
3. 教育実践の内容
  - ・ 教育活動に関連したテーマを設定し、テーマと関連する教育活動を特定する。
  - ・ 教育活動が「調べる」「作成する」「実践する」のいずれに該当するのかを特定し、教育実践を行う。

### II. 活動の結果と評価

[結果]

看護職者への広報（パンフレット配布）およびニード調査を実施。

[評価]

本事業に関心を寄せる看護職者は多く、個別に相談を受ける機会は複数回あった。しかし、参加申込には至らなかったことが今後の検討課題である。

### III. 今後の課題

個別申込や対面開催（大学）が、本事業への参加ハードルを高くしている印象がある。開催方法を柔軟にすること、広報活動の対象を教育担当者に絞ることなどを検討する。

## 10) Brush UP！急性看護 vol.2

担当者：岡根利津、玉田章

### 【事業要旨】

三重県内の認定看護師（集中ケア・救急看護）が講師を担い、急性期看護に携わる看護師を対象とした研修を開催する。フィジカルアセスメントをはじめとする基本的な知識の習得を基盤として、アセスメントの言語化や教え方の学習など、臨床で役立つ学習の場を提供し、県内の急性期看護の質の向上を目指す。

### 【地域貢献のポイント】

三重県において、クリティカルケア領域に関する認定看護師や専門看護師などの熟練看護師は少なく、限られた施設に所属している状況である。本研修では、熟練看護師が連携し講師を務め、県内の状況を考慮し、さらにニーズに応じた研修を開催することで、施設ごとの教育の差の解消、標準的な知識を共有できる機会となり、急性期看護の質の向上につながると考える。

### I. 活動計画

〔数値目標〕 参加人数：20名

〔実施計画〕 テーマ：呼吸・循環・脳神経系のアセスメントのポイント～今すぐ使える考え方を学び、実践につなげよう～、日時：令和5年11月12日（日）、研修内容：呼吸・循環・脳神経系に関する講義、状態変化時のアセスメント（事例を用いてアセスメント）

### II. 活動の結果と評価

〔結果および評価〕

申込者は16名であり、うち1名は卒業生であった。当日は体調不良等の理由で参加者は12名（対面10名、オンライン2名）に減数したが、概ね数値目標を達成したと考える。研修受講の理由として、アセスメント力を高めたいという回答が最も多く、研修評価は、9割以上の方が午前の講義と午後のGWともに高い満足度であったと評価しており、全員が今後の実践に活かせると回答していた。また、8割以上の方が、研修目標を達成できたと評価しており、ニーズに適した研修であったと考える。

### III. 今後の課題

本事業は、昨年度までの事業を継続して開催しており、標準的な知識の共有や教育格差の解消など、県内の急性期看護の質の向上につなげていくため今後も継続していく。



研修の様子

## 2. 県民のヘルスリテラシー向上支援事業





# 1) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業

担当者：宮崎つた子、中北裕子、長谷川明子、上杉佑也、川瀬浩子

## 【事業要旨】

本事業は、地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供し、同じ状況の親・家族同士の仲間づくりを支援する事業である。

## 【地域貢献のポイント】

地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供し、仲間づくりを支援する。この支援を通して、親や家族の養育に関する悩みの軽減、社会的養育のもとで暮らす子ども達にとっての健やかな育ちの場の支援に貢献する。

## 【昨年度からの課題】

COVID-19の感染の影響から小規模な交流会しか開催できなかったため、感染予防対策を行いながら安全な交流会やイベント支援方法を検討する。そして、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供して、仲間づくりを支援できるように努める。

## I. 活動計画

[数値目標]

1. 福祉、関係機関・団体から協力・連携希望：1件以上
2. 親や家族の交流会の開催支援回数：1回以上
3. 親や家族の交流会の参加人数：延べ5人以上
4. 参加者のアンケートの満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
5. 学生ボランティア：1名以上

[実施計画]

1. 関係団体と支援事業内容の検討と各開催日程の調整を行う。
2. 開催日程決定後、学生ボランティアの募集を行う。
3. 連携団体と連携して、親や家族の交流会を企画、実施・運営を行う。
4. 参加者と学生ボランティアとして参加した学生へのアンケートを実施し、満足度や意見等から事業評価および課題の検討を行う。
5. 学生ボランティア：1名以上

## II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 勉強会および交流支援
  - 1) 勉強会支援
    - (1) 日時・場所

令和6年9月17日（日）10時00分～12時00分 三重県立看護大学

(2) 参加者・関係者

参加者 33名（里親 21名、子ども 11名）

支援者 19名（教員 4名、外部の専門職 4名、学生ボランティア 11名）

2) みかん狩り支援

(1) 日時・場所

令和6年11月5日（日）11時00分～14時00分

松阪五桂池ふるさと村みかん園

(2) 参加者・関係者

参加者 21名（里親 12名、子ども 9名）

支援者 8名（教員 2名、外部の専門職 2名、学生ボランティア 4名）

3) クリスマス会支援

(1) 日時・場所

令和6年12月2日（土）11時00分～14時00分 松阪農業公園ベルファーム

(2) 参加者・関係者

参加者 22名（里親 12名、子ども 10名）

支援者 5名（教員 1名、外部の専門職 1名、学生ボランティア 3名）



## 2. アンケート結果

### 1) 参加者

(1) 勉強会：アンケートは 24 名から回収できた。勉強会の内容についての満足は「とても満足」19名、「満足」5名で満足度（5件法）の平均 4.79 点であった。自由記載には、「具体的な事例もあり、わかりやすかったです」「愛着について、よく言われているが深く知ることができた」「長年疑問に思っていたことを知ることができました」「新しい情報もありました」「子育ての仕方、コミュニケーションについて参考になった」など、肯定的な意見が多かった。

## 2) 学生ボランティア

### (1) 勉強会 (託児)

満足度 (4 件法) は、9 名が「満足」2 名「やや満足」(満足度平均 3.82 点) であった。今後、子どもに関わるボランティアへの参加希望については、参加者の 11 名全員が「参加したい」と回答した。感想や意見では、「いろんな子どもがいてそれぞれにあった接し方があると思った」「どんな家庭であっても、お子さん自体は無邪気で、子どもがすくすくと育つ環境が必要だと改めて感じた」「お子さんと触れ合える機会により自分の経験にもなりました」「会話は楽しかった反面、小さいお子さんと接することは難しいと感じた」などであった。

### (2) みかん狩り

満足度 (4 件法) は、参加者 4 名全員が「満足」であった。今後、子どもに関わるボランティアへの参加希望については、全員が「参加したい」と回答した。感想や意見では、「子供と一緒にご飯を食べて、今まで食べられなかった嫌いな食べ物を頑張って食べていたことが嬉しかった」「子供と触れ合えてとても楽しく感じた」「子どもたちの様々な性格や気質を捉えるのに時間がかかったけど、関わる中で楽しそうに遊んでくれたのでよかった」「とても楽しかったので予定が合えば次回も参加したい」などがあつた。参加後、「子どもたちが学生のことを覚えていてくれて嬉しかった」「子どもたちの楽しそうな顔が見れて嬉しかった」といった感想があつた。

### (3) クリスマス会

満足度 (4 件法) は、参加者 3 名全員が「満足」であった。参加の理由は「前回参加して楽しさとやりがいを感じたから」「もっと子どもたちと関係を深めたかったから」であった。

#### [評価]

勉強会やイベント内容は、関係団体が年間計画で企画している内容であるため、参加者アンケートの結果は、本事業の支援内容だけを評価した結果ではないが、参加者および学生ボランティアの回答内容から概ね好評であったと評価できる。本支援事業の数値目標および実施計画はすべて達成することができた。

参加者のアンケート結果及び参加者の声から、社会的養育が必要な子どもを育てる里親は、家族同士が出会えたり交流出来る機会を求めている。また、学生ボランティアとして参加した学生のアンケート結果からも、日ごろ子どもに接する機会の少ない学生にとっても学びが多い経験となつていたと思われる。また、継続してボランティア参加することで、参加者との良好な関係性の構築につながつたと評価できる。

## Ⅲ. 今後の課題

アンケート結果及び参加者の声から、社会的養育が必要な子どもを育てる里親は、家族同士が交流出来る機会を求めている。また、子どもの発達に心配を抱えている里親や家族が多く、個々にあつた具体的な支援やサポートにまでは至っていない現状がある。今後も、同じ状況の里親・家族同士の仲間づくりを支援する必要があると考える。

この支援活動を通して、里親や家族の養育に関する悩みの軽減に貢献し、社会的養育のもとで暮らす子ども達にとっての健やかな育ちの場の支援につなげていきたいと考える。

## 2) 手洗いチェックしていませんか？

担当者：上杉佑也、菅原啓太、岡根利津、西山修平、多久和有加、山本奈津美  
米川さや香、竹村和誠、橋本千愛

### 【事業要旨】

新型コロナウイルス感染症の流行以降、感染予防行動への意識が高まり、その重要性も増している現状にある。本事業は地域のイベント・地域住民の交流の場等で、感染予防行動に関する説明や体験を通して、地域住民の健康意識の向上に貢献するものである。

### 【地域貢献のポイント】

1. 本学の教員の専門性の活用
2. 本学所有の機材の有効活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 地域住民の健康意識向上への寄与

### 【昨年度からの課題】

安全を念頭に置いた日程や開催方法を検討する必要がある。

## I. 活動計画

1. 地域のイベント等での事業実施：1回
2. 事業参加者：5名以上
3. 学生ボランティア：2名以上

## II. 活動の結果と評価

[結果及び評価]

社会福祉法人と会議を重ね、通所介護事業所で事業実施を行う予定にあった。施設利用者への広報、実施時の導線確認・役割分担、参加者に説明を行うためのリーフレットの作成、アンケートの作成、ボランティア学生の募集等の準備が済んでいたが、事業実施予定施設においてCOVID-19感染者が発生するなど、諸般の事業で2度の延期となった。事業実施日の状況の予測がつかないことから、今年度の事業実施を断念した。そのため、掲げていた事業目標を達成することはできなかった。

## III. 今後の課題

医療・福祉施設ではCOVID-19の状況を鑑みて患者・利用者の安全を守る必要があることから、本事業のような外部からの訪問や活動の実施が困難な状況にあったといえる。COVID-19を取り巻く状況は大きく変化したが、感染予防行動の必要性は普遍的であり、本学の教員として地域住民の健康増進が図られるよう貢献していきたいと考える。

### 3) 医療的ケア児と家族のピアネット支援

担当者：上杉佑也、宮崎つた子、中北裕子、川瀬浩子

#### 【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子どもを養育している家族は、家族で過ごせる喜びを感じる一方で、心身ともに疲弊している現状にもある。同様の体験を持つ家族との交流が不安や孤立感解消に繋がるといわれているが、そのような機会は少ない現状にある。本事業はピア・サポートの観点で多職種が協働して家族会を支援する事業である。

#### 【地域貢献のポイント】

地域の医療機関・専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、家族同士の交流を求めるという養育者のニーズへ対応する。すなわち、ピア・カウンセリング、ピア・エデュケーション効果のあるピア・サポートの場として、家族会の開催によるネットワークづくりを支援することで、参加者の困難感の軽減、新たな知見の発掘に寄与する。

#### 【昨年度からの課題】

家族会との連携あるいは支援団体との協力を密にしながら、参加者のニーズを満たすことができるよう家族の交流を支援していくこと。

#### I. 活動計画

1. 家族会の開催あるいは開催支援：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度（4件法）：平均3以上
3. 事業参加者：5名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

#### II. 活動の結果と評価

[結果]

##### 1. 家族会①

###### 1) 概要

###### (1) 日時・場所

令和5年5月14日（日） 12時45分～15時00分

於：グラウンドエクシブ鳥羽

###### (2) 参加者・関係者

###### ①運営スタッフ

本学教員：2名、医療的ケア児支援団体の専門職（特別支援学校教員、理学療法士、相談支援専門員）：3名、本学卒業生（看護師・保健師）：2名、A財団スタッフ：2名、他大学教員：1名、医師（救急対応）：2名、その他イベントスタッフ（司会、レクリエーション等）：数名

## ②一般参加者

9家族 計 31名（申し込み 10家族で1家族欠席）

内訳：医療的ケア児 9名、医療的ケア児のきょうだい 5名、母親 9名、父親 6名、祖母 1名

## 2) 内容について

趣旨説明と開催の経緯について説明し、家族ごとにテーブルを設置して、食事をとりながら自由に過ごしてもらった。途中、大道芸人によるパフォーマンスやプレゼント抽選会等を行った。その他、特別な企画は設けず、ランチをとりながら家族同士あるいはスタッフと自由に話をしてもらった。本学は、家族会開催の支援として、参加者の募集・連絡・調整、会場の設営、来場者の送迎・食事中的サポート、医療的ケア児のおむつ交換の設置とサポート、アンケートの実施等を行った。

## 3) アンケート結果

アンケートは 13 名より回収できた。家族会の内容について（「ご家族で過ごされたこと」や「他のご家族との交流」について）、「大変有意義だった」10名、「ある程度有意義だった」2名、「あまり有意義ではなかった」1名であった。（満足度平均 3.69 点）

### 大変有意義だった・ある程度有意義だったという回答の理由

- ・ 家族皆で、特にきょうだいと、普段家族では計画出来ないようないつもと違う楽しい時間が過ごせた事が、とても良かった。
- ・ 安心して過ごすことのできる環境の配慮があり、家族全員で出かける機会がもてた
- ・ 医ケア児と久しぶりに外出できました。たくさんの方の笑顔と声であふれる場所に参加できました。
- ・ 普段お目にかかれぬ同じ境遇の方々とのコミュニケーションが取れた。

### あまり有意義でなかった・全く有意義ではなかったという回答の理由

- ・ 他の家族とはあまり交流は出来なかった。初対面の方が多くゆっくりと話をする時間はなかった。

### その他の自由意見

- ・ 医療的ケア児はバギーが大きく荷物は多いです。人数に対して控え室が狭かった。
- ・ 家族同士のコミュニケーションの場がもう少しあったらさらに良い会になった。
- ・ なかなか自由に外出できないので、きょうだい児のためにもこのような機会がまたあるといいなと思いました。きっかけがあれば、一歩踏み出す事ができるような気がします。



## 2. 家族会②

### 1) 概要

#### (1) 日時・場所

令和5年9月3日(日) 13時00分～16時15分

於：三重県立看護大学

#### (2) 参加者・関係者

①運営スタッフ：計12名

本学教員：4名、専門職：3名(相談支援専門員、特別支援学校教員、MSW)、

学生ボランティア：5名

②一般参加者：計10名

5家族：医療的ケア児4名、医療的ケア児のきょうだい1名、母親5名

### 2) 経緯・内容について

三重県重症ケア家族会 SMILE (以下、SMILE) の代表より支援要請があり、「第2回おしゃべり会」家族会開催を支援した。

趣旨説明・自己紹介後に、フリートークとして「医療的ケア児と生活するための住居の工夫」について話題が挙がり、入浴や間口についての工夫、医療的ケア児が成長した際の事を考慮する必要性等について、各々の意見が交わされた。次に「退院・在宅移行期の思い」をテーマとして各々の体験を共有し、参加者同士が共感している様子が見られた。各自が利用しているサービス利用の実際や利用する際の思いについても話がされ、同一サービスであっても受けている内容が異なることに驚きの声が挙がっていた。本学は、家族会開催の支援として、会場の設営、来場者の送迎・移動の補助、パソコン操作の補助、子どものおむつ交換台の設置と補助、きょうだい児の世話等を行った。

### 3) アンケート結果

アンケートは5名より回収できた。「内容に対する満足度」、「開催時間に対する満足度」、「日程に対する満足度」は、いずれも「とても良い」「良い」合わせて100%だった。(満足度平均3.80点)

**参加したことによって得られたこと、解消されたこと、良かったことなど(抜粋)**

- ・ 同じ境遇のご家族と繋がれたことによって、不安や孤独感が軽減されました。家に子どもと2人である空間では、気持ち的にネットやSNSなどから情報を得ることがなかなかできなかったのも、先輩ママさん方から直接お話を聞けることが本当にありがたく嬉しかったです。
- ・ 在宅移行期という大変な時に家族に対して詳しい説明がされていないということがずっと続いていることがよくわかりました。途切れのない支援をと言っているにもかかわらず、出発の時点で途切れている現状を何とかしていかなければいけないと痛感しました。ピアサポート交流会で関係者を集めて現状把握と今後の対策についての話し合いを実現させたいです。
- ・ 今日のおしゃべり会に参加させていただいて、子どもさんの出産時の事やその時

のお母さんの心境や不足していた周囲からのサポートがよく理解できました。辛い思いや大変だったことをこのような場で話していただくのは辛いかとも思われますが、皆さんをつなぐ絆が強くなっていくように感じました。

#### 運営上の改善案や今後の企画の要望についての自由記述

- ・ 小学校以後の生活や、入学されるまでどのように生活していたなど、先輩方のお話が聞きたいです。



#### [評価]

目標値についてはすべて達成することができた。開催した家族会のアンケート結果及び参加者の肯定的な声からも家族会の参加者の評価は高く、日ごろ交流の難しい同じ境遇の家族同士がもつニーズを満たすことができたと評価できる。本学の学生も参加することができ、机上の学習や実習でも関わりの少ない医療的ケアを要する子どもと家族に触れる機会となったと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

子育てとケアの両側面、あるいは仕事等も抱える養育者が主体的に家族会を運営していくことは難しい部分もある。大学としての機能を活かし、ソフトとハードの両側面から支援団体を結び付けながら家族会を支援していく協力体制が必要と考えられる。



## 4) みかん大健康バドミントン教室（中級編）

担当者： 大西範和、西山修平

### 【事業要旨】

スポーツは行っていて楽しいことが大きな価値である。バドミントンで良いプレーをするためには、スピードやスタミナはもとより、技術や戦術を身につけることが大切で、そのレベルが高い方が楽しみも深まる。しかし、技術や戦術はただやっているだけでは身につくのに時間がかかり、中級者から抜け出て上級者に至る以前に楽しさが感じられなくなり、止めてしまう人も少なくない。当事業では、ある程度上達したものの、その先なかなかレベルアップしないと感じているプレーヤーを対象に、技術練習やゲームをともにしながらアドバイスし、参加者が技術や戦術の向上やそのきっかけを掴み、上達の可能性を楽しく追及し続けられるよう支援することを目指す。また、バドミントンをプレーすることで、体力の維持・増進を促し、ストレスの解消や健康意識の向上を図る。

### 【地域貢献のポイント】

スポーツは、中級以上のレベルになると、さらなる上達を図っても始めた頃より目に見える成果が出にくくなり、動機づけが低下しやすい。このことは、スポーツ活動の中止や中断に繋がり、運動不足の状態に陥るリスク要因となり得る。当事業では、生涯にわたりバドミントンが楽しめるよう、中級レベルのバドミントン愛好者の技術や戦術の向上を図る。これにより、運動習慣の維持を促し、体力や健康の維持増進に貢献する。

### 【昨年度からの課題】

教室の開催回数を増やし、学校や他の組織と協調するなど活動の幅を広げること。

## I. 活動計画

### 〔数値目標〕

バドミントン教室を2回実施する。

### 〔実施計画〕

地域の中級レベルのバドミントン愛好者（最大20名）を対象に、本学体育館において、1回2時間のバドミントン教室を実施する。教室では、ゲームを楽しみながら、ラケットワークやフットワークなど基本技術の確認や陣形をはじめとするゲーム中の戦術の展開などについて、レベルに応じて紹介する。また、近隣の学校の部活動や地域のサークルと連携して、レベルに応じてメンバーの課題解決などに貢献できるよう助言などを行う。以上の手段によりバドミントンの技術・戦術を楽しく身につけるとともに、生涯にわたりスポーツや運動に慣れ親しんでもらえるよう意識の醸成を図る。

## II. 活動の結果と評価

### 〔結果〕

#### 1. 日程・場所

教室は令和5年7月9日及び令和6年3月10日に、三重県立看護大学体育館にて実施した。また、令和5年4月20日（木）には、伊勢市に赴き、伊勢赤十字病院のバド

ミントンサークルの活動に参加した。

## 2. 参加者

本学での教室参加者は近隣の方々中心で、3月2日（木）には18名（本学学生5名、卒業生1名、教職員2名を含む）、3月9日（木）には12名（本学学生2名、卒業生1名を含む）の参加であった。レベルは初級者から中級者であった。

## 3. 内容

教室では、ストレッチなどの準備運動の後、基本技術を確認しながら身体を温め、ペアを組み替えながらダブルスのゲームを行った。基本技術の確認やゲームの間に、参加者がそれぞれ課題としているポイントについて聞き取りながら、レベルに応じて示範と説明によりアドバイスをを行い、それが即座に奏功する場面もあった。スタッフや参加者同士の関係も良好で、とても良い雰囲気プレーを楽しむことができた。2011年に始めた「みかん大健康バドミントン教室」から皆勤の参加者もいっしょり、かなりの上達が認められた。楽しむことや健康づくりにも役立てて頂いていると推察でき、主催者としても大きな喜びとなった。伊勢赤十字病院のバドミントンサークルでは、初心者から上級者までの皆さんが熱心にプレーをなさっており、本事業担当者2名は一緒に楽しみながら、必要に応じて助言などを行った。

### [評価]

数値目標の通り2回の教室を開催した。アンケートでは、2回を通じて全員（10/12、15/18）が「楽しかった。」、1回目では7名が、2回目では12名が「上達に役立つ。」と回答した。感想の中には、「ちゃんと教えてもらったのが初めてだったので教えてもらってとても良かった。」など、助言等が役立っていることを示す記述もあり、技術の向上にも有用で満足度は高かったと評価できる。

## Ⅲ. 今後の課題

令和3年度は、感染防止への配慮から開催することができなかったが、令和4、5年度は開催に漕ぎ着け目標を達成した。本年度をもって当事業は終了するが、当日の会話やアンケートの感想で継続を希望する声は高い。また、令和5年度は、他の組織と協調するなど活動の幅を広げようと、連携協力協定病院のサークルと交流した。その結果、勤務される職員のみなさんや本学の卒業生と本学の学生、教職員の間を直接つなぐ架け橋となる可能性がうかがえた。バドミントンに限らず、県内病院のスタッフと楽しみを分かち合って、両者がより顔の見える関係になるような機会を作ることには価値があるといえる。



## 5) みかん大バ리스タ for 認知症カフェ

担当者： 大西範和、犬飼さゆり、清水律子、ドライデンいづみ、鈴木聡美、菅原啓太

### 【事業要旨】

認知症になると、当事者はもとより家族や介助者が抱える強いストレスは継続的で、軽減する機会がほとんどないといえる。認知症カフェは、集い話す場であり、ストレスや緊張の緩和に有益であるとして注目されている。本学は、令和2年度まで4年間認定看護師教育課程（認知症看護）を設置し、県内に認定看護師（認知症看護）を多数輩出している。修了生は、所属機関においての活躍が期待されており、中には、所属する医療機関などで認知症カフェを企画する試みもなされている。一方、コーヒーは神経や筋肉に作用して心身の回復を促進するといわれ、健康効果が高いといわれている。こころのリラックスにも効果があるとされることから、認知症カフェにおけるコーヒーの役割は単なる飲み物という以上の価値があるといえる。当事業では、認定看護師教育課程修了生が行う認知症カフェに共催し、豆から抽出した本格的なコーヒーをその場で提供することによりその開催を支援する。

### 【地域貢献のポイント】

認知症の当事者・家族や介護者の日常的なストレスの緩和に寄与しながら、認定看護師教育課程（認知症看護）の修了生の活動を支援できる。また、本学の専門性を活かした情報提供等の取り組みにより、来場者の生活の質向上に貢献できる。認定看護師教育課程の修了生、本学の教員やボランティアとして参加する学生の交流が深まることや、学生が認知症カフェを体験できることで、三重県の看護の将来的な質向上に貢献できる。

### 【昨年度からの課題】

今後新型コロナウイルスの感染リスクを前提とした従来とは異なる生活様式が求められていく中、高いレベルで感染対策を行っている医療機関などに赴き、飲み物を提供する形の事業は受け入れられるとは考えにくい。

## I. 活動計画

### [数値目標]

認知症カフェを1回開催する。

### [実施計画]

県内関連団体や認定看護師教育課程（認知症看護）の修了生などが企画する認知症カフェの開催を支援する。カフェは、本学学生の協力を得ながら、コーヒーを提供するとともに、認知症当事者や支援者を含め、ふれあい、知識の獲得や新たな体験ができるような企画を取り入れ、雰囲気作りを行う。ただし、新型コロナウイルス感染防止対策の必要性は引き続き高く、医療機関においてはカフェの企画が難しいと考えられ、その間は情報収集や計画の錬磨・発展に努める。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 日程・場所

令和5年7月9日（日）に行われた夢緑祭においてカフェを開催した。

### 2. 参加者

来場者は本学学生・教職員や外部からの夢緑祭参加者70名であった。若年認知症当事者の方々やその支援者にお声がけしたが、ご都合が合わず、来場は実現しなかった。

### 3. 内容

カフェでは、学生2名の協力を得て豆から挽いた本格コーヒーを提供し、1杯100円の寄付金をいただき、全額を本学の修学支援基金に寄付した。病院などがカフェを開催することが難しいことは想定しつつも、開催される可能性を考慮し、支援できるよう受け皿を準備していたが、令和4年度に続き、認知症カフェ開催支援の要請はなかった。

[評価]

数値目標の通り1回のカフェを開催した。夢緑祭での開催であったため、多数の参加者となった。カフェにおいては、認知症に関する書籍やサポーターの資料などを置き、認知症に関する啓発を図った。認知症当事者や支援者の方々にはご案内は行ったものの予定が合わず、参加はなかった。医療機関からの開催支援要請は予想通りなく、今後も難しいと考えられた。

## III. 今後の課題

認知症カフェは、認知症当事者、家族や介助者にとっては、数少ない憩いの場であると考えられ、何らかの形でそのような場を支援することは本学の地域貢献として意義があるしかし、コロナ禍が一定程度収束したとはいえ、医療機関においては以前より高いレベルで感染対策が講じられるようになり、そこに赴いて飲み物を提供する形の事業は受け入れられるとは考えにくく、当面地域貢献の手段としては実際的ではないと推察された。



## 6) 赤ちゃんをむかえるママとパパのための 「みかん大ハッピーマタニティ教室」

担当者： 杉山泰子、大平肇子、岩田朋美、市川陽子、荒木学、辻まどか、橋本千愛、  
日置理瑚

### 【事業要旨】

新型コロナウイルス感染症の影響により、産婦人科医療施設では、集団健康教育が実施されない状況や、立ち合い分娩の制限等が続いている。出産を控えた妊婦、パートナー、家族にとって様々な心配ごとが生じていると考えられる。その心配ごとが少しでも軽減するよう、妊婦、パートナー、その家族を対象に、オンラインの出産前準備教育を行う。

本事業は、妊婦、パートナー、その家族を対象に出産前の健康教育を行い、心身ともに健やかなマタニティライフの実現をめざすことを目的に実施する。

### 【地域貢献のポイント】

妊婦が妊娠・出産・育児にともなう心身の変化や生活の変化を前もって理解し、様々な準備を整えた上で出産・育児にのぞみ、安産と心身の健康をめざす。また、開催者側は、新型コロナウイルス感染症等の影響で、妊婦の生活にどのような困難が生じているかを知ることができ、今後の支援方法を検討することができる。

### 【昨年度からの課題】

妊婦、パートナー、その家族の取り巻く環境やニーズを把握し、必要な情報が提供できるよう内容を洗練する。教室開催を広く周知し、令和4度を上回る参加者を募る。

## I. 活動計画

### 〔数値目標〕

年間1回の実施とする。5名程度の参加者で実施する。

昨年度は2回の開催を目標としていたが、計画の立案とリハーサルに時間を要したため1回の開催となり目標が達成できなかった。また、参加者の募集に困難を要することも予想し、今年度は内容の洗練と募集を重視し、年間1回の開催を目標とした。年間2回の打ち合わせ会議を行い計画立案した。計画立案後、リハーサルを1回行い教室の開催に至った。教室開催当日は、終了後は、教員でふりかえり会を行い、教室実施の評価を行った。

第1回打ち合わせ会議では、開催日時およびプログラムについて検討をした。パートナーや家族が参加しやすいよう、土曜日の開催を計画した。プログラムは、1. 妊娠後期から産後のママの体の変化、2. 産後のママのメンタルヘルス、3. 心配ごと相談とした。昨年度のアンケート結果から、妊婦が知りたいこととして「妊婦の日常生活における動作の工夫」、「マイナートラブルや出産までにおける父親の具体的な向き合い方」、「陣痛から分娩までのイレギュラーな事象に対しての対応策」等が挙がっていた。これらを内容に取り入れ、妊婦とその家族のニーズに合った教室となるよう工夫した。また、昨年度よりもパートナーに向けた内容を多くした。Web会議サービス「Zoom」の双方向の通信を活かし、妊婦同士の交流の時間、疑問点や不安を共有し助言を行う時間についても設けた。

第2回打ち合わせ会議では、チラシ作成、周知方法、役割分担について検討した。周知方法については、本学ホームページに掲載するとともに本学の実習施設4施設の産婦人科外来に配布または掲示を依頼した。また、本学の実習施設ではない医療機関1施設の産婦人科外来においてもチラシの配布を依頼した。さらに、三重県新人助産師合同研修および三重県助産師（中堅者・指導者）研修でのチラシ配布、三重県助産師会に会員への開催周知依頼をした。参加申し込みおよびアンケート実施については、Microsoft Formsを活用した。

## II. 活動の結果と評価

### [結果]

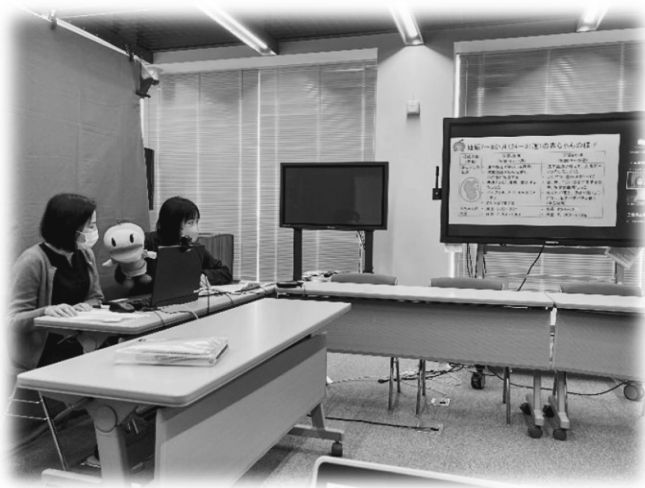
令和6年2月3日（土）10:00～11:30にオンライン教室を実施した（表1）。参加者は妊婦3名、パートナー1名の計4名であった。妊婦については、およそ1～5か月後に分娩予定の妊婦であり、初産婦3名であった。チラシの配布を依頼した施設のスタッフよりオンライン教室の運営を知るところを目的とした見学の希望があり、1名の看護職者が見学をした。オンライン上で妊婦以外の参加者が多くなることを避けるため、見学者については本学での現地見学の方法をとった。

表1. 当日のプログラム

プログラム	時間	内容
導入	5分	進行( みかん 杉山 ) アイスブレイク 質問(チャット等で確認)
妊娠後期から産後のママの体の変化	35分	担当( 岩田 市川 辻 )
休憩	5分	
産後のママ・パパのメンタルヘルス	25分	担当( 日置 )
心配事相談	20分	進行( みかん 杉山、大平 ) 回答:全員
まとめ	5分	進行( みかん 杉山 ) アンケートのおねがい

心配ごと相談では、「沐浴など初めてなので心配」という意見が挙がり、沐浴の必要物品の確認などをした。また、「母乳育児をするかどうか、どのように決めればよいかわからない」との意見も挙がった。病院の母乳育児の方針もあるが、妊産褥婦自身が母乳育児をすすめる準備としてできることの紹介をした。「産後のことはイメージしていなかった、特に心の変化は全く考えていなかったから知ることができてよかった」との感想も得られた。

Microsoft Formsによるアンケートにより、4名の回答を得た。結果、「ネットにもたくさん情報が溢れているが、きちんとした講義で信頼できる情報なので、受けることができてよかった」、「定期的の実施してほしい」、「出産近くになったらもっと詳しく聞きたい」などの肯定的な意見があった。一方、「事前に対話する流れになることを教えてほしかった」、「クイズ形式やチャットの活用があればより良かった」などの意見もあった。内容の理解、時間、オンライン環境については、全員がポジティブな回答をしていた。



#### [評価]

数値目標である年間1回の開催については達成できたが、5名の参加者を迎えて開催することはできなかった。今回の参加者は、受診している産婦人科医療施設では出産準備教室をしていないという発言があった。しかし、新型コロナウイルス感染症による社会情勢が落ち着き、各施設での出産前準備教室が再開されつつある。開催周知を十分行ったが、目標の参加者を得られなかったことを考えると、ニーズとしては高くないことがうかがえる。また、本事業は、オンラインで双方向のコミュニケーションをとることを意識した企画であった。しかし、アンケート結果によると、個別にはニーズに合わなかったこともわかった。オンラインでの教室では、双方向の交流や参加者同士の交流を求めない方法で企画・募集することも検討していく必要がある。

アンケート結果で肯定的な回答があったことは、パートナーへの内容を多くしたこと、参加者の妊娠週数に合わせた工夫を行ったこと、動画を組み込んだことなどの工夫により得られたものと思われる。また、産後のメンタルヘルスを内容に取り入れたことは意義があった。出産前準備教室でメンタルヘルスを取り入れている産科医療施設や行政は多くないと推察される。妊産褥婦本人のみならず家族も産後の変化を理解できるよう、出産前準備教室を担うすべての機関において、メンタルヘルスの内容を取り入れていくことが望ましいと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

妊婦、パートナー、その家族の取り巻く環境やニーズを把握しつつ、出産前準備教育が、産科医療施設や行政等において、どのような方法で行われているか今後も関心を持つことを続けていく。また、出産前準備教育においてメンタルヘルスを取り入れることの必要性を教育・啓発していく。

## 7) 私たちに今できる災害の備え

担当者：清水律子、中西貴美子、浦野茂、森下直紀、菅原啓太、上杉佑也、荻野妃那、竹村和誠、荒木学、山本奈津美

### 【事業要旨】

南海トラフ地震発生危機が迫る今、地域住民が危機感をもち防災・減災対策を行うことが求められている。本事業は、本学の看護の教育・研究機関としての機能を活用して、保健センターや自治会等の協力を得ながら、地域住民の「自助」「互助」を高め、防災の日常化を目指すことを目的としている。

### 【地域貢献のポイント】

南海トラフ地震発生は、今後30年以内に70～80%の確率、今後40年では90%程度といわれている。災害発生危機が刻々と迫る今、地域住民自らが危機感をもち防災・減災対策を行うことは重要である。本事業は、災害に関する情報を地域に発信し、地域住民の「自助」「互助」の力を高めることができる。

### 【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みて、これまでの活動を大学内で行っていたが、事業の場を戻して、地域住民を対象とした啓発活動を行っていく必要がある。

## I. 活動計画

### [重点課題]

地域住民を対象とした啓発活動を行う。

### [実施計画]

1. 地域住民を対象とした啓発ブースを開設（年1回）
2. 地域住民や本学の学生や教職員などへの情報発信（年1回）
3. 学生ボランティアの協力（1～4年生 3～5名程度）

## II. 活動の結果と評価

### [結果]

#### 1. 啓発ブースの開設

##### 1) 概要

対象者：本学夢緑祭の来場者

日 程：令和5年7月9（日）

場 所：本学の学生ホール

テーマ：「私たちに今できる災害の備え」

目 的：地域住民自らが災害の備えの現状を振り返り、災害に備える意識を高める

学生ボランティア数：9名



## 2) 啓発ブースの詳細 (写真参照)

地域住民が自身の災害の備えの現状を振り返り、災害に備える意識を高められるように情報提供や体験企画を実施した。情報提供としては、最近の非常食の展示、ローリングストックの方法、非常の「備え」チェックリスト、東日本大震災に関する市民アンケート調査結果、そして、災害時のトイレの実情、防災みえ.jp メール配信サービスについて、ポスターにて掲示した。体験企画としては、避難所がイメージできるように、段ボールパーティションで間仕切りを作り、その中に段ボールベッドと段ボールトイレを設置して、実際に座れるブースを開設した。また、災害時の持ち出しリュックサックの重さが体験できるように展示した。



## 3) アンケート結果と企画の感想

シールアンケートは、3つの企画で行い、シール総数は118であった。最も参考になった企画は、「非常食」の紹介であり、次いで、「段ボールベッド・段ボールポータブルトイレ」「家で備えておく物」であった(図1)。来場者からは、「いろいろな非常食があることが分かった」「非常食は意外と美味しかった」「非常食は準備していたけど、トイレのことまで考えてなかった。非常用のトイレを準備します」「防災グッズは、ずっと前に準備したままで見直していなかったです。家に帰ってから確認します」といった感想があり、地域住民の防災への関心が高いことが分かった。

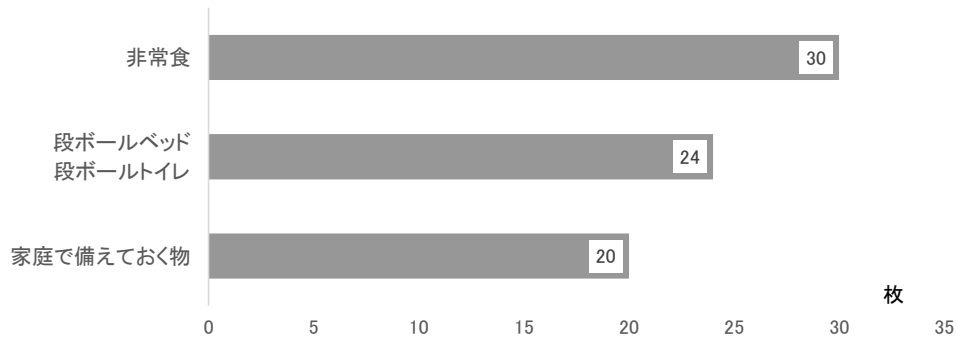


図1 参考になった企画 \* 3展示のみシールアンケート調査

[評価]

啓発ブース開設は本学で実施したが、地域住民の来場者も多く、学生や教職員以外にも情報発信できた。また、学生ボランティアも多く参加し、学生と共同で事業を運営できた。

最近の非常食の紹介や東日本大震災のアンケート結果の提示、体験企画を実施することで、災害時の状況をイメージでき、地域住民の防災や減災への意識の向上につなげることができた。また、改めて災害に備えるために何が必要か振り返る機会にもなったと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

地域住民の防災への関心は高いものの、その意識は日常的なものではなかった。また、最新の防災や県内の災害対策に関する知識が不足していることも伺えた。誰もが気軽に参加でき、本事業のように体験できるイベントは限られている。地域住民の災害に備える意識が日常化するためには、定期的な啓発活動を行う必要がある。また、災害対策は、日々進化していることから、最新の情報や日常的に備えるための工夫・方法について情報を発信する必要もある。今後は、地域住民が多く来場する県内のイベントなどに活動の場を広げ、地域住民の防災意識の向上や防災を見直す機会となるような啓発活動を実施していく。

## 8) 子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト

担当者：長谷川明子、宮崎つた子、西山修平

### 【事業要旨】

本事業は、地域の教育・福祉機関と協力・連携して創り上げるプロジェクトである。小学校入学前の好奇心の強い子どもたちを対象に、「自分のからだを知り、大切にする、そしてお友達も大切にする」事を伝える活動と「からだ先生」の人材育成を行う事業である。

### 【地域貢献のポイント】

1. 地域のニーズへの対応
2. 本学の専門性の活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 地域、教育・福祉機関で子どもの健康教育に取り組む意識の醸成
5. 子どもの自己肯定感の向上に寄与
6. いじめや虐待防止に貢献

### 【次年度からの課題】

地域の教育・福祉機関と関連と連携し、プログラムをブラッシュアップしながら、効果的で独自の教育を展開し、また、からだ先生として共にスキルアップする。

## I. 活動計画

### 1. 数値目標

- 1) 教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望：1件以上
- 2) 連携団体との打ち合わせ会議：5回程度
- 3) 幼児教育現場での「たいせつなからだ」を伝える事業の実施：3回以上

### 2. 実施計画

#### 1) 幼児への教育活動

- ①教育・福祉の協力・連携機関への広報・募集
- ②依頼機関からの希望に応じて企画内容の検討
- ③実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打ち合わせ
- ④事業開催に関する準備、当日までのリハーサル・サポートの実施
- ⑤子ども達に「自分のからだ」を伝える事業の実施
- ⑥事業担当者と連携団体との合同反省会の実施

#### 2) からだ先生の人材育成

- ①依頼機関の担当者との事業の企画・実施・評価の共有
- ②依頼機関の「からだ先生」の実践のサポート

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 幼児への教育活動

2年目となる今年度は、昨年度より連携していた県内のNPO団体（以下A団体）より連携希望があり、A団体との協同によりプログラムを実施した。A団体は、子どもと保護者が交流活動を行っている団体であり、一昨年度の教員提案事業「子どもたちに『自分のからだ』を伝える事業」から続く、連携先である。

### 1) 方法

全5回のプログラムについて、毎回①～⑥のプロセスで実施し、最終回終了後は、⑦～⑧を実施した。

- ①企画・活動案の作成〔大学〕
- ②使用教材と役割の決定〔A・大学〕
- ③学内リハーサル〔大学〕
- ④プログラムの実施〔A・大学〕
- ⑤保護者・A団体へアンケート実施〔大学〕
- ⑥実施後の振り返り〔A・大学〕
- ⑦参加者との振り返り会〔A・大学〕
- ⑧最終反省会〔A・大学〕

### 2) 参加者

#### (1) 対象者

資料1のチラシにより、A団体より広報し、10組22名(親10名・子12名)より応募があり、4歳から7歳までの子どもとその保護者が参加した。

5回のプログラムの参加延べ人数は、親41名、子50名の合計91名であった。

#### (2) スタッフの参加人数

本学教員のほか、打ち合わせや演習準備、当日の事業に、A団体のスタッフは延べ66名参加した。また、本学学生もボランティアとして、第5回の開催日に2名参加した。

### 3) 活動の実施

全5回のプログラムは、①導入(5分)②紙芝居(5分)③教材を使ったワーク(10分～15分)④まとめで構成した。①の導入は、テーマにつながる手遊び、②は、「NPO法人『からだフシギ』」の開発教材である『わたしのからだ』の各テーマの紙芝居を行った。③のワークは、紙芝居の内容の理解を深めるため、見て、触れて、体験できることを取り入れた。教材は、既製品だけでなく、その多くは、A団体と大学教員がともに検討、開発した。④まとめは、その日の大切な点を振り返る語りかけをし、その後、テーマを反映した自作のぬりえに、子どもたちが取り組んだ。

全5回の各プログラムの具体的な内容は表1のとおりである。

### 4) 反省会・全体を通しての振り返り会、事後アンケートの実施

毎回終了後に、参加者へのアンケートとスタッフとの反省会を行い、内容や方法について評価した。また、最終回には、参加者と全体を通しての振り返り会を実施し、その1～2週間後のアンケートで、事業全体の評価と課題の明確化を行った。



資料1 事業チラシ

表1 全5回のプログラムの内容

開催日	紙芝居	ワーク・教材	ぬりえ
第1回 8月3日	たべものとおりみち	①たべものとおりみち：からだエプロン(食道・胃・腸) ②いえきをさわってみよう！：手作りスライム	たべものとおりみちをたどってみよう！
第2回 8月10日	おしっこのはなし	①おしっこはどこでつくられる？：からだエプロン(腎臓と膀胱) ②おしっこを比べてみよう！：手作り尿モデル4種 ③宿題「おしっこのいろをみてみよう！」	おしっこができるまで
第3回 8月18日	かんぞうとすいぞう	①かんぞうってどんな臓器？：からだエプロン(肝臓・膵臓) 肝臓のイラスト ②かんぞうってどれくらい？！(大きさ・重さ)：手作り肝臓モデル ③まじかるかんぞうぼっくす：手作り模型	かんぞうのはたらき
第4回 8月25日	のうとしんけい	①のうのはたらき：イラスト ②おとうふ実験 ③糸でんわを使った伝達実験	のうとしんけい
第5回 8月31日	おとこのこ おんなのこ	①おとこのこ・おんなのこのだいじなところのお話 ②おんなのこのだいじなところ「しきゅうとあかちゃん」：子宮の中の胎児モデル・妊婦体験カバー ③おとこのこのだいじなところ「あかちゃんのもとができるところ」：イラスト	おとこのこおんなのこのだいじなところ

紙芝居



ワーク お豆腐実験



糸電話を使った伝達実験



ワーク まじかるかんぞうぼっくす



## 2. 「からだ先生」の人材育成

全5回のプログラムは、A団体のスタッフもともに、ワークの内容や伝え方、教材の検討を行い、A団体のスタッフには、特に、ワークの教材の開発・制作に主体的に携わっていただいた。また、事業全体の評価、課題の明確化のプロセスもA団体のスタッフとともにいった。

また、昨年度に続き、A団体は、子どもを対象とした市のイベントにおいて「からだ

先生」として、「自分のからだを知ろう！食べたものはからだの中でどうなるの？」を独自で企画し、当日は親子 12 組 36 名が参加した。今年度は、昨年度まで本プロジェクトが担当したワークも A 団体が担い、企画の全てのプロセスを A 団体が主となり進めた。

#### <評価>

##### 1. 幼児への教育活動

幼児への教育事業は、1 件の連携希望を通じて、A 団体との事前打ち合わせを合計 6 回、事後打ち合わせを 6 回、計 12 回の打ち合わせ会議を実施し、「たいせつなからだ」を伝えるプログラムを 5 回実施できた。数値目標は全て達成できたといえる。

また、5 回のプログラムの参加者（保護者）満足度では、全ての回で「とても満足」「満足」と回答した者が 100%であった。評価につながる参加者による具体的な感想の一部を以下に示す(子どもの感想には「(子)」と記載)。

- ・全体をとおして、自分のからだは大事、相手も大事というメッセージが込められた。
- ・今、この内容について家で話したりということはそんなにないが、真剣に聞いていたから、記憶に残っていて、これから先いつか出てくるんだろうなと期待している。
- ・体の図鑑を持っていたが、今まで子どももそんなに興味を示さないし、自分もどうやって伝えたらいいかわからずにいたが、これを受けて、子どもたちが自分から図鑑を見るようになったし、これはこうゆうことだったんだと納得できたりした。
- ・楽しみながら、飽きずに話を聞いていた。ぬりえはお家で飾って眺めていた。
- ・聞き取りやすいようにとか雰囲気作りとかいろいろな工夫があった。
- ・4 歳という年齢が、他の子と遊ぶのを楽しむとか興味を持つ時期であり、最適だった。
- ・大事なところはさわらない、産まれる大事なところだから。(子)
- ・おしっこの話、お父さんに教えた。(子)

##### 2. 「からだ先生」への育成事業

A 団体の「からだ先生」と共にプログラムの企画、実施、評価のプロセスに共に取り組み、独自のプログラムを展開し、教育活動の幅を広げることができた。令和 3 年度から続く A 団体との連携の中では、徐々に A 団体のスタッフに担っていただく部分を広げることにより、A 団体の「からだ先生」の育成にもつながったと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

本プロジェクトの活動では、地域の関係機関と協同することにより、教材や伝え方などの検討を重ね、独自でより効果的な「たいせつなからだ」を伝えるプログラムを展開することができた。その結果、子どもたちがからだの知識を毎日の生活と結びつけながら理解し、親子でからだの不思議さすばらしさを実感し、さらに自分や他者の尊さについて考えるきっかけへとつながった。

子どもや子どもを取り巻く大人への「からだ」教育は、「からだ」の理解だけでなく、子どもの自己肯定感の向上、自殺予防、いじめや虐待防止、人権擁護、などの社会的な課題に向き合うことにつながると考える。今後も、地域の教育・福祉機関と連携の中で看護職、大学教員としての専門性を活かしながら、「からだ」教育を続けていくことが重要である。

## 9) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子、川瀬浩子

### 【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医ケア児）や家族の現状について、その実際を知る機会は、地域住民あるいは当事者、また、支援を行う多職種もそれぞれの立場での一側面に限られている。本事業は、医ケア児とその家族の思いや現状について、当事者自身の声を直接届ける講演会を支援し、県内で広く地域・社会の役割を知ってもらう活動である。

### 【地域貢献のポイント】

医ケア児と家族の思いや現状を知ってもらうことで、①支援を行う立場にある多職種が具体的な支援方法を模索することに繋がる、②地域住民を含め周囲の人々の医ケア児とその家族の理解を深める、③同じ立場にある当事者同士が思いや立場を共有し、仲間づくりや孤立感、不安の軽減に寄与する。

## I. 活動計画

[数値目標]

1. 講演会支援：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
3. 講演会参加者：10名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

[実施計画]

1. 講演者の選定
2. 講演者との講演内容の調整
3. 講演会の広報
4. COVID-19の状況に応じて、対面開催あるいはオンライン、もしくはハイブリッドで講演会を開催する。
5. 事業評価のためのアンケートを実施し、参加者の満足度、医ケア児及び家族への支援の示唆あるいは得られた知見等について評価する。
6. 学生ボランティアを募集し、事業実施に協力してもらうことで、学生の医ケア児を取り巻く環境の理解につなげる。
7. 事業の反省会を実施し、課題の検討を行う。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 家族会 SMILE イベント開催
  - 1) 概要
    - (1) 日時・場所：令和6年2月18日（日）13:00～16:00

(2) 内容 (プログラム)

その1 : ワークショップ「アート体験」

その2 : 「ボッチャ」

その3 : 「あそびのむし体験」

(3) 申し込み方法 : QRコードまたは URL から事前申し込み制

(4) 参加者 : 全体で 61 名

・ 医療的ケア児とその家族 38 名

(医療的ケア児 12 名、きょうだい児 7 名、大人 19 名)

・ 支援者、ボランティア 16 名

・ 本学学生 2 名、卒業生 1 名、教員 4 名

2) 支援内容 : 家族会 SMILE イベントの支援

(1) 駐車場案内・会場まで誘導、バギーや荷物の運搬補助

(2) 会場設営および片づけ

・ 中1 および中2 教室に各おむつ交換のベットや必要物品の設置

・ 大講義室の会場設営

(3) 運営サポート

・ 受付、会場内での家族および支援者のサポート

・ スライドおよび音量機器の確認、サポート





### 3) アンケート結果

アンケートは9名より回収でき、満足度の平均値は3.85点(4件法)であった。自由記述内容(一部抜粋)として「良かった点、印象に残った点」については、「きょうだい児と一緒に家族全員でイベントに参加することは、普段難しいので、よい機会でした。喜んでいる姿を見られて親も嬉しかった」、「人目を気にすることなく思いきり楽しめる時間がとても幸せで、お友だちもできて嬉しかった」といった記述がみられた。「要望や意見」については、「初対面の方とお話したかったのですが声をかけられず少し心残りでした」、「スタッフさんやご家族の事が全くわからず、この方はどういう関係の方だろう?と戸惑う場面がありました」といった記述がみられた。家族会SMILEの役員等からは、「広い会場(大講義室)で、モニターも大きく助かった」「当日、雨が降っていたが正面玄関に屋根があり沢山の荷物の積み下ろしにも濡れなくて助かった」「おむつ交換用のベット等の貸し出しもありがたかった」などの声をいただいた。

#### [評価]

参加者は全体で61名と目標値10名を大幅に超える参加人数であった。参加者の内訳は医療的ケア児とその家族が38名人に対して、多職種(医療、教育、福祉分野)の支援者やボランティアが23名と多くのサポートを得ながら運営ができた。これは、三重県重症ケア家族会SMILEのネットワークのつながりによるものである。アンケートによる参加者の自由記述等からもおおむね好評であったと評価でき、目標数値は達成できた。今回、県内の北勢から南勢まで広い地域から参加があり、日ごろ知り合う機会がない医ケア児と家族の出会いや情報共有の場にもなっており、ピアカウンセリング・ピアエデュケーション効果も得られたと推測される。

また、本学の学部生や卒業生の参加もあり、実習等でも関わる機会が少ない医ケア児とその家族の話に耳を傾けたり、多職種の支援やサポート状況を学ぶ機会になっていた。天候が悪かったが、事故やトラブルもなく、関係団体との連携・協力により全体的にスムーズな支援を行えた。

### III. 今後の課題

家族会役員や関係者の講演会等の開催支援についての満足度が高いだけでなく、医療的ケアを必要とする障がい児とその家族の思いや現状について知りたいという希望もある。当事者自身の声を直接届ける講演会を開催し、県内で広く地域・社会の役割を知ってもらう機会を作ることの必要性は高いと考える。

また、今年度のような、医ケア児やきょうだいが他の家族(他の医ケア児ときょうだい)と共に遊んだり過ごす時間は、きょうだいにとっても有意義であったと考える。今回の経験を活かして、医ケア児のきょうだいにも着目した支援活動も合わせて検討していくことが必要と考える。今後も引き続き、このような多職種の支援者や支援団体と協力・連携して幅広い支援活動も展開していきたい。

## 10) みかん大よりみちカフェ

担当者：篠原真咲、平生祐一郎、ドライデンいづみ、一尾麻美

### 【事業要旨】

年齢、性別関係なく誰でも気軽に立ち寄り、コーヒーやお茶を飲みながら心地よい時間を過ごすことを目的としたカフェである。今年度は、新しい取り組みとして、音楽を主体としたカフェを企画し、参加する人と共に楽器の演奏をしたり、懐かしい音楽に酔いしれて昔を懐かしむような、ホッとする時間を提供する。

### 【地域貢献のポイント】

誰でも参加できることから、小さなお子様連れのご家族や、友人を誘って世代間交流や地域住民同士の活性化を図ることに繋がる。

### 【昨年度からの課題】

昨年度までの実績からブンネギター等を用いた演奏を大変楽しみにされていたため、今年度は、さらに音楽に特化したカフェにすることで音を聴く、口ずさむ、演奏するという誰もが参加でき、共に過ごした時間を共有する。

## I. 活動計画

〔重点課題〕実習期間中、特にスタッフの確保が難しく毎月実施は困難であることより年間1回の開催とする。

〔実施計画〕令和5年9月8日（金）13時～15時

## II. 活動の結果と評価

〔結果〕

1. 参加者 教員5名、本学学部生3名、地域の方1名
2. 内容
  - 1) 参加者全員で自己紹介
  - 2) 音楽鑑賞
    - (1) 昭和の懐かしいレコードを聴く
    - (2) ブンネギターを演奏する、ブンネギターを演奏しながら歌う。





ブンネジャパン

HPより

ブンネギターは、スウェーデンで開発された。子どもから高齢者までレバーを傾けて弦を弾くことで簡単に和音を奏でることができるギターである。障害があっても二人で協力して演奏することもできる。アコースティックギターの音色に癒される。

(<https://www.bunnemusic.jp/instrument/>2024年3月6日閲覧)

#### [評価]

地域住民の方の参加は少なかったが、参加者全員で楽しく音楽を楽しむ時間を共有することができた。1回の開催であったが、スタッフ教員のスケジュール調整ができ、協力しながら実施することができた。参加学生にとって、音楽によって癒しや安心感等の効果について学び、実際に世代の異なる人たちと音楽を通して時代の変化を知る事ができたことは、今後の看護にも活かせる内容となった。

参加された地域の方からも、「久しぶりに聞いた音楽もあり、とても癒されました。また次もお願いしたいです。」というフィードバックを頂くことができた。

### Ⅲ. 今後の課題

音楽に特化したカフェとしたことで、広報用のちらしに「音楽」と記載したことで、参加者が難しいのではないかと捉えられてしまい、参加者が少なかった可能性があるため、広報には親しみやすい文言の使用をすることが今後の検討課題である。

参加したスタッフ、学生、地域参加者の満足度は高かったため、音楽の効果によってカフェを充実していくことによって心と体を癒す手段となる可能性がある。

## 11) おいないさ、みかん大ミニ講座

担当者：田端真、清水律子

### 【事業要旨】

地域にひらかれた大学として、県民に気軽に来学いただける機会を作るとともに、近年のトレンドの中から健康的な暮らしにつながる情報を提供することを目的に、ミニ講座を開催する。「おいない（来てください）」と「老いない」を掛け合わせ、場所は本学とし、話題は老いても健やかに暮らすために着目したい物事を取り上げる。

### 【地域貢献のポイント】

1. 近年の健康に関する情報をわかりやすく伝えることにより、県民が健康的に暮らすための一助となる。
2. 県民が大学に来学する機会を設けることにより、大学と県民の交流を促進し、地域の健康づくりに必要な相互作用につながる。
3. 疾患や加齢に伴う身体の変化を知ることにより、高齢者や障害を有する人に対する社会的な理解の普及に寄与する。
4. 老いてもその人らしく暮らし続けることに関する社会の意識を高めることにつながる。

### 【昨年度からの課題】

県民に来学いただいで講座の実施が難しい場合でも、「地域にひらかれた大学」「健康的な暮らしにつながる情報を提供する」という事業要旨に沿った活動を行うために、インターネットの活用・出張など、来学以外の方法も検討し講座の実施につなげる。

## I. 活動計画

### [重点課題]

県民が本学の講座に受講する機会を作るため、気軽に参加しやすい講座を企画し、開催する。また、老いても健康的に暮らすことに対する参加者の興味や関心を高めるとともに、講座で取り上げるテーマに関する情報について、参加者の理解が得られる。

### [実施計画]

1. 感染症等の情勢を予測し、実現可能性を主軸に開催場所・開催方法を検討\*する。
2. チラシの配布、インターネットの活用など\*で本講座の開催を周知する。
3. 夏季～秋季頃を目安に、県民に対して90分以内のミニ講座を開催する。
4. 参加者に対してアンケート調査を行い、評価する。（\*：昨年度の課題への対応）

## II. 活動の結果と評価

### [結果]

#### 1. ミニ講座実施の経緯

当初は県民に来学いただくことを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の第9波、夏季からのインフルエンザの大流行、さらにはアデノウイルス、A群溶血性レンサ球菌等の感染症も流行しており、広く県民を募ることが難しい状況があった。一方で、

施設や病院等では、これらの長く続く感染症の影響によって感染対策やマンパワー等の事情から、大学へ足を運び講座を受講することが難しいという声がきかれた。そこで、今年度は様々な方法を検討し講座の実施につなげるという昨年度の課題への対応として、講座実施の調整ができる施設でミニ講座を実施することとした。

## 2. ミニ講座の実施結果

津市内の一つの社会福祉法人に出向き、30名を定員にミニ講座を令和6年2月に実施した。

老いても健やかに暮らすために着目したい話題として、近年のトレンドの中から「嚥下」を取り上げた(図1)。

①嚥下とは、②嚥下機能への対応から構成し、とろみ付け体験や試飲等を交えて実施した(写真)。

## 3. 事後アンケートの結果

アンケートの回収数は21部であり、そのうち本年報への使用の同意があったのは17部であった。

年代は、10代(5.9%)、20代(23.5%)、30代(23.5%)、40代(29.4%)、50代(17.6%)であった。

「本講座の内容は理解できましたか」は、できた(100%)、

「このような講座は、老いても健康的な暮らしへの興味や関心を高めることにつながると思いますか」は、思う(100%)であった。また、自由記載では「いつまでもおいしく食べ続けるためにとても大切なことなので話を聞けてよかったです。」「近年のトレンドを交えていることで楽しく知識を深めていけた。」「(介護や看護等の専門の)学校を出ておらず、知らないことを教えてもらった。」等の意見や感想が得られた。

### [評価]

今年度は多くの感染症が流行していたことから、県民が気軽に参加しやすい講座の企画と開催という点においては難しさがあった。しかし、感染症の情勢を考慮し、また昨年度からの課題への対応によってミニ講座を実施することができた。結果、老いても健康的に暮らすことに対する参加者の興味や関心を高めることにつながり、参加者の嚥下に関する理解が得られたことから重点課題に応じた活動が行えたと考える。

## III. 今後の課題

大学へ足を運び講座を受講することが難しいという声の中には、県南部在住者にとっては県北部の本学で開催されるミニ講座への参加は容易ではない等、遠方であることによる困難もあった。そこで、来学型での開催を見直し、遠方の県民も気軽に参加いただけるよう出張やオンライン等での開催を検討したい。

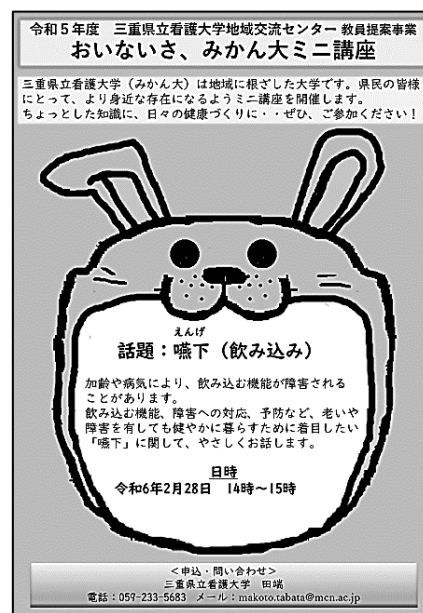


図1 事業チラシ



写真 ミニ講座の様子

## 12) みかん大ヘルシーウォーキング体験会

担当者： 大西範和、大平肇子、斎藤真、ドライデンいづみ、上田貴子

### 【事業要旨】

健康づくりに運動が役立つことはよく知られ、習慣的に行うことが推奨されている。しかし、実施を困難と感じる人は多く、体力に個人差もあることなどから、生活に取り入れることができない人も多い。一方、歩くことは人の日常の基本的な活動であり、誰でも手軽に行える運動としてウォーキングが広まっている。ウォーキングは通常の歩行より運動強度を増加させる必要があり、安全かつ効果的に行うためには、その根拠や適切な実施方法の理解が求められる。当事業では、ウォーキングや最近広まりつつあるノルディック・ウォーキングなどについて知識や技術を提供すると共に実際に楽しむ機会を持ち、健康の維持・増進、ストレスの緩和に役立てられるよう支援する。

### 【地域貢献のポイント】

当事業では、参加者にウォーキング、ノルディック・ウォーキングなどの健康づくり運動についての知識や技術に関する情報を提供し、実際に体験して頂く。知識や技術の獲得や実際の体験は、運動習慣のない方に運動継続の意義や楽しさを分かって頂くことにつながり、参加者の皆さんに運動を日常生活に取り入れて頂くことで、健康の維持増進に貢献することができる。

### 【昨年度からの課題】

学内のウォーキング・コースの設定についての検討、体験会開催検討・実施

## I. 活動計画

[数値目標]

体験会や教室を3回実施する。

[実施計画]

20名を枠として講義や体験会を地域の活動と連携して企画・開催する。体験会については、参加者に事前に体調の確認を行った上で、ウォーキングやノルディック・ウォーキング、ストレッチ体操などを、大学や津市内で行う。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 日程・場所

令和5年4月16日（日）に津市美杉町の森林セラピーコースで体験会を開催した。

### 2. 参加者

参加者は本学教職員を含め9名であった（就学前児～70歳代）。

### 3. 内容

津市美杉町の森林セラピー基地君ヶ野コースでウォーキングとノルディック・ウォーキングを行う体験会を開催した。当日は雨上がりで、適度な温・湿度で歩くことができた。

た。桜の花が残る中、準備運動後にノルディック・ウォーキングの方法を説明し、約1時間の散策を楽しんだ。令和4年度に調べた学内周回コースでの実施も検討したが、1周600mのコースを周回するより、より癒やしに繋がると考え、森林セラピー基地での実施とした。学内周回コースについては、大学職員が歩くためには有用であるが、外部の方に来て自由に歩いて頂くことについて奨励することには課題があると考えられ、検討を継続している。また、講習会の実施については、学外の協力者や関係機関との情報交換を行っており、学外機関との共催で実施できるよう検討を進めている。

#### [評価]

体験会を1回実施したところ、参加者は年齢層にバラつきがある中で全員が楽しく参加できたと感想を述べており、本体験会がどの年代にも受け入れられる内容であったという点で評価に値する。人数が少ないことで全体への配慮が行き届き、参加者個々のペースでのウォーキングが可能となり、安全で満足感の高い体験会となった。一方、件数は数値目標の3回には足りなかった。特に講習会の実施については、学外機関との共催で実施する方向で検討しているが、十分な進捗状況にない。令和4年度に調べた学内周回コースについては、コース1周の距離が600mと短いことや、学外の方に本学のキャンパス内を自由に歩いて頂くことに対する展望が不明確であり、引き続き検討課題としている。

### Ⅲ. 今後の課題

体験会を増やすことと、講習会を実施することを含め引き続き3回の開催を目指す。講習会については、本学と地域とのつながりを強めることを目的に、学外機関との共催を模索する。学内周回コースについては、活用の方法や展望について検討する。



図. 津市美杉町の森林セラピー基地君ヶ野コースで実施したウォーキングとノルディック・ウォーキングを行う体験会の様子

## 13) 看護と情報リテラシー

担当者：上田貴子、ドライデンいづみ

### 【事業要旨】

情報リテラシーとは、さまざまな情報を上手に使いこなす能力のことである。本事業は、看護や医療に関する情報について、集める・調べる・検討する・判断するという活動を通して、情報リテラシーを高める実践講座である。スマホやパソコンを使って検索し、情報の真偽について検討することで、参加者の情報リテラシーを高めていくことを目指す。

### 【地域貢献のポイント】

- 看護大学の専門知の提供
- 大学施設設備（教室・情報処理室・体育館など）、情報機器（パソコン・プロジェクタ・マイク・実物投影機など）、通信サービス（インターネット通信・Wi-Fi）、教育用ソフト（統計ソフト SPSS・Office365 機能など）の活用機会の提供
- 大学図書館およびリファレントサービス（資料検索・データベースなど）の提供
- 県民の情報リテラシー向上に寄与

### I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 開催回数：1 回程度
- ・ 事業参加者：2 名以上／1 回

[実施計画]

#### 1. 参加者の募集（広報）

#### 2. 運営方法

- ・ 大学施設設備や情報機器等を使用する。
- ・ 情報処理室もしくは教室にノートパソコンを準備し、インターネット接続のもとで講座を開催する。

#### 3. 教育実践の内容

- ・ スマホやパソコンを使って医療や看護に関する情報を検索し、ヒットした情報を集約し、それぞれの情報の真偽について検討する。

### II. 活動の結果と評価

[結果]

地域住民のニーズ調査を実施。

[評価]

津市のイベント等に参加し、住民の情報リテラシーへの関心や研修会への参加意向について聞き取りを行った結果、事業への関心はあり、将来的に検討するということがあった。

### III. 今後の課題

大学での開催が住民の参加へのハードルを高めている印象がある。オンライン開催や学外開催など、開催方法について検討する。広報先を絞るなど、広報活動について検討する。



## 14) 「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援

担当者：清水律子、平生祐一郎

### 【事業要旨】

認知症の有病率は年々増加しており、今後も認知症高齢者が増加していくことが推計されている。認知症の症状の一つに記憶障害があることから、認知症の人に対して「何もわからない、何もできなくなる」といった偏った認識をもつことがある。認知症を正しく理解すると、認知症の人のその行動の理由がわかり、どう対応したらいいかにつながる。認知症の人、一人一人に向き合い、寄り添うケアについて考えられるように、認知症に関する講座や相談会、事例検討会を開催する。

### 【地域貢献のポイント】

1. 認知症を理解することにより、認知症の人への対応力を向上させることができる。
2. 認知症の人への対応に関する相談会を開催することにより、認知症の人への対応力の向上と介護者の心身の負担の軽減となる。
3. 認知症の人の事例検討会を開催することにより、認知症の人へのより良い対応を検討でき、対応力の向上につなげることができる。

## I. 活動計画

[数値目標]

1. 認知症に関する講座開設（年3回）
2. 認知症の対応に関する相談会（年1回）
3. 認知症の人の事例検討会（年1回）
4. 学生ボランティアの協力（1年生～4年生 2名程度）

[実施計画]

認知症の人への対応に困難を感じている高齢者施設に出向き、施設職員を対象として定期的に認知症に関する講座や事例検討会を開催する。講座内容としては、認知症の原因となる疾患、認知症の症状（中核症状、行動・心理症状）、認知症の人への対応、介護者の健康などを行う。事例検討会は、対応に困難を感じている認知症の人を対象として行う。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 認知症に関する講座
  - 1) 概要
    - ・対象者：高齢者施設に勤務する介護職や看護職などの16名
    - ・場 所：県内の高齢者施設

- ・日時・講座内容：下記参照

日時	講座内容
9月7日（木） 14時～15時	第1回講座 認知症の症状
10月18日（水） 13時30分～14時30分	第2回講座 アルツハイマー型認知症の人への食事支援
11月9日（木） 14時～15時	第1回事例検討会
令和6年2月20日 14時～15時	第2回事例検討会 第3回講座 前頭側頭型認知症と症状
令和6年3月25日 14時～15時	第4回講座 前頭側頭型認知症の人への支援 第3回事例検討会（写真参照）

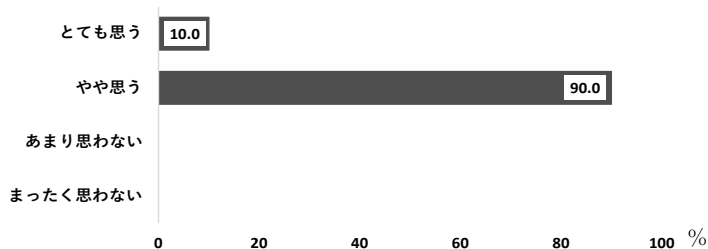
## 2) 事例検討会の様子



## 3) アンケート結果

- ・アンケート当日参加者：14名
- ・アンケート回収率：100%（うち有効回答数：71.4%）
- ・アンケート結果の詳細は以下の通りである。

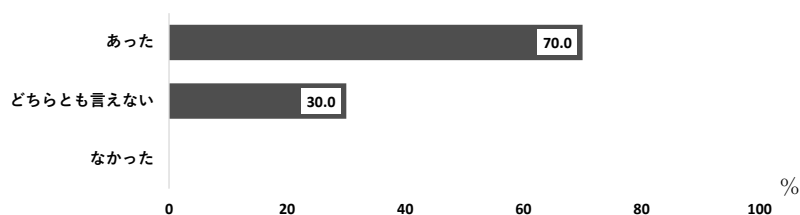
（1）本研修は、認知症の方への対応力向上につながると感じますか。



（2）上記回答の理由

「知識が深まり実践につながる講義内容である」、「今までなんとなくで分かっていた事が、きちんと知れて、またよく理解出来た」、「効果が明確にできる訳ではない認知症ケアの難しさもあるが研修を受けることで知識も増え良いと思います」などがあつた。

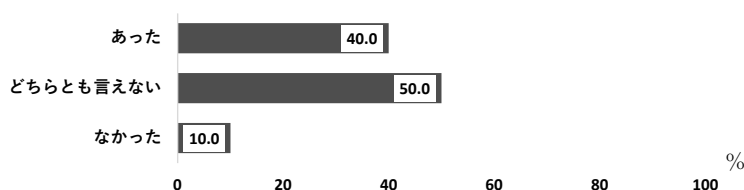
(3) 本研修を受け、認知症の方への対応に変化はありましたか。



(4) 上記に「あった」と回答した理由

「認知症でもどのタイプの方なのか把握して、対応を変えられた」「研修を元に対応を考えるようになった」、「イラっとすることが減りました」、「目標を設定することで対応の方向性のブレが少なくなった」などがあつた。

(5) 本研修を受け、あなた自身に変化はありましたか。



(6) 上記に「あった」と回答した理由

「穏やかに対応出来るようになった」、「自分の気持ちが楽になった」があつた。

#### [評価]

認知症に関する講座を定期的に4回開催することで、認知症の理解につながったと考えられる。認知症の対応に関する相談会は講座に併せて行っており、限られた時間を有効活用して支援ができた。また、事例検討会を講座開催後に行うことで、参加者は身につけた知識を活用した対応策を考えられるようになった。事例検討会の参加者から、「いろいろな意見が聞け、参考になった」、「事例検討は楽しい」といった感想があり、満足感が高かった。中には、認知症の人に対して「自分たちなりに対応を工夫している」といった発言があり、継続的な支援により、施設職員の意識が前向きに変化したり、対応力の向上につながった。その一方で、認知症の方への対応に変化があつたかの質問に「どちらとも言えない」と回答した者もあり、実践につなげるには、引き続き支援が必要であると考えられる。今年度は、学生ボランティアの活用ができなかったが、概ね対象者のニーズに応じた支援ができた。

### Ⅲ. 今後の課題

認知症の人への対応は、基本的な知識を得たからといって実践できるものではないが、介護職や看護職といった専門職者に定期的な研修を行うことで、より良い対応につながる。引き続き、講座と事例検討会を行い、対応力の向上につながるよう支援する。また、認知症の人への対応は、様々な職種と連携しながら行うことが重要である。多職種との連携が図れるように、認知症にかかわる社会保障制度や地域の実情を踏まえた包括的な支援などの理解も深め、対応力の向上につながるよう支援していく。

## 15) みかん大「暮らしの保健室」

担当者：平生祐一郎、篠原真咲、森下直紀、荒木学、長谷川明子

### 【事業要旨】

暮らしの保健室では、地域住民のヘルスリテラシー向上を目的に、①健康チェック、②看護職等による健康相談、③多世代交流、④居場所づくりを行っている。希望者にはアロマハンドマッサージやフットケアも行っている。また、管理栄養士や薬剤師、歯科衛生士などが参加し、多職種連携による地域ケアシステムの構築も考えている。

### 【地域貢献のポイント】

地域住民が自己の健康に関心を持ち、健康づくりに取り組むことができる。地域コミュニティの形成や地域ケアシステムの構築に貢献する。さらに、本学学部生や大学院修了生への教育的側面があり、医療人材の育成や活躍の場としても期待される。

### I. 活動計画

#### [重点課題]

多職種とのつながりや専門性を活かし、地域住民の健康を包括的に支援する。出張できる体制を整備し、多くの方が参加しやすい機会を確保する。月10名程度の参加者を確保できるよう、チラシや市政情報などで積極的に広報する。

#### [実施計画]

月に1回（原則：第2木曜日）、学内や学外で開催する。看護職が住民の健康チェックや生活相談などに応じる。アロマハンドマッサージは専門の研修を受けた教員、フットケアは教員の指導下で練習を積んだ学生が行う。専門職による健康教育も実施し、住民が健康のヒントを得られるようにする。健康教育の年間計画は以下に示す。

#### ・実施場所

今年度からは学内開催だけでなく学外出張も行い、さまざまな方が保健室に参加できるようにする。

#### ・健康教育（内容/担当者）

6月：高齢者の栄養について/三重県栄養士会（管理栄養士）

7月：メンタルヘルスについて/本学（教員、精神看護専門看護師）荒木学

8月：お薬と健康について/津薬剤師会（薬剤師）

9月：認知症について/医療法人碧会（認知症看護認定看護師）芝原弥千代氏

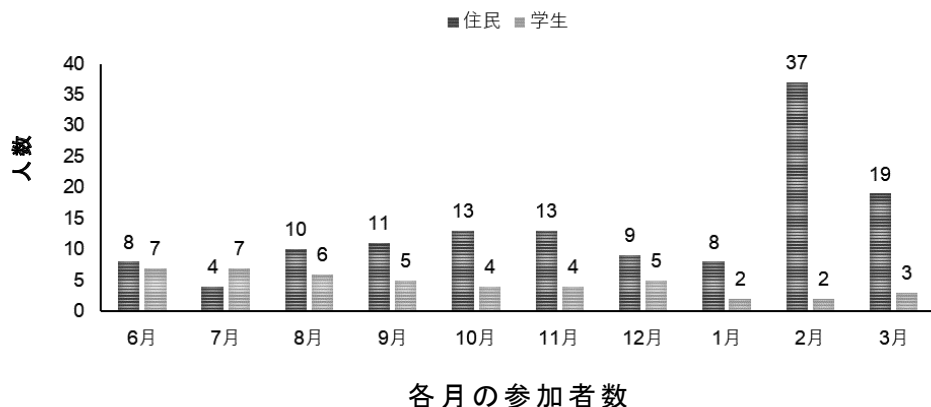
10-12月：歯科保健について/三重県公衆衛生学院（教員、歯科衛生士）前田尚子氏と学生

1月：アロマセラピーについて/本学地域交流センター（教員、AEAJ認定アロマセラピーアドバイザー・アロマハンドセラピスト）長谷川明子

## II. 活動の結果と評価

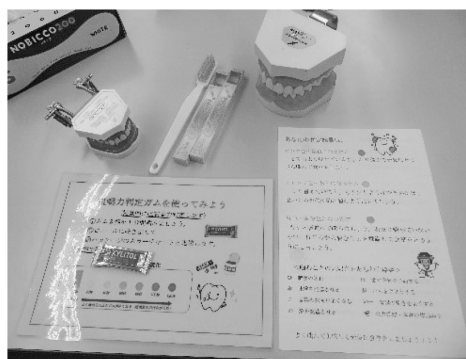
[結果]

### 1. 参加者の状況



### 2. 多機関との連携状況

6月	三重県栄養士会（管理栄養士3名）	栄養とフレイル、個別相談
8月	津薬剤師会（薬剤師1名）	薬剤の個別相談
9月	医療法人碧会（認知症看護認定看護師1名）	認知症全般、個別相談
10-12月	三重県公衆衛生学院（教員・学生32名）	咀嚼の評価、個別相談



参加者数は、住民が延 132 名、学生が延 45 名であった。各機関に所属する専門職がその高い専門性を活かし、健康に関する講話と個別相談を実施した。地域住民の関心度は高く質問場面が多くみられた。

[評価]

今年度、COVID-19 の影響による休業はなく、毎月開催することができた。また、定期参加される地域住民が増えており、暮らしの保健室が地域に根付いてきた印象である。地域住民のほっとする姿や健康づくりに意欲的な姿をみると、支援する側のスタッフも「ほっこり」する。

## III. 今後の課題

暮らしの保健室が効果的に運営できるよう、スタッフ間で運営に関する在り方や具体的な方法を共有し、検討を重ねていくことが必要である。また、専門性の確保や円滑な運営のために多職種連携やスタッフ確保に努めていく。

## 16) 僕たち私たちでも出来る！

### 夏の危険から身を守るための基礎講座

担当者：多久和有加、山本奈津美、新谷明子

#### 【事業要旨】

本事業は、楽しい夏休みを過ごせるよう、子どもたち自身が夏のあらゆる危険（熱中症・食中毒・水の事故など）から身を守り、危険を回避し、予防できる自助の精神を育てることを目的としている。多くの子どもたちが集まる学童保育施設を訪問し、高学年の子どもたちに、夏の危険から身を守るための基礎知識を教える。その後、学んだ知識を高学年から低学年へと伝えていくことで、より多くの子どもたちが、自分自身を守るための知識を身につけられることを目指している。

#### 【地域貢献のポイント】

地域の子どもたちが、夏の危険について学びを深める場を提供する。

#### I. 活動計画

##### 1. 数値目標

- 1) 開催施設：学童保育施設 1 か所以上
- 2) 事業参加者：10 名以上

##### 2. 実施計画

- 1) 事業実施までの流れ
  - (1) 学童保育施設への広報・募集
  - (2) 開催内容についての打ち合わせ及び資料作成
  - (3) 学童保育施設との打ち合わせ（開催日時、参加人数、講座内容の詳細説明）
- 2) 事業実施
- 3) 参加者へのアンケート調査を実施と評価

#### II. 活動の結果と評価

[結果]

##### 1. 事業実施までの流れ

今年度は、A学童保育施設より申し込みがあり、事業を実施した。今年度は、「熱中症」をテーマに、子どもたちが楽しく基礎知識を学ぶことができるように担当者会議を4回実施し、内容検討・資料作成を行った。その後、A学童保育施設との打ち合わせを経て、事業実施に至った。

## 2. 事業実施

日時：2023年7月28日（金）10：00～11：15

参加者：小学生5・6年生43名、学童指導員4名

事業内容：下記の実施内容（表1）に沿って事業を実施した。子どもたちに講座内容を説明した後、熱中症クイズの答え・ヒントになる事柄が記載されているカルタを3チームに別れて実施した。次に、熱中症に関するクイズを実施し、スライドを使用しながら解説を行った。子どもたちは、クイズ前に実施したカルタ内容を活用しながら、熱中症クイズに取り組んでいた。更に、本事業の内容を、再度子どもたち自身で振り返られるように、使用したスライドと同様の内容を印刷したA3用紙を配布した。このA3の用紙は、切込みを入れると冊子にできるように作成しており、子どもたちには、この用紙に色を塗ったり、空欄にメモをしたりなど自分のオリジナルの冊子を作製してもらった。

表1 当日の実施内容

時間	内容
5分	<導入>自己紹介（多久和、山本、新谷）、講座内容の説明
20分	<展開①>熱中症に関するかるたの実施
20分	<展開②>熱中症に関するクイズ（9問）、クイズの答えと解説
15分	<展開③>熱中症冊子作成ワークショップ
5分	<展開④>熱中症予防啓蒙活動の依頼、まとめ
10分	<展開⑤>本事業のアンケート



カルタ実施の様子



熱中症の知識提供



熱中症冊子作成ワークショップの様子

後日、本事業に参加した高学年の子どもたちが、事業内で作成した自作の熱中症冊子を見ながら、低学年の子どもたちに「熱中症講座」を開催した。低学年の子どもたちにもわかりやすく、話す内容を工夫しながら伝えていた。



高学年の子どもたちから低学年の子どもたちへの熱中症講座

[評価]

今年度は、A学童保育施設を訪問し、43名の子どもたちに熱中症に関する基礎講座を実施する事ができ、数値目標は達成できた。また、事業実施後のアンケートでは、熱中症について「よくわかった」87.5%「わかった」12.5%、熱中症について自分で予防や対策が「できる」72.5%、「だいたいできる」27.5%と回答した。具体的な予防対策への自由記述を以下に抜粋する。

- ・ どんな時に熱中症になりやすいかわかったから対策できそう。
- ・ 朝ご飯をいっぱい食べて、お茶もしっかり飲むようにしたい。
- ・ 帽子はめんどろだったけど、やっぱりかぶる。
- ・ 首や足の付け根を冷やすのも良いことだとわかった。

また、当日、中日新聞社の取材を受け、後日事業内容が中日新聞に掲載された。その後、数件の学童保育施設より問い合わせがあり、次年度の事業実施に繋げる事が出来た。本事業について、地域住民へ十分な情報発信ができたと考える。



Ⅲ. 今後の課題

次年度も、子どもたちの夏休み期間を利用して、本事業を継続していく。より多くの学童保育施設を訪問する為にも、広報の方法も検討していく。また、夏の危険に関する講座内容である為、一定時期に講座開催が集中する可能性もあり、参加メンバーや学生ボランティアを増やし対応していきたい。



## 17) みかん大哲学カフェ

担当者：安部彰、浦野茂、篠原真咲、鈴木聡美、関根由紀、林辰弥、森下直紀

### 【事業要旨】

現代では人々のライフスタイルや価値観の多様化にともない共生をめぐる問い——のぞましい共生のありかたをめぐる問い——は、容易に共通解を導きだせない難問となりつつある。しかし現況がそうだからこそ、むしろその問いはかつてないほどの重みをもちはじめているともみなしうる。そして後者の視点に立つならば、我々は共同探求の方法としての対話、それもできればバックグラウンドを違える人々がお互いにその異なりを尊重しつつ織りなす多声的な対話をつうじて、かかる難問を敢然と探求すべきだろう。そのような対話を経ることにより我々は、答えにはいたらずとも、探求前よりも諸問題の構造や奥行きをより鮮明に理解できるようになるはずだから。

### 【地域貢献のポイント】

このかん、医療・看護職のフィールドは病院から地域社会へとひろがりつつある。しかしこうした活動のフィールドの拡張は必ずしもコミュニケーションの豊饒化を意味しない。そこにおけるコミュニケーションが「医師・看護師と患者」あるいは「多職種間」という閉じた役割関係のもとでのそれであり続けるかぎりは。したがって、やはりコミュニティには、人々がそれぞれの役割や立場をこえて忌憚なく発しあう多様な意見が交流する場が不可欠だ。近年では、そうした対話の場としての「哲学カフェ」が全国にひろがりつつあるが、本事業は三重県におけるそのような場となりゆくことで、地域貢献に資することができればとかがえている。

### I. 活動計画

数値目標：年3回の開催。各回参加人数10名程度。

### II. 活動の結果と評価

計画では年3回の開催を予定していたが、けっきょく後述の1回の開催にとどまった。その理由として、1回は他学務との兼ね合いとスケジュールの関係上実施できなかった。また1回は、2023年10月30日（月）18時00分より本学ラーニングコモンズにて学生の参加をみこんで開催したが、蓋を開けてみると学生の参加がなかったため、哲学カフェは流会とし、ミーティングに変更したことによる。

#### 1. 開催情報

- 1) 日時：2024年3月21日（水）18時00分～20時
- 2) 場所：アストプラザ4階・橋北公民館和室
- 3) 参加人数：10名（本学教職員8名・一般2名）

#### 2. 活動の結果

今回の哲学対話のテーマは「評価」である。まず評価はきわめてありふれた営みだ。私

たちは日々、誰かに評価されたり、誰かを評価したりしているからである。だが評価とは、あらためてどのような営みか？ それは「個々の対象のよしわるしを判断」し、「対象間に優劣をつける」ための営みであるという点では不変（普遍）であるといえようが、しかしその様態は時代とともに変化しているように見える。たとえば一昔前とは異なり近年では、日本の学校（企業）においても、評価者がその評価の視点を被評価者にあらかじめ開示し、被評価者もその視点にもとづいて行動するようになってきているように。またそれにより、「被評価者による自己評価」と「評価者による他者評価」とのズレがかってより問題となり、評価者は自らの判断根拠について説明責任がもとめられるようになってきているようにも見える。

このような評価の現状（評価とその根拠の見える化）は、たしかに、かつてに比べ評価が公平なものとなったという点では望ましいといえる。だがその反面、評価は、明示（開示）された視pointsの範囲内に制限され、狭隘化しているように見えなくもない。そもそも評価は「直観（感）的な判断」を含んでおり、その内容を完全に言語化するのは不可能である（またこの点で、評価という営みの底はそもそも抜けている）。だが今後、ますますその説明責任が問われるようになれば、評価は「説明（言語化）できることしか評価しない（してはならない）」営みへと変質してしまうのではないか。そしてそれは、ひいては対象をとらえるさいの人間の認識を貧しくしてしまいかねないのではないか。

当日は以上のようなやりとりをふくめ、さまざまに実りある対話が展開された。

### Ⅲ. 今後の課題

やはり計画どおりに事業が実施できなかったことが今年度の反省点である。次年度は、無理のない計画を立てたうえで、着実に事業を実行したい。

## 18) がん患者を有する家族：就学生の集い

### -I can cope with family-

担当者：大川明子、山本奈津美、ドライデンいづみ

#### 【事業要旨】

がんに関与している就学生は、その対処法が分からない場合が多く、悩んでいる。これらの就学生の支援をはじめとして幅広く悩みを持っている患者家族の支援には、一人で悩まず、みんなで開放的に経験談や接し方などの情報共有する場が必要である。このための患者や家族：就学生との向き合い方を考えていく集い。

#### 【地域貢献のポイント】

がん患者を支える家族、特に就学している学生に焦点を当てて、安心して勉学に励むことができるよう、こころの支えとなる場の提供をする。

### I. 活動計画

#### [数値目標]

5名の参加者を目標とする。

#### [実施計画]

がんに関与している就学生が集いお互い悩みを話し合う。また参加者の要望を聞く。

### II. 活動の結果と評価

#### [結果]

#### 1. 本事業の周知

三重県内の大学・短期大学（三重県立看護大学、三重大学、鈴鹿大学・鈴鹿短期大学、鈴鹿医療科学大学、四日市大学、三重短期大学、高田短期大学）に図1に示すチラシを配布した。

#### 2. 就学生の集いの実施

- 1) ゼミの面談の際、家族が“がん”であるから卒業研究をしたいと相談を受けることが多いことから、本提案事業を提案した。友達や家族に相談することもできず、ひとりで悩んでいる就学生がいる。今回は4年生2名と教員3名が患者の思いや、その家族の思いを話し合った。

#### [評価]

家族関係は個別性が高く、悩みは個人的な要素も多いため、集まった学生同士が悩みをすぐに話し合うことは難しい。そのため、学生同士の関係づくりが必要である。また、プライバシーの配慮や相談しやすい方法を検討する必要がある。

なお、本事業は図2に示すように、2023年11月3日発行のみえ新聞「ほほえみ図鑑」欄に、がん看護専門看護師を目指す本学学生として紹介されました。

### Ⅲ. 今後の課題

集まった就学生同士の関係性作りを工夫し、話し合える雰囲気を作る。

**がん患者を有する家族：  
就学生の集い**  
- I can cope with family -

**家族が“がん”になって、  
あなたは悩んでいませんか？**

家族ががんに罹患してしまっただめ、

- 家族のこと
- 家計のこと
- 就学のこと など

**あなたはつらい思いをしていませんか？**  
話すことで、対処法が見つかるかも知れません。つらさが和らぐかも知れません。一人で悩まず、開放的に経験や接し方などを話し、情報を共有しましょうよ。

開催日時：令和5年11月6日（月）18:00 - 19:00  
応募締切：令和5年10月30日（月）（先着5名程度）  
開催場所：三重県立看護大学 研究棟1階 中会議室  
参加費：無料  
申込先：下記メール か QRコードでお申込み下さい。  
natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp  
三重県立看護大学 山本 奈津美

開催当日、体温37.5度以上の申込者は参加できません。感染状況により、中止となる場合があります。申込者は県立看護大学のホームページ等でご確認の上、ご参加下さい。

図 1 県内の大学・短期大学に配布した開催案内のチラシ

**ほほえみ 図鑑**

**患者さんとの関りを大切にしている看護師に**

県立看護大学の4年生。家族・就学生の集い「I can cope with family」に、がん患者のケアに興味をもち、参加する。大川明子教授のゼミに所属し、日々研さん、患者や家族がどのくらい悩んでいる。6日（月）のような思いを抱くのか、午後6時から同大で行われる「がん患者を有するように関わる」を聞きかきかえるように関わりを深めていく。

三重県立看護大学4年生

(左) 渥美 茉有 さん(21)  
(右) 太田 陽菜 さん(21)

「希望をもつ、が「がん患者を有する家族」に向き合うようアド 就学生の集い「I can cope with family」の存在で、ZOOMの参加申し込み、問い合わせはメール「natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp」で、同大・山本さん。」

「がん患者を有する家族」に「希望をもつ、が「がん患者を有する家族」に向き合うようアド 就学生の集い「I can cope with family」の存在で、ZOOMの参加申し込み、問い合わせはメール「natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp」で、同大・山本さん。」

「がん患者を有する家族」に「希望をもつ、が「がん患者を有する家族」に向き合うようアド 就学生の集い「I can cope with family」の存在で、ZOOMの参加申し込み、問い合わせはメール「natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp」で、同大・山本さん。」

図 2 三重タイムズに紹介された本事業の記事（2023年11月3日発行）

## 19) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

担当者： 大川明子、山本奈津美

### 【事業要旨】

乳がんの治療に伴い乳房切除術をおこなった患者の乳房パットを作製する。参加者は患者さんを含めて誰でも参加でき、ご自身の胸の大きさに合わせたオーダーメイドの乳房パッドを参加者ご自身で作製する。素材はダブルガーゼで、中身は樹脂ビーズを使用し、肌ざわりや汗も吸い取り、洗濯も可能で、乾燥性も抜群である。講師は乳房切除術を体験した人であり、病気の語り合いもおこなっている。

### 【地域貢献のポイント】

医療施設以外でも乳がん患者のケアができること、生活している地域だからできるケアを考え、患者の日常生活の活性化につなげていく。また、患者同士が語り合い、がんとともに生きる場の提供ともなる。

## I. 活動計画

### 〔数値目標〕

5名の参加者を目標とする。

### 〔実施計画〕

乳房パットを作製する。

作成しながら病気のことなどを話し合える場作りとする。また参加者の要望を聞く。

## II. 活動の結果と評価

### 〔結果〕

#### 1. 本事業の周知

治療施設(四日市市立病院、三重県立総合医療センター、鈴鹿中央総合病院、鈴鹿回生病院、松阪市民病院、松阪中央病院、三重中央病院、伊勢赤十字病院)に右図のチラシを配布した。

#### 2. 乳房パットづくりの実施

1) 令和5年11月1日に実施した。講師の指導のもと、参加者2名、教員2名が参加して乳房パットを作製した。乳房パットを作製しながら病気の思いや、家族のことなどのおしゃべりをして、和やかな雰囲気でもリマンマカフェを終えることができた。また、参加者はハンドメイドで仕上げた乳房パットを嬉しそうに持ち帰られていました。

Re-mamma Café (リマンマカフェ) 令和5年度地域交流センター事業

体験者と一緒に、自分に合った快適な乳房パッドを、楽しく作りませんか？



作製乳房パッド

- ご自分の胸の大きさに合わせて簡単に作れます。
- 洗濯が可能で、すぐに乾きます。
- 中身に樹脂ビーズを使うので、重みもあります。
- お手持ちのフルカップブラに、直接入れる事ができます。
- ガーゼ・タオルが汗を吸い取ります。
- 術後間もない方から、再建ご予約の方にも最適です。



作製風景

開催日時：令和5年11月1日(火) 13:00 - 16:00  
応募締切：令和5年10月25日(火)  
開催場所：三重県立看護大学 研究棟1階 中会議室  
参加費：2,000円(含 材料費、お茶菓子代)  
申込先：下記メールかQRコードからお申込み下さい。(先着5名)  
natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp  
三重県立看護大学 山本 奈津美



開催当日、体温37.5度以上の申込者は参加できません。感染状況により、中止となる場合があります。申込者は県立看護大学のホームページ等でご確認の上、ご参加下さい。

#### [評価]

乳がん患者さんは術後ボディイメージの変化に悩んでいることが、参加者の会話の中から聞くことができた。ダイレクトに話を聞くだけでなく、創作しながら会話をすることで患者さんの本音を聞くことができた。

また、今回自身で乳房パッドを作製することにより、以後継続して自身で自身のための乳房パッドを作製できるようになり、これまた心の安らぎを持てるようになる。

以上の事から、患者同士で会話をすることで共感することができていた。参加者は罹患して間もない状況であり、情報を求め参加したと述べていたこと、自身のための乳房パッドがいつでも作られるようになることから、本事業が心理的な軽減ができる場になると考えられる。

### Ⅲ. 今後の課題

参加した人のその後の使用状況などを把握するため、継続的に参加してもらえるような工夫を検討する。

## 20) 「英国アフタヌーン・ティー」@みかん大

担当者：ドライデンいづみ、岩田朋美、上田貴子、大川明子、篠原真咲、森下直紀、  
荒木学

### 【事業要旨】

三重県民の多文化交流のために、近代看護の母ナイチンゲールの出身地イギリスの文化や歴史の紹介とともに、お茶や音楽の効能も体験する英国アフタヌーン・ティーを開催する。五感を満たすアフタヌーン・ティーを楽しみ、心と身体をリフレッシュして、地域住民の健康維持とリラックス交流を支援する。

### 【地域貢献のポイント】

- 看護大学の健康知識の共有と提供
- 地域住民、外国人、看護大学教職員及び学生の交流
- SDGs の目標である「質の高い教育をみんなに」と「人や国の不平等をなくそう」の達成
- 外国文化の紹介と体験機会の提供

## I. 活動計画

[数値目標] 年間1回程度

[実施計画] 令和5年12月23日(土) 14時～15時30分

- ・運営方法
- ・チラシ、大学ホームページで本イベントを周知する。
- ・アフタヌーン・ティーに使用する茶器、茶葉、スコーンならびに資料を準備し、学内で英国アフタヌーン・ティーを開催する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

クリスマス・アフタヌーン・ティー・パーティーを実施し、合計10名と事業メンバー6名が参加した。

1. 参加者 事業メンバー教員6名、本学学生1名、一般9名(内、外国人3名)
2. 資料 アフタヌーン・ティーについての資料を配布し、茶の歴史とともにイギリス文化を学び体験する機会を提供した。
3. 会場 参加者はアフタヌーン・ティーを実際に体験し、五感で茶の文化を楽しんだ。

[評価]

数値目標である年に1回の開催を実施できた。事後アンケートの結果によると、全員が「とてもよかった」と回答しており、参加者の満足度の高さを示す評価が得られた。参加者の感想として「アフタヌーン・ティーの由来や楽しみ方を知れた」や「有意義な時間を

過ごすことができた」との記載があり、参加者はイギリス文化を学ぶとともに、心と身体のリフレッシュの機会を得ていた。

### Ⅲ. 今後の課題

今後は計画の内容を継続するにあたって、早期に地域住民に開催日時や内容等が周知できるように準備を検討する。また、周知用のチラシの文言についても慎重に内容を検討しながら作成し、より多くの地域住民が参加でき健康を意識できる場づくりを目指す。





## 21) 看護職を目指したい小・中学生支援

### 「スピーチ・コンテスト」@みかん大

担当者：ドライデンいづみ、岩田朋美、上田貴子、小池敦、篠原真咲、森下直紀、荒木学

#### 【事業要旨】

三重県の小学生・中学生が「なりたい自分になる」支援をするため、将来の夢や就きたい職業について自信を持って語ることでできる場として、スピーチ・コンテストをはじめとするイベントを企画・開催する。子どもたちが好きなことや将来の自分像を自由に語ることで、人前で話すことへの苦手意識もなくなる。

#### 【地域貢献のポイント】

- 看護大学の健康知識の共有と提供
- 地域住民（子どもから大人まで）の交流
- 三重県民の健康とヘルスリテラシーの向上を支援
- SDGs の目標「質の高い教育をみんなに」、「ジェンダー平等を実現しよう」、「住み続けられるまちづくりを」の達成

#### I. 活動計画

〔重点課題〕初年度は、参加者への周知や確保が難しいと予測し、年間1回の開催実施は困難であるため、特に情報収集及びヒアリング・予備調査に重点を置く。

〔実施計画〕

1. 学内外で情報収集や予備調査を実施し、スピーチ・コンテストの可能性及び方向性を検討する。
2. 小学生・中学生を対象としたイベント開催に関する情報収集
3. 小学生・中学生を対象としたスピーチ・コンテストの実施可能性と方向性の検討

#### II. 活動の結果と評価

〔結果〕

初年度の活動として、スピーチ・コンテスト開催の可能性及び方向性を検討するために、学内外で情報収集や予備調査を下記の通り実施した。

1. 小学校・中学校への呼びかけの可否について県教育委員会への問い合わせ
2. 三重県庁訪問、打ち合わせ（局長、事業教員2名）、情報・資料の収集
3. 久居アルスプラザ訪問、ヒアリング調査（事業教員2名）、施設見学・情報収集
4. 第2回 IIBC 大学生英語スピーチ・コンテストへの学生応募への支援およびスピーチ・コンテストの参加者募集プロセス及び評価結果通知、参加者の意見・感想等に関する情報の収集
5. 幼児・児童言語聴覚士・元津市立小学校ことばの教室教諭・元特別支援小・中・高

## 教育士へのヒアリング調査、情報収集

### 〔評価〕

県教育委員会に問い合わせた結果、小・中学生を対象としたイベント開催にあたり各市町教育委員会の後援や協力を得るには、膨大な労力を要することが判明した。このため、各市町教育委員会を介さない方向性でスピーチ・コンテストを実施させるための検討が必要であることが明らかとなった。

三重県庁での三重県医療保健部健康推進課健康対策班との協議では、県が進める健康マイレージ事業などを活用し、川柳、ホワイト企業（三重とこわか健康経営カンパニー）とのコラボレーション等のスピーチ・コンテストの代替案の提案もあり、今後も互いに協働していく方向で進んでいる。

久居アルスプラザでの視察からは、参加者を確保するための方策としては、対象を同じくする他イベントと開催日と重ねたり、県民が興味のあるイベントとのコラボレーションを企画することで、参加者の誘導や集客が可能であることが判明した。例えば、ヒアリング調査時のケースでは、ガンダム・プラモデル展示会と子どもコンサートが開催されていたため、コンサートに参加した親子連れ家族が展示会にも足を運び、展示会は2日間で約1,000人の集客があったそうである。この情報から、スピーチ・コンテストの集客には県民が足を運びやすい施設・環境を調整する必要があることも明確となった。

また、実践英語受講生3名のスピーチ・コンテスト応募においては、全員がスピーチ・コンテストに出場するのではなく、事前にスピーチを録音したデータを送信して応募し、審査の結果、全応募者の中から8名が選抜される方法であることが明らかとなった。募集要領をはじめ、学生が応募から評価結果通知を受領するまでのデータ送信プロセスや期間（4ヶ月間）も明らかとなった。

幼児・児童言語聴覚士・元津市立小学校ことばの教室教諭・元特別支援小・中・高教育士とは、ヒアリング調査の過程で、今後スピーチのモデル講師としてセミナーや講演の依頼を検討している。

### Ⅲ. 今後の課題

今回の各所でのヒアリング調査で、教育委員会から小・中学校にスピーチ・コンテストを周知していただくことは相当の時間や労力が必要となり、実施可能かどうかは予測不可能であることが判明した。そのため、今後は、スピーチ・コンテストの参加者の対象を小・中学生に限定せず、子どもから大人までへと拡大することで、参加者を確保する方向で進めていく。また、アンケートの実施についても検討する。さらに、ヒアリング調査の結果を踏まえ、コンテスト（イベントを含む）の年1回の開催及びスピーチ・セミナーのイベントを検討していく。スピーチ・コンテストを開催するにあたっては、早期に地域住民に開催日時や内容等が周知できるよう準備を検討する。

## Ⅱ. 卒業生支援事業

1. 卒業生支援プロジェクト
2. 卒業生のきずなプロジェクト



# 1. 卒業生支援プロジェクト

担当者：長谷川智之、斎藤真、ドライデンいづみ、岩田朋美、田端真、荒木学  
山本奈津美、一尾麻美、長谷川明子

## 【事業要旨】

本事業では、卒業生相互の情報共有およびキャリアディベロップメントを支援することを目的に、三重県立看護大学同窓会（以下、同窓会）と連携し、各種事業を展開している。

今年度は、①第2回公開講座における卒業生向け参加案内、②同窓会活動支援、③卒業生調査の公表、④在学生に対する同窓会の周知を実施する。

## 【地域貢献のポイント】

本事業における地域貢献のポイントは以下の2点である。

- ・同窓生が大学や同窓会のイベントに参加することで、同窓生間の情報共有およびキャリアディベロップメントに寄与することができる
- ・在学生が卒業後においても同窓会会員の相互交流について知ることで、キャリアディベロップメントの一助となることができる

## 【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症の対応の変化に伴い、今後においても在学生および卒業生が本学を身近に感じることができるよう、同窓会と連携し、卒業生に対する各種イベントの企画、発信を行っていく必要がある。

## I. 活動計画

### [重点課題]

1. 第2回公開講座に、20名の卒業生が参加する。
2. 同窓会が主催するイベントを1回支援する。
3. 卒業生調査を論文にまとめ公表する。
4. 同窓会加入者数が昨年度より1名以上増加する。
5. 同窓会と意見交換会を1回開催する。

### [実施計画]

1. 第2回公開講座において卒業生限定オンライン配信を実施する。

令和3年度と同4年度では、第3回公開講座を同窓会との共催とし卒業生限定でオンライン配信を行ってきたが、講座内容と卒業生調査により示された卒業生のニーズとの隔たりが大きかったことから、今年度は、看護に関連のあるテーマとなった第2回公開講座を同窓会共催とした。

2. 同窓会主催の講演会の運営を支援する。
3. 卒業生調査の結果を論文にまとめ、学内外に公表する。
4. 在学生に対して同窓会の周知活動を行う。
5. 同窓会との意見交換会を開催し、今度の同窓会支援の在り方を検討する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 第2回公開講座における卒業生限定オンライン配信

令和5年10月28日に開催された第2回公開講座「こころ穏やかに生きるために」(講師：玉置妙憂先生)を同窓会共催とし、卒業生ならびに修了生が来場またはオンラインで参加できるようにした。周知活動として、チラシを作成し、同窓会にその配布を依頼するとともに、過去10年の卒業生・修了生にはメールによる案内も行った。

当日の参加者は、48名(内訳：来場者6名、オンライン42名)であった。参加者アンケート(回答者28名、回収率58.3%)の結果より、参加者の年代は、20代3名(10.7%)、30代4名(14.3%)、40代8名(28.6%)、50代10名(35.7%)、60代3名(10.7%)であり、幅広い年代の同窓生が参加した。これまでの公開講座への参加回数は、0回15名(53.6%)、1回4名(14.3%)、2回2名(7.1%)、3回以上7名(25.0%)と、回答者の半数以上が初めての参加であった。公開講座の内容に対する評価は、『とてもよかった』19名(67.9%)、『よかった』8名(28.6%)であり、好評を得ることができた(図1)。また、当日の運営(オンライン環境やスタッフの対応など)に対しても、『満足』22名(78.6%)、『やや満足』6名(21.4%)であり、肯定的な評価を得た(図2)。

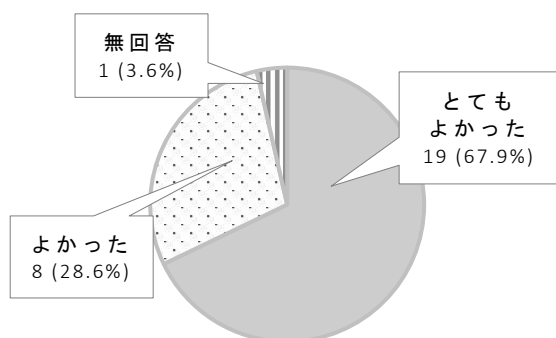


図1 公開講座の内容に対する評価 (n = 28)

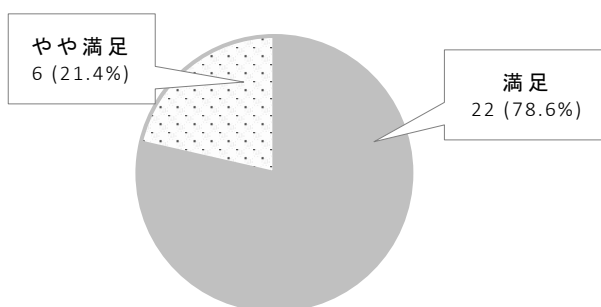


図2 運営に対する評価 (n = 28)

### 2. 同窓会主催の講演への支援

令和6年3月2日、同窓会主催の講演会「こころを元気にする3つのC～認知行動療法を活かすこころの整え方～」(講師：大野裕先生)において、本プロジェクトメンバー6名が受付、会場案内、オンライン受講者への対応などを担当し、当日の運営を支援した。講演会は、オンライン環境にも問題なく滞りなく終了した。

### 3. 卒業生調査の結果の公表

三重県立看護大学が卒業生支援の一環として同窓会と協働で実施した卒業生調査は、卒業後教育や同窓会活動への支援などの検討に活用するための貴重な資料である。この調査結果を学内外に公表できるように、結果を論文にまとめ投稿した。

### 4. 在学生に対する同窓会の周知活動

大学内の国際交流イベントにおいて、同窓会のグッズを配付し同窓会の周知を行った。また、7月9日に開催された夢緑祭において、同窓会のPRブースの管理を行った。今年度より、4年生に対するガイダンスなどにおける同窓会に関する説明とクラス代表の選

出は、同窓会が行うことになった。同窓会の報告によると、4年生の同窓会加入者は、昨年度よりも減少した。

#### 5. 同窓会との意見交換会

3月18日に、同窓会会長および大学（地域交流センター長、地域交流センター委員、本プロジェクト責任者代行）で今年度の活動内容および次年度計画を共有した。また、同窓会の要望にもとづき、本プロジェクトから同窓会の活動拡大ならびに加入者増加に必要な方略について、文書にて提案を行った。

#### 6. その他の活動

7月9日の夢緑祭では、実行委員会から協力依頼を受け、相談コーナー「それ看護職にきいてみよう！」を設けて、一般来場者や在学生からの相談に応じた。参加者は10名（内訳：小学生2名、高校生3名、高校生の保護者2名、本学学部生3名）で、相談内容は、各職種の業務の内容や就職について、やりがいや魅力、苦労について、看護学生の大学生活、実習等についてであった。

### [評価]

第2回公開講座の同窓生の参加者数が48名で、昨年度の11名より大幅に増加し、数値目標を達成した。また、今回初めて公開講座に参加した同窓生がアンケート回答者の約半数を占めていた。回答者の概ね全員が、講座内容を肯定的に評価しており、卒業生のニーズに沿った講座内容であったことが、参加者の増加につながったと推察される。

重点課題2「同窓会が主催するイベントを1回支援する」ならびに同5「同窓会と意見交換会を1回開催する」は、計画通りに活動し、目標を達成することができた。重点課題3「卒業生調査を論文にまとめ公表する」については、結果の公表には至らなかったものの、それに向けて着実に前進することができた。他方、重点課題4「同窓会加入者数が昨年度より1名以上増加する」については、同窓会加入者が昨年度よりも減少しており、目標達成には至らなかった。

### Ⅲ. 今後の課題

これまで、同窓会活動支援の一環として公開講座を同窓会共催とし、卒業生限定でオンライン配信を行っていたが、今年度より同窓会が講演会を主催するはこびとなった。今後は、同窓会主催の講演会や研修会において、同窓会のニーズに応じた支援を提供していく。公開講座の卒業生限定オンライン配信は、同窓会が講演会や研修会を主催できるまでの暫定的な支援であったことから、次年度は、同窓会活動支援としての公開講座の卒業生限定オンライン配信は行わないこととする。

卒業生相互の情報共有やキャリアディベロップメントへの支援において、同窓会は必要な存在であり、その活動の維持や活性化のためには、同窓会加入者を増加させることが課題のひとつである。同窓会と協働して在学生への同窓会の周知活動を行うとともに、加入者確保における課題を明確化し、具体的な方略を検討することが必要である。

## 2. 卒業生のきずなプロジェクト

担当者：中北裕子、林辰弥、灘波浩子、日比野直子、長谷川智之、ドライデンいづみ、川島珠実、荻野妃那、山本奈津美、米川さや香、辻まどか、橋本千愛、新谷明子、竹村和誠

### 【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。(本事業は、平成 23 年度からの事業を引き継いだ単年度事業で、平成 29 年度より交流センター提案事業となった。)

### 【地域貢献のポイント】

1. 卒業生が気楽に母校に立ち寄る場を設けることで、卒後に困った際、ハード・ソフト両面でのリソースを大学で得ることができることを知ってもらう。
2. 仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後 1～3 年までを対象に卒業生支援事業として大学がフォローすることで、離職予防に貢献できると考える。
3. 医療機関に就職した卒業生に比べ、保健所に就職した卒業生は採血技術の習得の機会が限られている。支援を行うことで、県民へのサービス向上につなげることができる。

### 【昨年度からの課題】

参加者した卒業生全員が茶話会継続を希望していることに加えて、新型コロナウイルス感染症は、2 類感染症から 5 類感染症への引き下げに伴い、各医療機関で定められている看護職者の行動制限も緩和されることが期待される。また、コロナ禍に就職した卒業生は、本事業の茶話会参加もままならない状況であったと推測されるため、次年度の茶話会は、可能な限り対面で行うとともに、より多くの卒業生が参加できるよう検討を重ねる必要がある。対面を実施することでお互いの思いを伝えあえる空気感や一体感を共有し、それぞれが個別に話しや具体的な相談ができるようにする。

## I. 活動計画

[数値目標]

1. 卒後 1 年目を対象に茶話会を 2 回 (7 月、2 月) 開催する。  
出席者数は、第 1 回、第 2 回茶話会それぞれ 30 名程度を目標とする。
2. 卒後 2 年目を対象に茶話会を 1 回 (2 月) 開催する。  
出席者数は、30 名程度を目標とする。

[実施計画]

### 【茶話会の開催】

1. 卒後 1 年目の卒業生を対象に第 1 回茶話会を 7 月に対面にて開催する。保健所就職者を対象に採血練習のブースを設ける。
2. 第 2 回茶話会は例年 3 月に開催していたが、医療機関からの「年度末は勤務調整が



難しい」との声により 2 月に対面にて開催する。

3. 卒後 2 年目の卒業生を対象とした茶話会を 2 月（卒後 1 年目卒業生対象の茶話会と同日）に対面にて開催する。
4. 各職場の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。全体会終了後、個別に本学教員に相談できる時間を提供する。特に 2 月は 2 学年を同時に集合する場とすることで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。
5. 茶話会の開催に向けて
  - 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
  - 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して連絡し、会への出席を呼びかける。
  - 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
  - 4) 教職員には開催周知共に、参加協力を依頼する。
6. 茶話会の開催後
  - 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アドレスを活用して、配信する。
  - 2) 茶話会への参加協力についてのお礼文書を参加者の就職先に郵送する。
7. 卒業生への周知
  - 1) 卒業式のリハーサル時に、「卒後 1 年目対象茶話会の開催予定」を周知する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 第 1 回茶話会
  - 1) 令和 5 年 7 月 9 日（日）14 時～16 時に大講義室にて開催した。卒業生 26 名、教員 17 名／計 43 名の参加があった。
  - 2) 参加者全員が近況を報告しあい、新人職員研修や仕事、職場の様子について共有することができた。
  - 3) 保健師の卒業生の希望で採血練習ができる場を設けたところ、看護師の卒業生が自らの体験を話す機会になったり、コツを教えてくれたりして卒業生同士が教え合う場にもなっていた。

### 【採血練習の様子】



- 4) アンケート結果：回答者 19 名（回答率 73.1%）であった。茶話会を知った方法は、病院へ配布したチラシ・本事業メールからそれぞれ 57.9%、教員からが

21.1%、LINE が 15.8%であった。参加に対する支援は、休暇 31.6%、勤務扱い 10.5%、快く送り出してくれた 31.6%、情報が回ってこなかった 5.3%であった。開催方法（夢緑祭との同日開催含む）や時期・時間・内容にいて、全員が「満足」と回答し、2月の茶話会開催を希望していた。

※自由記述抜粋：「卒一のみennaと話せて、気持ちが少し軽くなりました！ありがとうございました！」「卒業するとなかなか会えなくなってしまったので、このような催しで皆さんと直接会ってお話出来てよかった」「先生方にも会ってお話ができ、職種や人生の先輩としてアドバイスを頂けて、学生時代に戻れたような気持ちになれました」「12月にボーナス貰って、それまでがんばろう!!」

#### 【参加者記念撮影】



## 2. 第2回茶話会

- 1) 令和6年2月3日（土）14時～17時に卒後1・2年目の卒業生を対象として、大講義室にて開催した。卒業生22名、教員10名／計32名の参加があった。
- 2) 夜勤明けの卒業生も含めて、参加者全員がシュークリーム等のお菓子をほおぼりながら、近況を報告し合った。また、卒業時にそれぞれが記載した「1年後の自分へ」のメッセージカードを開封し、笑いあったり、涙する姿があった。
- 3) アンケート結果：回答者22名（回答率100%）であった。茶話会を知った方法は、病院へ配布したチラシ50.0%、本事業メールからそれぞれ77.3%、教員から22.7%、LINEが13.6%であった。参加に対する支援は、休暇27.3%、勤務扱い9.1%、快く送り出してくれた22.7%、特になし40.9%であった。開催方法や時期・時間・内容について、ほぼ全員が「満足」と回答し、今後も同様の茶話会開催を希望していた。卒業生支援としては、看護研究指導や進学等キャリアアップに関する相談のほか、サーフロー挿入や採血演習、災害対策研修を望む声もあった。

※自由記述抜粋：「友達と楽しくお話できてストレス発散になった。」「みんな同じように頑張っていることがわかった。久しぶりに同級生に会って話せたことが楽しかった」「2回目も集まれてうれしかったです。難しいとは思いますが、何回でもみんなと集まって近況報告会を兼ねて先生方ともお話ししたいなと思います。みんな

なそれぞれの場所で頑張っていることがわかったから、私もまた頑張ります！今日はありがとうございました!!」「大学に来る機会をつくってもらえてとても嬉しいです。楽しかったです！」

#### 【参加者記念撮影】



#### [評価]

今年度の茶話会は、2回とも対面にて開催することができた。両会とも卒業生の参加者が20名を超え、教員を含めた参加者は目標の30名を達成することができた。第1・2回とも茶話会は16時に終了したが、その後もほとんどの卒業生が名残惜しそうに語り合う姿が見られ、卒業生が解散したのはほぼ17時であったことから、卒業生同士、卒業生と教員が再会を喜びあえた意義はあったと考える。職場から離れ、同窓生や教員らと笑い合えたり、同窓生が同じように頑張っているを知ったことで「明日からも頑張ろう」という気持ちに繋げることができたと推測する。

### Ⅲ. 今後の課題

第1回茶話会、第2回茶話会終了後のアンケート結果より、本会参加者の茶話会の満足度が高いだけでなく、大学が行う卒業生への支援や後輩に対する茶話会継続を希望していることから、今後も本事業を継続する意義がある。また、今年初めて企画した採血練習では、技術向上の機会だけではなく、参加者同士の交流にもなっていたことから、今後継続して開催する必要があると考える。

参加者の多くが就職先や所属長からの配慮により参加できていた一方で、職場に本会の情報が周知されていない施設もあることがわかった。本事業では、茶話会の周知と参加を促していただくために、各職場に茶話会開催の案内文と卒業生の人数分のチラシを郵送している。しかし、チラシの効果や職場からの支援がやや減少していることから、就職先との連携強化が課題である。次年度は、stメールとチラシの双方を活用し周知を行うと共に、実習等で卒業生の就職先を訪れる際には、積極的に茶話会の対象者及びその上司に茶話会の開催について呼びかけることが必要であると考えられる。



### Ⅲ. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修
2. 助産師（中堅者・指導者）研修
3. 三重県認知症対応力向上研修
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業



# 1. 三重県新人助産師合同研修

担当者：大平肇子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚  
地域交流センター 川瀬浩子

## 【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」「妊産褥婦及び家族への説明と助言」「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

## 【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

## 【昨年度からの課題】

新人助産師が助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう、助産師としての成長を支える機会を継続的に提供する。

## I. 活動計画

三重県より「令和5年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、三重県内の医療施設で働く新人助産師を対象とした4日間の研修をおして、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の習得を支援する。これまでの本事業の評価にもとづき、今年度も「新人助産師集合!!三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”“高め合おう”」をテーマに、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の感染症法（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）上の位置付けが5類感染症になったものの、医療施設では引き続き感染対策が講じられている状況を考慮し、昨年度に引き続き対面形式とZoomを利用したオンライン形式を併用した講義形態とした。

### 〔重点課題〕

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和5年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 研修プログラム

昨年度の本事業のアンケートで得られた新人助産師の研修会へのニーズをふまえて、4日間の研修プログラムを企画し実施した（表1）。

表1 令和5年度三重県新人助産師合同研修プログラム

日程	午 前 (10:00~12:00)	午 後	
11月4日 (土) 1日目	周産期分野における感染看護の実際 【講義】	『母乳育児成功のための10のステップ』に基づく支援 (13:00~16:00) 【講義・演習】	
	市立四日市病院 感染管理認定看護師 奥村恵美子	日本母乳の会理事 パルモア病院看護部長代行 井田 久留美	
12月9日 (土) 2日目	周産期のメンタルヘルス 【講義・演習】	ハイリスク妊産婦の看護 (13:00~14:30) 【講義・演習】	インシデントから学ぶ (14:40~15:30) 【講義】
	三重大学医学部附属病院 看護師長・母性看護専門看護師 森實かおり	三重県立総合医療センター 看護師長 佐藤里絵	三重県立看護大学 教授 中西貴美子
1月8日 (祝・月) 3日目	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 【講義】	ハイリスク新生児の看護 (13:00~15:30) 【講義・演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内菌 広匡	国立病院機構三重中央医療センター 副看護師長・新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美	
2月10日 (土) 4日目	産婦人科診療ガイドラインにもとづく緊急時の対応 【講義】	事例検討をとおした助産師の判断と看護実践 (13:00~15:50) 【演習】	
	伊勢赤十字病院 部長 前川 有香	伊勢赤十字病院 部長 前川 有香 国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 副看護師長 鈴木 薫、副看護師長 東 真由美	

### 2. 研修の申込み状況

7月に妊婦健康診査を実施している県内の医療施設 59 施設（病院 17 施設、診療所 42 施設）に開催案内を送付し、参加者を募集した。11 施設から 26 名の申込みがあった。このうち 3 名が、本学卒業生であった。

### 3. 研修申込み者の属性

研修申込み者 26 名の就業場所は、診療所 2 名（7.7%）、病院 24 名（92.3%）で、病院のうち周産期母子医療センターは 15 名（57.7%）であった。研修初日のアンケート調査（回答者 21 名）によると、看護師経験者は 1 名（4.8%）であった。研修修了時点（回答者 18 名）での分娩介助件数は、「1~9 例」4 名（22.2%）、「10~19 例」3 名（16.7%）、「20~29 例」と「30 例以上」がそれぞれ 1 名（5.6%）であった。「経験なし」は 9 名（50.0%）で、その理由として、新生児科や GCU (Growing Care Unit) などで勤務していることや 3 年目以降で分娩介助を行うことなどが挙げられた。



#### 4. 受講状況

出席日数は皆出席 19 名 (73.1%)、3 日間 4 名 (15.4%)、2 日間と 1 日間がそれぞれ 1 名 (3.8%)、1 名 (3.8%) が全日欠席した。研修各日の出席者数と出席率は、1 日目 23 名 (88.5%)、2 日目 22 名 (84.6%)、3 日目 24 名 (92.3%)、4 日目 22 名 (84.6%) であり、概ね 85%以上の出席率であったものの、例年よりも低かった。オンラインでの参加は、1 日目 15 名 (65.2%)、2 日目 8 名 (36.4%)、3 日目 6 名 (25.0%)、4 日目 5 名 (22.7%) であった。



1 日目 『母乳育児成功のための 10 のステップ』に基づく支援

#### [評価]

##### 1. アンケートの回答状況

研修各日のアンケートの回答者 (回収率) は、1 日目 21 名 (91.3%)、2 日目 17 名 (77.3%)、3 日目 20 名 (83.3%)、4 日目 18 名 (81.8%) であった。



4 日目 事例検討をとおした助産師の判断と看護実践: グループワークの様子

##### 2. 研修内容

研修内容について、4 日間全てにおいて概ね全員が、「期待通り」または「まあまあ期待通り」と回答し、肯定的評価を得た (図 1)。その理由として、『難しいと感じていた母乳介助について深く学ぶことができた。今後実践していきたいと思えた (1 日目)』『ハイリスク管理など詳しく知りたい内容を学ぶことができた (2 日目)』『普段の業務に役立つ知識をたくさん得られた (3 日目)』『他施設はどのように対応しているのかなど話し合えて新たな視点が見えた (4 日目)』などが挙げられた。

研修修了時のアンケートにおいて、本研修会全体の評価を把握した (回答者 18 名)。本研修が助産師としての基本的知識や技術の習得につながったか、ならびに助産師としての意欲の向上につながったかについて、それぞれ回答者全員が「大変そう思う」または「まあまあそう思う」と回答した (図 2, 3)。

助産師としての基本的知識や技術の習得につながった理由として、『すべて学びたい内容であった』『助産師として必要な基本的な知識を身につけるきっかけとなった』などが挙げられた。また、助産師としての意欲の向上につながった理由として、『同期で考えることで一緒に頑張ろうと思えるから』『他病院の同期と会え、学べたから』などが挙げられており、グループワークなどをおとした新人助産師同士の交流が意欲の向上につながっていた。本研修をとおして得られた自

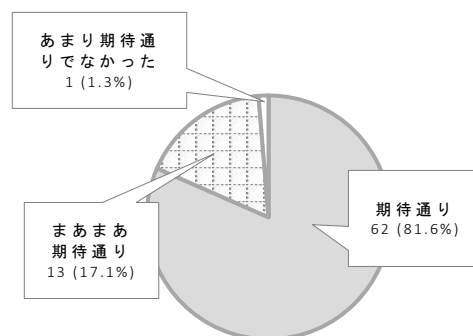


図 1 研修内容が期待通りであったか (n = 76)

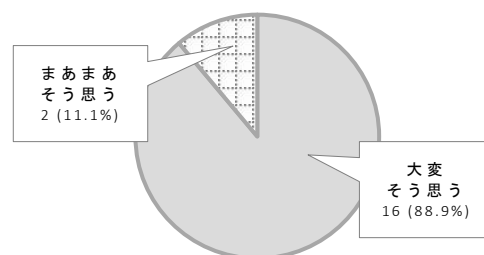


図 2 基本的知識や技術の習得につながる研修であったか (n = 18)

己の課題として、『異常時の対応』『妊産婦の精神的ケア』『アセスメント能力』『産婦さんへの寄り添い方』などの臨床実践における課題のほかに、『ケアや関わりを行う中で対象者に合う個性の看護ができるよう知識を深めていきたい』『助産師の業務への知識を深める』などの知識の修得、『わからないことはそのままにしないこと』『色々な視点を取り入れ、実践に活かして試して経験を積むこと』など今後の助産師としての取り組み方に関する課題が挙げられた。

また、本日の研修内容で印象に残ったこと（記述式回答）においてもグループワークに関する肯定的な意見が散見された。『グループワークが他の病院で働いている方との交流の機会にもなった』『実際の事例をグループワークで話し合い、知識の振り返りや知識を深めることができた』など、グループワークが交流の機会や学びの深まりに役立っていることが示された。さらに、『他の施設での対応を聞いて、授乳介助や精神的ケアなど参考にできることが沢山あった』『(母体) 搬送する側と受け入れる側の両方で話し合うことが出来てよかった』など、グループワークをとおして他施設の臨床実践の実際を知ることが学びにつながっており、本研修事業には多施設合同研修ならではの学習効果があることが示唆された。

### 3. 研修会の運営

研修会の運営については、回答者の全員が「よい」または「まあまあよい」と回答し、好評を得た（図4）。その理由として、『リモートでもグループで話し合い（が）できるような環境』『画面がみやすく、講師の声もききやすかった』『時間通りだった』『スムーズだった』などが挙げられた。今後、希望する研修参加方法は、「対面形式」11名（61.1%）、「オンライン形式」1名（5.6%）、「対面、オンラインのどちらでもよい」6名（33.3%）であり、概ね全員が対面形式での参加に肯定的であった。

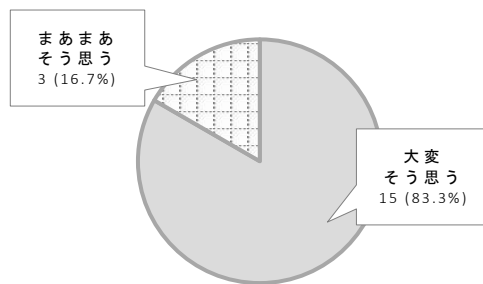


図3 意欲の向上につながる研修であったか(n = 18)

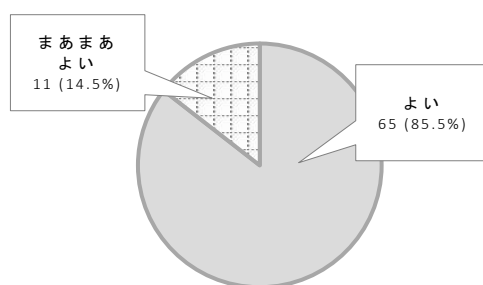


図4 研修会運営に対する評価 (n = 76)

## III. 今後の課題

昨年度に引き続き今年度も感染対策の一環として対面形式とオンライン形式を併用して本研修会を開催した。グループワークが新人助産師同士の交流の促進だけでなく、学びや意欲の向上につながっていることが示されており、グループワークを効果的に取り入れていくことが重要である。次年度は、グループワークのさらなる活性化のため、全面对面開催を検討する。

前述の評価から、本研修事業が新人助産師の臨床実践能力の獲得ならびに助産師としてのモチベーション向上に資する研修会であったと考える。次年度も開催時期・方法・内容を工夫して、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、助産師としてのモチベーションや助産観を高めあう関係性を醸成していくことが課題である。

## 2. 助産師（中堅者・指導者）研修

担当者： 大平肇子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚  
地域交流センター 川瀬浩子

### 【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。県内で就業する助産師が、妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県の委託を受け、県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした研修を企画し提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

### 【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

### 【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症の予防対策は緩和されることが見込まれるが、助産師の多様な勤務形態に対応した開催方法を検討するとともに、助産師にとって安心して受講できる環境を整え、魅力ある研修とする。

### I. 活動計画

三重県より「令和5年度助産師（中堅者・指導者）研修事業」を受託し、三重県内の医療施設・教育機関で就業する中堅層（助産師経験年数概ね5年以上）および指導者的立場の助産師を対象とした3日間の研修を実施する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度は「助産師のReskilling～助産ケアの暗黙知を共有しよう～」をテーマに、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の予防対策は緩和されたが、助産師の多様な勤務形態に対応し、講義形態を対面形式とオンライン形式を併用し、研修参加者が事前にいずれか選択できるように配慮した。アンケート実施にあたってはMicrosoft Formsを活用した

#### 〔重点課題〕

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和5年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 研修参加者から、自らや就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。

## II. 活動の結果と評価

### [結果]

#### 1. 研修プログラムについて

令和5年10月21日（土）、11月11日（土）、12月23日（土）の3日間（10:00～15:30）の研修プログラムを実施した（表1）。昨年度の本事業のアンケートで得られた結果をふまえて、研修プログラムを企画した（表1）

表1 令和5年度助産師（中堅者・指導者）研修プログラム

	午前（10:00～12:00）	午後（13:00～15:30）		
10月21日 （土） （1日目）	胎児・母体の急変時の対応 【講義】	三重県の母子保健のトピックス～伴走型子育て支援～【講義】		
		三重県の母子保健の状況 （13:00～14:00）	名張市の母子保健の状況 （14:05～14:45）	志摩市の母子保健の状況 （14:50～15:30）
	伊勢赤十字病院 産婦人科	三重県子ども・福祉部	名張市 福祉子ども部 健康・子育て支援室	志摩市 健康福祉部 健康推進課 母子保健係
	部長 前川 有香	次長兼子ども政策総括監 西崎 水泉	保健師 田摩 裕子 助産師 寺嶋 紗希	係長 杉本 順子 保健師 相可 由実 保健師 金子 亜希
11月11日 （土） （2日目）	性暴力被害者支援と助産師の役割【講義】	子どもの発達障害とその対応 障害からニューロダイバーシティへ【講義/演習】		
	三重県立看護大学 母性看護学 講師 杉山泰子	三重県立看護大学 精神看護学 准教授 長南幸恵		
12月23日 （土） （3日目）	母子と家族のための減災 助産師のための減災ドリル【講義】	産後ケア事業の実際と多職種連携【講義】		
	日本赤十字社医療センター 看護部 中根 直子	くつろか助産院 院長 瀧地 祐子		

#### 2. 研修参加者の受講状況について

7月に県内医療施設115施設（病院17施設、診療所42施設、助産所56施設）、教育機関6施設、市町母子保健担当者30施設に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目35名、2日目21名、3日目24名であり、のべ応募者数は80名であった。応募者（実人数）49名の受講状況の内訳は、1日のみ30名、2日間6名、3日間11名、欠席2名であった。

出席者は47名（実人数）であり、出席率は93.8%であった。研修各日の出席者数と出席率（出席者／応募者）は、1日目34名（97.1%）、2日目20名（95.2%）、3日目21名（87.5%）であった。出席者のうち、オンライン形式を選択した者は、1日目19名（55.9%）、2日目15名（75.0%）、3日目15名（71.4%）であり、1日目は5割を、2日目、3日目は7割を超える状況であった。出席者の就業場所は病院20名、診療所11名、助産所10名、教育機関2名、市町3名、その他1名であった。

### [評価]

#### 1. アンケートの回答状況

研修各日終了時のアンケートの回答者（回収率）は、1日目22名（66.7%）、2日目16名（80.0%）、3日目



16名（76.2%）であった。

## 2. アンケート結果

### 1) 研修内容について

研修内容が期待通りであったかについては、1日目は、期待通り22名（100%）であり、その理由は「最新の情報を知ることができた」、「ガイドラインの変更点が勉強になった」などであった。2日目は、期待通り12名（75.0%）、まあまあ期待通り4名（25.0%）であり、その理由は「臨床では学べない、けれど知っておくべき重要な内容だったから」、「新たな知識が得られて視野が広がった」などであった。3日目は、期待通り9名（56.3%）、まあまあ期待通り6名（37.5%）であり、その理由は「まさにいま自分が必要としている内容だった」、「事例も挙げていただきわかりやすかった」などの理由が挙げられた。

### 2) 本研修が助産実践能力の向上につながるかについて

本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には、大変そう思う20名（90.9%）、まあまあそう思う2名（9.1%）であり、その理由として「マニュアルの見直しや救急カートの再チェックを実施する」、「対象者に対し必要な情報・支援の幅が広がった」などが挙げられた。2日目には、大変そう思う8名（50.0%）、まあまあそう思う8名（50.0%）であり、「日々の業務における視点が変わった」、「性教育や福祉に関わる業務の際に活かしたい」、「臨床ではないので間接的な実践能力になってしまうのが残念」などが挙げられた。3日目には、大変そう思う9名（56.3%）、まあまあそう思う7名（43.8%）であり、「職場で避難訓練がなされておらずその提案をしていきたい」、「自分がまだまだ勉強したいことがわかった」、などが挙げられた。

### 3) 研修参加者にとって必要な取り組みや課題について

研修をとおして得られた助産実践能力の向上に必要な取り組みや課題をたずねると、1日目には「産後のメンタルに今後より関わって勉強していきたい」、「シミュレーショントレーニングが必要」などが挙げられた。2日目は「自分の考えや学びではなく、所属先が取り組んでいるかいないかで自分のケアが左右されてきたように思う。自己研鑽に努め、実践に繋げる意思を強くしたい」、「スタッフ間の認識の違いから、ケースを共有することが難しいと感じる場合が多く、話し合うことを諦めることが多い。日頃から話題にし、わかりやすく伝えることが課題だと思った」などが挙げられた。3日目は「病院内の災害委員会で提案したい」、「産後ケアを制度の中だけではなく自治体と交渉するスキルも身につけたい」などが挙げられた。

### 4) 研修会の運営について

研修会の運営については、1日目には、よい14名（63.6%）、まあまあよい8名（36.4%）であり、その理由は「オンラインで学習できたことがありがたかった」、「聞き取れない不具合があったが解決が早かった」、「最初音声聞き取れず残念だった」などであった。2日目には、よい10名（62.5%）、まあまあよい6名（37.5%）であり、「ブレイクアウトルームでの意見交換もスムーズだった」、「グループワークのテーマがわかりづらかった」などの理由が挙げられた。3日目には、よい11名（68.8%）、まあまあよい5名（31.3%）であり、「ハイブリッド形式はとて面白いと思う」、「時間

の管理が十分でなかった」などが挙げられた。

#### 5) 希望する研修内容について

今後開催を希望する研修内容として、「キャリアアップ」、「最新の情報の講義」、「超音波エコーの取り扱い」、「CTGの判読」、「産後ケア実務に関する内容」、「乳房トラブルの対処法」、「周産期メンタルケア」、「乳幼児の発達支援」、「発達障害」、「乳幼児虐待」、「性教育」、「DV」、「更年期に関する研修」などが挙げられた。

#### 6) その他

その他、本事業に対する意見として「是非参加したいので続けてほしい」、「都合がつかず受けられなかった研修もあったのでビデオ録画の視聴をさせていただきたい」、「12月は年末で慌ただしいのでできれば外してほしい」などがあつた。

### Ⅲ. 今後の課題

アンケート結果から、受講形態を各自の事情に応じて選択できるようにした点が好評であった。今後もハイブリッド形式で実施していくことで多くの参加者の受講が見込まれる。オンラインの運営面での充実を強化し、今後もハイブリッド形式で実施していく。また、本研修に対する助産師の期待が高いこともうかがえる。参加者が希望する研修内容と、周産期医療における助産師を取り巻く課題をあわせテーマを検討し、魅力ある研修としていくことが課題である。



### 3. 三重県認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター 林辰弥、川瀬浩子  
アドバイザー 清水律子

#### 【事業要旨】

三重県では、今後の認知症高齢者の増加により、身近な主治医（かかりつけ医）のもとに通院する高齢者の中からも経過中に認知症を発症するケースの増加等が予想されることから、医療従事者が認知症ケアについて理解し適切な対応をできるようにするための研修等を実施し、各地域における早期診断・早期対応のための体制を整備している。本事業は、三重県の委託をうけ、下記の研修を実施するものである。

#### 1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

病院勤務以外（診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等）の看護師、歯科衛生士等の医療従事者に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や認知症ケアの原則、医療と介護の連携の重要性等の知識について修得するための研修

#### 2. 看護職員認知症対応力向上研修事業

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴などに対する実践的な対応力を習得するための研修

#### 【地域貢献のポイント】

#### 1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

- ・認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手を育成する。

#### 2. 看護職員認知症対応力向上研修事業

- ・病院で認知症ケアに携わる看護師の質の向上に貢献する。
- ・同じ職場の看護職員等に対し、研修で学んだ知識や実践対応力を指導することで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築ができる。

#### 【昨年度からの課題】

#### 1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

多職種の参加が得られやすいように、様々な組織団体に協力を仰ぎ、参加者が充実した研修を受けられるように、協力体制を構築していく。

#### 2. 看護職員認知症対応力向上研修事業

研修提供体制を整えて定員の見直しの検討を行う。

#### 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

#### I. 活動計画

[数値目標]

- ・昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する。
- ・県内全域から参加者を得る。

[実施計画]

昨年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 県内介護事業所へ ML による周知、および歯科医師会の協力を得、所属歯科へのチラシの配布により、所属先から各医療従事者への広報に勤める。
- ・ アドバイザーとして本学「老年看護学」の教員を加え、また昨年度のアンケートで得られた研修会へのニーズより、事例検討にファシリテーターを配置する。
- ・ 事前に受講者の「地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となるための課題と望むサポート」について把握し、研修実施時に配慮する。
- ・ 事業評価アンケートは全てオンライン上での回答および集計が可能な Microsoft Forms を使用する。

実施計画

- ・ 厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施要領」の標準的なカリキュラムに基づき研修をプログラムする。
- ・ 7～8月に、三重県長寿介護課が県内診療所・介護事業所に ML による HP リンクのお知らせにて周知する。本学からは、保健所・保健センター：高齢福祉関連課 39 施設、三重県訪問看護ステーション協議会、三重県訪問看護事業所 225 施設、地域包括支援センター68 施設、各専門士・師会 7 か所に開催案内を送付する。また歯科医師会・公衆衛生学院の協力を得て、それぞれ 870 部と 50 部のチラシを配布する。さらに本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・ 11月5日と2月3日の2回実施する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修の実際

講義および事例検討を集合研修にて2回実施した。受講者は123名（R4 139名）で、県内全域（北部42名、伊賀21名、中部37名、伊勢志摩21名、紀勢・東紀州2名）からの参加であった。研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

表1 研修プログラム

科目		時間	講師
講義	1.基本的知識(20分)	9:30～ 11:10	清水 律子 (県立看護大学 老年看護学 准教授)
	2.地域における実践(70分)		
	3.社会資源等(10分)		
事例検討 とGW	テーマ:多機関連携・多職種連携で認知症の人を早期から支える	11:20～ 12:20	清水 律子(県立看護大学 老年看護学 准教授) 【ファシリテーター】 ・田端 真(県立看護大学 老年看護学 助教) 11/5 認知症看護認定看護師 ・中東 暉(済生会松阪総合病院) ・加藤 千晶(社会医療法人財団 大樹会 総合病院 回生病院) ・山本 公子(社会福祉法人恩賜財団済生会支部 三重県済生会明和病院) ・田米 美里(社会福祉法人恩賜財団済生会支部 三重県済生会明和病院) ・宮本 桂子(市立伊勢総合病院) 2/3 ・奥野 歩(済生会松阪総合病院 認知症看護認定看護師) ・五味 正治(紀北町役場 福祉保健課、県立看護大学 小児看護学分野 院生)



## 2. 受講者の属性

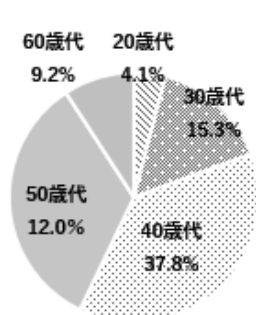


図1 受講者年代

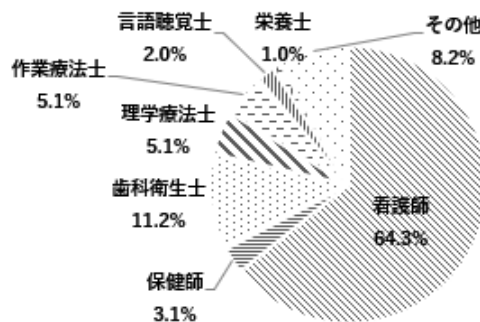


図2 受講職種

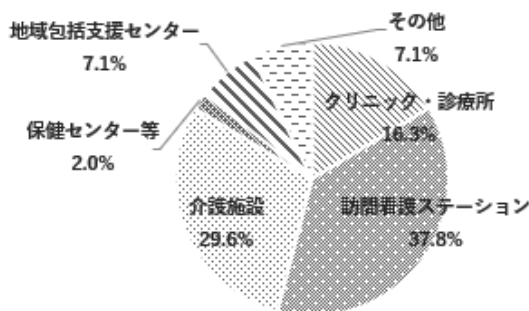


図3 受講者所属施設

職種は看護職が多いものの、年代・職種・所属施設は様々であった。

事前に受講者の「地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となるための課題と望むサポート」について把握した結果、「地域連携」、「スタッフの認知症理解への働きかけ」、「地域住民の認知症理解への働きかけ」が挙げられた。

## 3. 受講後アンケート結果（回収率：第1回 77.8% 第2回 83.3%）

### 1) 科目の到達目標

科目の到達目標の到達度を図4に示す。概ね「できた、できそうである」、「やや：できた、できそうである」の割合が高く、合わせて70.4～96.9%であった。その理由は、講義では「認知症を基礎知識から学ぶことが出来た」、「適切な治療とケアやサービスの提供で（対象者の）生活の質が維持できるので、早期発見・早期対応の大切さが理解できた」、「地域での多職種との連携の重要性と早期介入が大事だとわかった」、事例検討では「自分の住む自治体の施策や地域支援体制がよくわかった」、「それぞれの職種の視点から、多角的にサポートできることがわかった」、「地域全体で支えるということの重要性がわかった」等であった。一方、「活用できる制度等について本人・家族に説明できそうですか」と「認知症の現状やその病態について、概要を説明できそうですか」については、「できなかった、できそうにない」の回答者がみられ、その理由は「もう少し学習が必要」、「復習が必要」、「実践には自信がない」等であった。

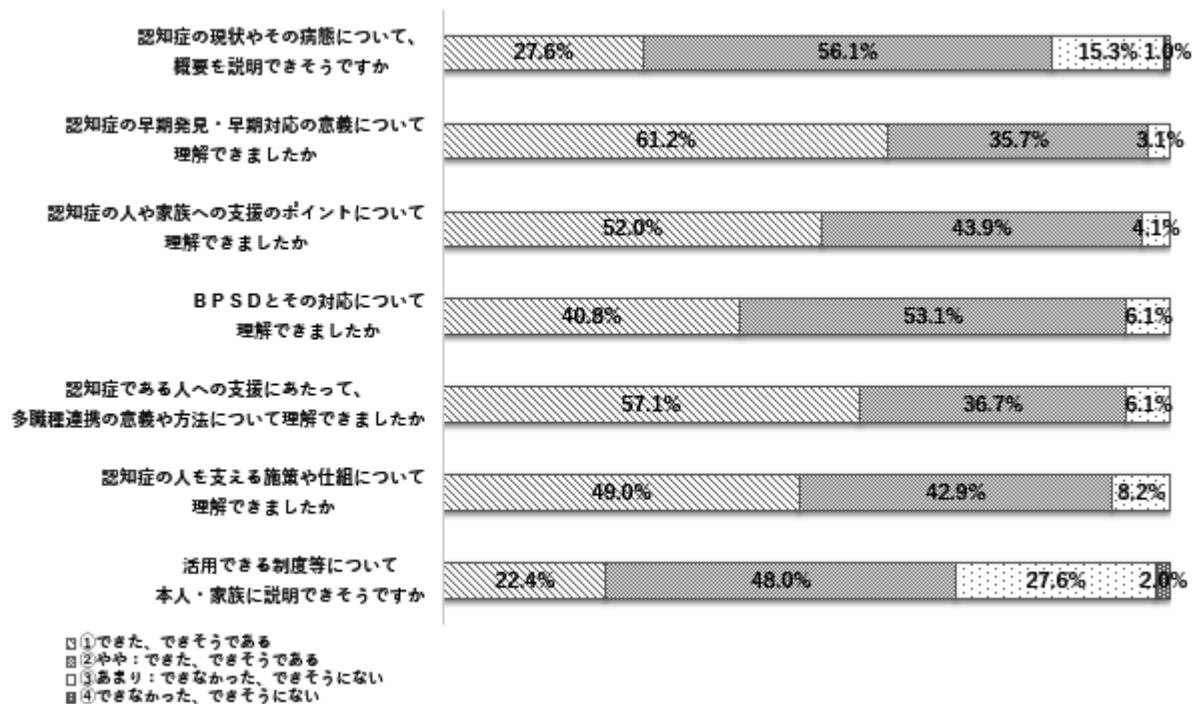


図4 到達目標における到達度

## 2) 研修満足度

研修満足度を図5に示す。「大変満足」・「満足」を合わせて91.8%と高かった。その理由は「座学およびグループワークにより、認知症を有する対象者への対応について理解が深まった」、「認知症について具体的な対応方法を学べたため、今後の介入に自信が持てる」、「他職種の方と話す機会があり、同じ事例でも注目する点などの違いが分かり、学びになった」等であった。「やや不満」は9.2%であり、その理由は「もっと詳しく知りたかった」、「講義のペースが早すぎた」、「GWの時間が少なかった」等であった。



図5 研修満足度

## 3) 研修運営について

研修運営へのアンケート結果より、「開催曜日」では、「日曜日を希望」が40.8%と多く、次いで「平日を希望」が27.6%であった。「平日を希望」の理由をみると、「仕事の一環なので出来れば平日」、「平日は休み取りやすい」等であった。週末の開催では参加しにくい層があることが伺えた。一方「開催時間」は「午前のみを希望」が64.3%、「その他」19.4%であった。「その他」の回答理由には「(研修の)内容が濃くて盛沢山なため、1日研修がいい」、「十分な時間で講義して欲しい」等の意見があった。

## 〔評価〕

数値目標である「昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する」は達成できなかったが、「県内全域から参加者を得る」は達成できた。また、科目における満足度は高く、科目に対する感想からも、本研修の「地域貢献のポイント」である「認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となること」に向けて効果的な研修を実施できたと評価する。さらに受講者の抱える課題「地域連携」、「スタッフの認知症理解への働きかけ」について、本事業の担う役割は大きい。また「地域住民の認知症理解への働きかけ」については、特に住民の認知症に対する恐れを払拭し、早期診断・治療の必要性の啓蒙が挙がっていたため、公開講座等を活用し、啓蒙していく必要性が伺えた。

今年度は標準的なカリキュラムに基づき時間設定し、研修は週末開催の半日（午前中）としたが、週末開催では参加しにくい層が伺えたことや、時間を多くとることを希望する意見もみられたため、研修プログラムと開催日程を検討し、調整することが今後の課題である。

## Ⅲ. 今後の課題

- ・研修プログラムと開催日程の検討



【講義の様子】



【事例検討の様子 11.5】



【事例検討の様子 2.3】



## 看護職員認知症対応力向上研修事業

### I. 活動計画

[数値目標]

- ・昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する
- ・県内全域から参加者を得る

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・令和4年度に改訂された標準的なカリキュラムに基づきプログラムを変更する。
- ・新型コロナウイルスの感染症法上の分類が「5類」に引き下げられたため、定員を見直し、50名から100名に増やす。
- ・アドバイザーとして本学「老年看護学」の教員を加え、体制構築・人材育成の演習にファシリテーターを4名配置する。
- ・事業評価アンケートは全てオンライン上での回答および集計が可能な Microsoft Forms を使用する。

実施計画

- ・厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施要領」の標準的なカリキュラムに基づき研修をプログラムする。
- ・研修案内は、6月に県内病院（93）へ送付するとともに、本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・9月10～12日に実施する。

### II. 活動の結果と評価

[結果]

#### 1. 研修の実際

研修プログラム（表2）のとおり、実施した。申込者は68名（29施設）、受講者は63名（28施設）で、県内全域（北部13施設33名、伊賀2施設6名、中部8施設14名、伊勢志摩3施設7名、紀勢・東紀州2施設3名）より参加した。コロナ禍以前の定員100名時の受講者22～43名、およびコロナ禍定員50名時の受講者（令和3年度55名、令和4年度54名）に比し多くの参加が得られた。研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。



【講義の様子】



【GWの様子】

表2 令和5年度 研修プログラム

科目	日程	時間	講師
認知症に関する知識 (講義 180分)	9/10 (日)	9:30~10:15 (講義 45分)	小松 美砂 (椋山女学園大学 看護学部 老年看護学 教授)
		10:25~12:40 (講義 135分)	山川 伸隆 (いせ山川クリニック 院長)
		13:40~16:10 (講義 150分)	荒木 学 (三重県立看護大学 精神看護学 助教 精神看護専門看護師)
認知症看護の 実践対応力 (講義 330分 ・演習 120分)	9/11 (月)	10:00~12:00 (講義 120分)	藪下 茂樹 (鈴鹿中央総合病院 社会福祉士)
		13:00~14:30 (講義 30分 ・演習 60分)	横山 智子 (桑名市総合医療センター 認知症看護認定看護師)
		14:40~16:10 (講義 30分 ・演習 60分)	荒木 学 (三重県立看護大学 精神看護学 助教 精神看護専門看護師)
体制構築 ・人材育成 (講義 90分 ・演習 300分)	9/12 (火)	9:30~12:30	奥野 歩 (済生会松阪総合病院 認知症看護認定看護師)
		13:30~17:00	中東 瞳 (済生会松阪総合病院 認知症看護認定看護師) ファシリテーター：認知症看護認定看護師 4名 ・川北 典子 (医療法人 永井病院) ・谷口 陽子 (医療法人 暁純会 武内病院) ・福田 敬乃 (名張市立病院) ・田米 美里 (三重県済生会 明和病院)

2. 受講者アンケート結果

1) 受講者の属性 (回収率 100%)

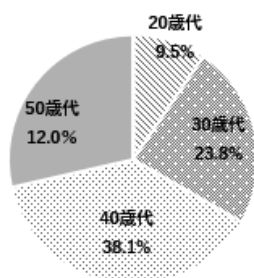


図6 受講者年代

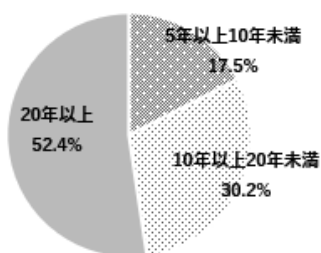


図7 受講者経験年数

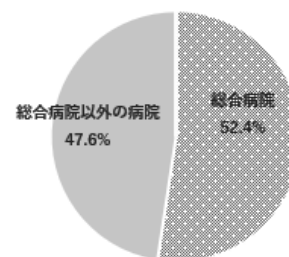


図8 受講者所属病院

受講者は40歳代が38.1%と最も多く、経験年数も20年以上が半数を超えていた。所属は総合病院が52.4%と最も多かった。

## 2) 科目の到達目標

(回収率：認知症に関する知識 90.6%、認知症看護の実践対応力 100%、体制構築・人材育成 79.4%)

科目の到達目標の到達度を図9に示す。

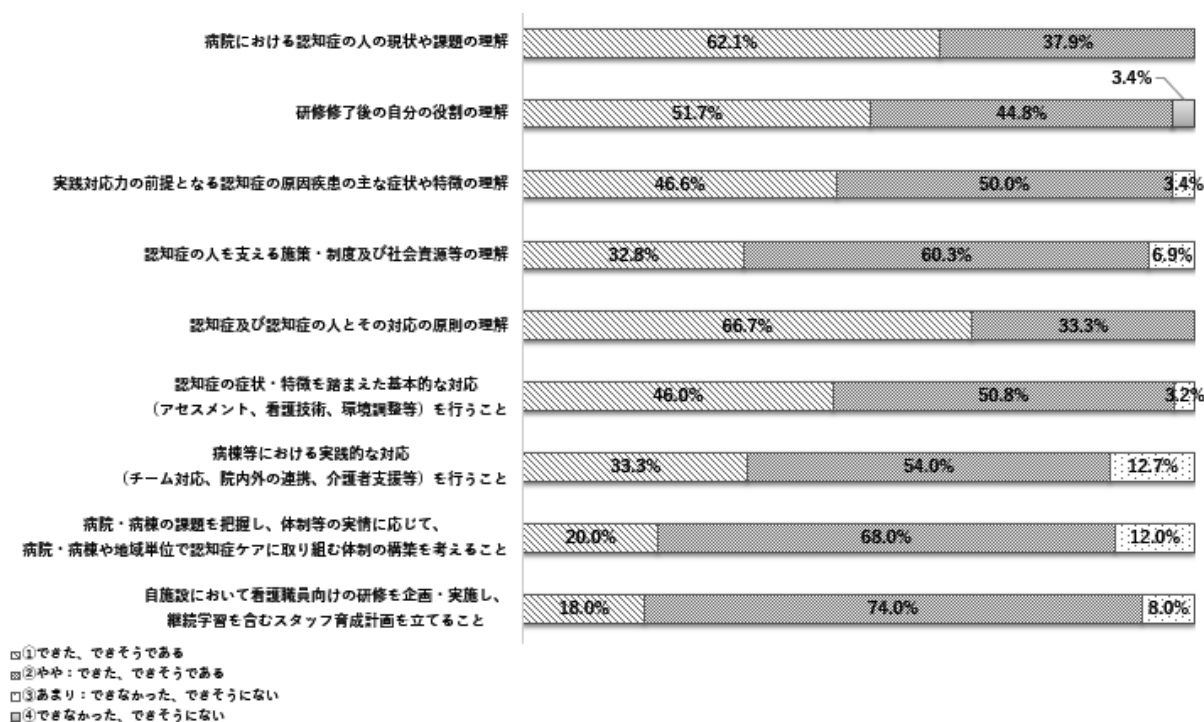


図9 到達目標における到達度

「できた、できそうである」・「やや：できた、できそうである」の割合が高く、合わせて87.3～100%であった。その理由は、科目「認知症に関する知識」では「症例や各特徴を捉えやすく理解しやすかった」、「現在の状況や看護の振り返りを考えること」ができ、役割の再確認をすることができた、科目「認知症看護の実践対応力」では「具体例がわかりやすかった」、「臨床の場で実践・応用し、活かそう」、「他職種との連携の大切さを理解できた」、科目「体制構築・人材育成」では、「グループワークで考えた内容が、自施設でも実施できる内容だった」、「研修の学びをもとにやってみる」等であった。一方、科目「認知症に関する知識」で「到達目標：研修終了後の自分の役割の理解」について、「理解できなかった」と回答した者(3.4%)は、その理由の記載はなかった。

## 3) 科目の満足度

科目の満足度を図5に示す。「大変満足」・「満足」を合わせて86～100%と高く、

その理由は科目「認知症に関する知識」では、「教科書で学べないことをたくさん講義で聞くことができ、職場での自分の対応やスタッフの対応を見直す必要があると感じた」、科目「認知症看護の実践対応力」では「臨床で活かせる具体的な内容を知ることができた」、科目「体制構築・人材育成」では、「研修の進め方が理解できた」、「ファシリテーターのアドバイスが良かった」であった。「やや不満足」の理由は、科目「認知症に関する知識」では「少しスピードが早かった」、科目「体制構築・人材育成」では「時間が足りなかった」、「ワークシート作成が難しかった」等であった。

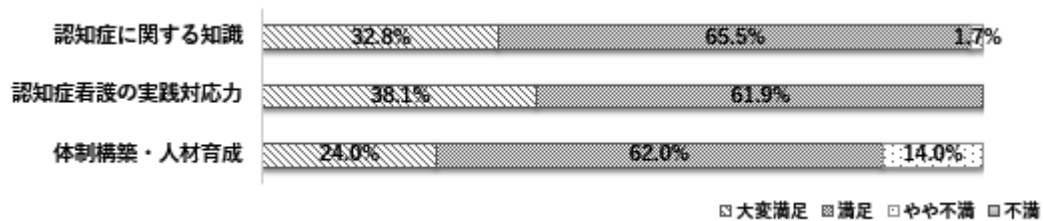


図 1 0 科目における満足度

#### 4) 研修全般について

「研修全体の日程」では、「このままでよい」が 78.0%、「開催曜日」では、「このまま（日曜～火曜）でよい」が 44.0%、「平日のみを希望」する者が 52.4%あった。「開催曜日」では、講師の本業との兼ね合いで、科目「認知症の知識」の日曜日開催はいたしかたない。一方「研修会全体の運営」は「よい」・「まあよい」を合わせて 100%で、その理由は「研修を受けやすかった」等であった。科目に対する感想では、「認知症の再確認になり、知識を深める機会となった」、「色々な方の意見や考え、実施している内容を知れた。現場でも広めて行きたい」、「自施設の課題が明確になり、それに対しての研修内容が立案できた」等であった。

#### [評価]

例年より多くの受講者を得られ、数値目標である「昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する」、「県内全域から参加者を得る」は達成できた。また、科目における満足度は高く、科目に対する感想からも、本研修の目的である「医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築」に向けて効果的な研修を実施できたと評価する。

今年度は新カリキュラム初年度のため、標準的なカリキュラムに基づき時間設定し、科目「体制構築・人材育成」の演習にファシリテーターを 4 名配置したが、次年度に向け、到達目標における到達度や、講師及び受講生の意向を踏まえたプログラムを検討する必要がある。

### Ⅲ. 今後の課題

- ・研修プログラムの検討

## 4. 母子保健体制構築アドバイザー事業

担当者：地域交流センター 林辰弥、川瀬浩子  
スーパーバイザー 清水真由美、中北裕子

### 【事業要旨】

三重県では母子保健体制構築アドバイザーが、各市町の母子保健における現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理したうえで、助言・指導や情報提供を行うことで、地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、大学の教員がアドバイザーになることで、市町では地域の課題に対して学術的な視点から学びを得ること、さらに地域ネットワークの構築につながることを期待されており、下記の事業を実施するものである。

各市町における地域課題の分析及び事業評価、支援体制の整備、支援ネットワークの強化等、対象市町に応じた内容について、以下（１）～（３）により、アドバイザーが必要な助言・指導等を行う。

#### 1. 個別支援型アドバイザー派遣

事業概要：市町からの申請に基づき、市町に必要な助言・指導等を行う。

方 法：三重県の担当課（子育て支援課母子保健班）が7月に市町へ事業紹介を行う。その後市町からの申請を受け、個別支援型アドバイザーに依頼する。  
個別支援型アドバイザー：中北 裕子

（三重県立看護大学 公衆衛生看護学 准教授）

#### 2. 広域支援型アドバイザー派遣

事業概要：随時アウトリーチ（約2年間をかけて三重県内全市町を訪問）を行い、市町の現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理し、助言・指導等を行う。

広域支援型アドバイザー：谷出 早由美

（鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科  
公衆衛生看護学 准教授）

#### 3. ミニ講座及び情報交換会

事業概要：これまでに見出された課題やニーズに沿ったミニ講座や情報交換会を行う。

対 象：市町や保健所等で母子保健業務、子育て支援に携わる職員など

方 法：Zoomによるオンライン開催

### 【地域貢献のポイント】

- ・母子保健対策に携わる担当者の質の向上に貢献する。
- ・地域の実情に応じた母子保健体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実・強化に貢献する。

### 【昨年度からの課題】

- ・市町の抱える問題の可視化



## I. 活動計画

### 例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・学術的な視点を強化するため、広域支援型アドバイザー派遣では、アドバイザーを鈴鹿医療大学の公衆衛生看護学教員とし、ミニ講座及び情報交換会での研修の企画・運営を本学公衆衛生看護学教員が担当する。
- ・市町の抱える問題の可視化のため、保健所担当者・県担当者とともに訪問し、母子保健対策の詳細を聞き取るとともに、課題や今後の予定についての情報を共有する。
- ・ミニ講座及び情報交換会では、参加しやすいよう曜日や時間を意図的に変えて予定を組み、チラシを作成する。
- ・事業評価アンケートは全てオンライン上での回答および集計が可能な Microsoft Forms を使用する。

### 実施計画

- ・4～5月に、三重県子ども福祉部および鈴鹿医療大学と本学の公衆衛生看護学教員と打ち合わせを行う。
- ・三重県子どもの育ち支援課より母子保健担当者にMLを活用し、周知する。
- ・三重県における母子保健体制構築アドバイザー事業実施要領に基づき事業を実施する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 個別支援型アドバイザー派遣

#### 1. 事業の実際

策練野に引き続き、A市より専門職研修への依頼があり本学教員が打合せを含め2回訪問した。参加人数は、延べ14名であった。「防災-母子に特化した災害対策-」をテーマに、現状を分析し、課題や今後の取り組みを整理した。

#### 2. 事業参加者アンケート結果

アンケート結果（回収率75%）では、支援に対して「大変満足」・「満足」を合わせて100%、その理由は「防災備蓄に何が必要かを考え、今後の見直しの余地があることに気づけた」、「最新の知識を得たことが大変刺激になった」、「日々の活動について、アドバイスをもらえることで振り返りと再構築が行えている」等であった。



【個別支援型アドバイザー派遣の様子】

### 広域支援型アドバイザー派遣

#### 1. 事業の実際

昨年度訪問した市町以外の16市町を対象とした。参加人数は市町担当者延べ43名、保健所担当者延べ18名、県担当者延べ11名であった。調査用紙より、訪問対象市町の母子保健対策の現状や課題について事前把握し、可能な限り保健所担当者・県担当者とともに

に訪問し、母子保健対策の詳細を聞き取るとともに、課題や今後の予定について情報を共有した。調査内容は、産婦健診の現状・子育て世代包括支援センターの現状・子ども家庭センターの準備状況・支援の途切れの状況・発達障害児の支援体制・その他母子保健体制構築に向けて、とした。訪問より抽出した地域の課題は、以下の2点である。

①母子保健体制構築に向けての学習課題

増加している外国人妊婦や死産時への支援、対応困難事例への支援方法、研修や事例検討などを行いながらリスクアセスメントシートを使用する方法など。

③大学が担う役割

保健師の各段階に応じた研修や新任期保健師の効果的な育成や、要保護児童対策地域協議会の運営方法についてのアドバイス

2. 事業参加者アンケート結果（回収率 76.7%）

参加者の職種は全て保健師で、年代（図1）は40歳代が最も多く、母子保健業務や子育て支援に携わっている経験年数（図2）は様々であった。支援に対して（図3）、「大変満足」、「満足」で93.9%、その理由は「現状や課題を率直に話すことができ、良い機会になった」、「他市町の情報なども知ることができた」、「県や保健所との連携の大切さを改めて感じた」等であった。

大学の専門領域の1人の教員が、アドバイザーとして広域に訪問することで、同じ視点で実情を把握し、学術的な視点でまとめることができた。また、保健所や県の担当者とともに訪問することで、多角的な情報共有につなげることができた。

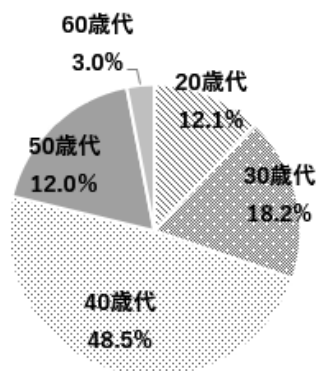


図1 参加者年代

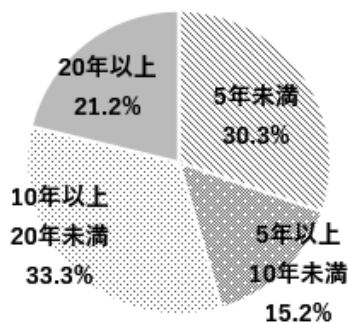


図2 母子保健業務や子育て支援に携わっている経験年数



図3 支援満足度

ミニ講座及び情報交換会

1. 事業の実際

ミニ講座のプログラムを表1に示す。

表 1 ミニ講座のプログラム

回	日程	時間	テーマ	講師
1	9月26日(火)	10時30分～11時30分	妊娠SOSみえの相談現場から ～特定妊婦の 地域連携による支援 2023～	NPO法人 MCサポートセンター みくみえ 代表 松岡 典子
2	10月25日(水)	13時30分～14時30分	発達障害を持つ 子どもの育ちと将来の展望	三重県立看護大学 精神看護学 准教授 長南 幸恵
3	11月27日(月)	10時30分～11時30分	小児難病児と家族のQOLの向上	東京保健医療大学 立川看護学部 看護学科 教授 久保 恭子

2. 事業参加者アンケート結果（回収率 第1回 62.8% 第2回 74.1% 第3回 85.7%）

参加人数は延べ 91 名、30.3 名/回（R4 延べ 59 名、14.8 名/回）と昨年度を大幅に上回った。3 回とも参加がなかったのは、県内 29 の市町中 13 市町、9 の保健所中 2 保健所であった。

ミニ講座の理解度（図 4）では「理解できた」の占める割合が高かった。その理由は「事例があり、理解しやすかった」、「実践に基づいた内容だった」等であった。ミニ講座の満足度（図 5）では「大変満足」、「満足」で 100%、その理由は「自分の関わり方を見直す機会となった」、「業務内で困っていたことを教えていただいた」等であった。一方、情報交換会の満足度（図 6）では、第 1～2 回は「やや不満」と回答した者がみられ、その理由は「あまり時間がなかったのが残念」等であった。第 3 回ではミニ講座を 45 分とし、情報交換会の時間に配慮した結果、「やや不満」と回答する者がなくなった、さらに、次年度の企画にあたり、事業時間への要望は「じっくり講義を聴きたい」、「情報交換の時間がもう少し欲しい」を理由に「1.5 時間」を希望する者は 2 割程度であったため、ミニ講座の後の情報交換会は、時間配分を考慮したプログラムの検討が必要と考える。また、次年度以降に取り上げてほしいテーマは「医療的ケア児への支援」、「メンタルに疾患を持つ家族への支援」、「災害対策」、「健診や訪問など日常業務に役立てられるテーマ」、「ペアレントトレーニング」等であった。大学の専門領域の教員が、アドバイザーとして企画・運営に携わったことで、的確なテーマや講師の選択ができ、情報交換会でのファシリテーターの役割を担えた。

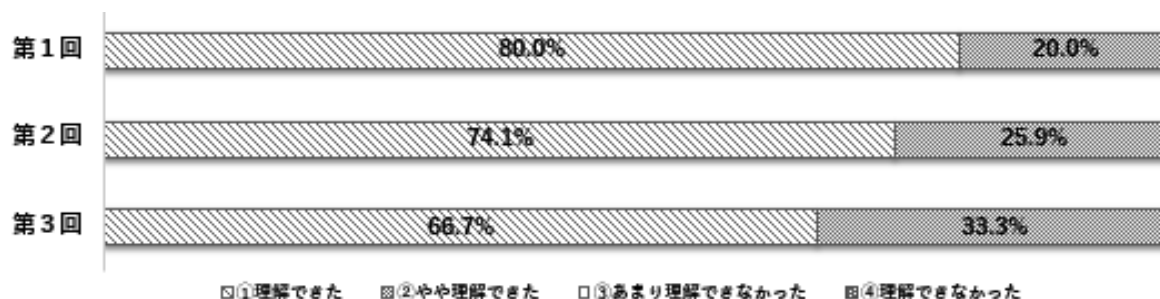


図 4 ミニ講座の理解度

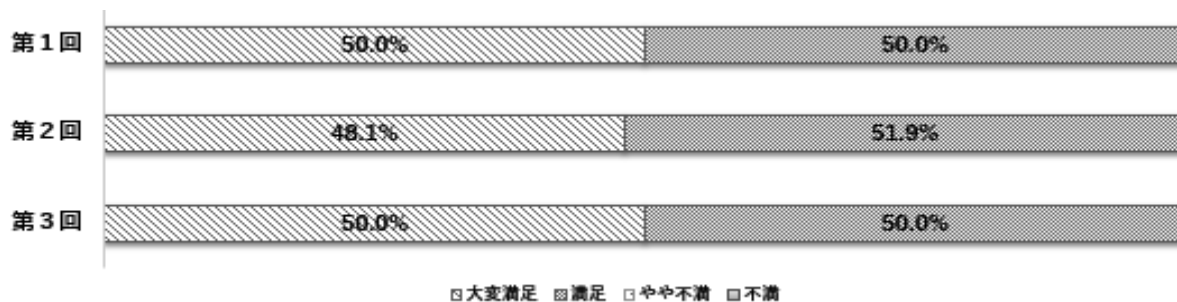


図5 ミニ講座の満足度

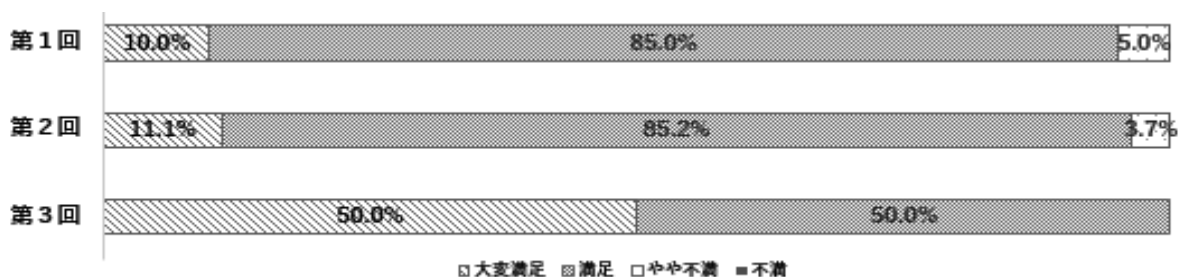


図6 情報交換会の満足度

[評価]

昨年度の課題であった「市町の抱える問題の可視化」では、「個別支援型アドバイザー派遣」及び「広域型アドバイザー派遣」にて、支援できた。また、事業に関する評価は高く、事業の目的である「地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実を図ること」に向けて効果的な事業を実施できたと評価する。さらに、県より期待されている「大学の教員がアドバイザーになることで、市町では地域の課題に対して学術的な視点から学びを得ること、さらに地域ネットワークの構築につながることに」についても効果的な事業を実施できたと評価する。しかし、市町の課題に直接関われる個別支援型アドバイザー派遣の活用が少ないのは残念であるため、より一層の広報が必要である。またミニ講座では、アドバイザーの訪問より抽出した地域の課題やミニ講座の受講者から得た希望テーマを考慮し、参加しやすい日程調整、および「情報交換会」について時間配分を考慮したプログラムを検討したい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・ 個別支援の広報
- ・ 受講者から得た希望テーマや訪問より抽出した地域の課題、参加しやすい日程調整、および「情報交換会」について時間配分を考慮したプログラムの立案

## IV. リカレント教育

1. 認定看護師教育課程（B 課程）  
「感染管理」
2. 認定看護師（感染管理認定看護師）  
フォローアップ研修



# 1. 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」

担当者：地域交流センター 林辰弥、大川明子、川島好子、新居晶恵、辻真弥

## 【事業要旨】

本教育課程は、看護の質向上及び看護職者のキャリア支援に向けた教育を行うことを目的に、感染管理領域において高度で専門的かつ質の高い看護を提供できる人材を育成する。

## 【地域貢献のポイント】

感染管理に関する高度で専門性のある知識、看護技術、特定行為を習得し、水準の高い看護実践を多職種と連携し、協働して提供できる人材を育成することにより、地域社会の多様な保健・医療・福祉施設における感染管理の質的向上に貢献する。

## 【昨年度からの課題】

研修生にとって充実した学習環境を確保し、教育体制や実習環境を整備し、研修生の実践力が向上できる指導・支援体制を整える。修了生を支援するためにフォローアップ研修の内容を検討する。

## I. 活動の実際

1. 教育期間：5月10日～2月14日
2. 授業時間：90分を1時間とし、原則5時限
3. 授業形態：共通科目・専門科目の特定行為研修  
区別科目は、e-ラーニングでの学習形態を活用



表1. 授業科目

共通科目	時間数	専門科目（認定看護分野）	時間数
1. 臨床病態生理学	40 (30)	1. 感染管理学	15
2. 臨床推論	45 (34)	2. 疫学・統計学	30
3. 臨床推論：医療面接	15 (12)	3. 微生物学	30
4. フィジカルアセスメント：基礎	30 (23)	4. 医療関連感染サーベイランス	45
5. フィジカルアセスメント：応用	30 (23)	5. 感染防止技術	30
6. 臨床薬理学：薬物動態	15 (12)	6. 職業感染管理	15
7. 臨床薬理学：薬理作用	15 (12)	7. 感染管理指導と相談	15
8. 臨床薬理学：薬物治療・管理	30 (23)	8. 洗浄・消毒・滅菌とファシリティ・マネジメント	15
9. 疾病・臨床病態概論	40 (30)	(小計)	195
10. 疾病・臨床病態概論：状況別	15 (12)		
11. 医療安全学：医療倫理	15 (12)	<b>専門科目</b>	<b>時間数</b>
12. 医療安全学：医療安全管理	15 (12)	(特定行為研修区別科目)	
13. チーム医療論（特定行為実践）	15 (12)	1. 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連	22 (17)
14. 特定行為実践	15 (12)	2. 感染に係る薬剤投与関連	39 (30)
(小計)	335 (259)	(小計)	61 (47)
		<b>演習及び臨地実習</b>	<b>時間数</b>
15. 指導	15	統合演習	15
16. 相談	15	臨地実習（認定看護分野）	150
17. 看護管理	15	臨地実習（特定行為区分）	30
(小計)	380	(小計)	195
		合計	831時間

#### 4. 研修生の概要

##### 1) 令和4年度 研修生 16名修了

令和5年度認定審査 15名合格（合格率93.8%）三重県内 11名

##### 2) 令和5年度 応募者 36名、受験者 30名、入学者 20名（男性 4名、女性 16名）

平均年齢 37.7歳、所属施設：病院（三重県内 11名、三重県外 9名）

令和6年2月14日 20名全員修了

##### 3) 令和6年度入学選抜の概要

入学選抜試験 応募者 29名、受験者 25名、合格者 20名（1名辞退）

入学予定者 19名、（三重県内 12名、県外 7名）

## II. 活動の結果と評価

認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」2期生 20名の入学式を5月10日実施した。B課程とは、日本看護協会において認定分野と特定行為研修を組み込んだ研修である。本教育課程は、特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同し、本年度から専任教員1名を加え、指導・支援体制を強化することができた。

研修生による授業評価アンケートの結果では、「授業において全体的に満足している」について「そう思う 87.9%」、「ややそう思う 9.9%」で9割以上を示したことから、満足度の高い教育課程であると考えられた。満足できない理由は、「専門的な知識・技術の授業において事例がむずかしい。事例解説に時間をかけてほしかった。」などであり、専門分野の授業時間や教育方法に不満があったと考えられた。e-ラーニングの授業について、今年度は登校日を増やし、面談や演習機会を増やしたことで、孤独感を訴える研修生は無く、研修生への支援は適切であったと考えられた。

臨地実習前に特定行為の進め方や症例記録の記載方法、認定看護分野の記録について説明を行った。しかしながら、依然として、研修生から実習記録の書き方がわからないという意見があり、次年度は、さらに具体的な事例をもとに説明し、支援していく。

臨地実習は、新たに4施設を加え県内15の実習施設の協力を得て、1施設に研修生1～3名を配置した。認定看護分野と特定行為区分の臨地実習を28日間1施設で行う教育機関は本教育課程のみであり、昨年と同様に実習施設の協力と指導者の熱心な指導により実践することができた。

## III. 今後の課題

令和6年度の研修生にとって充実した学習環境を確保し、引き続き教育体制や実習環境を整備し、研修生の実践力が向上できる指導・支援体制を整える。

今後、特定行為研修を修了した感染管理認定看護師が高い能力を発揮し活躍することができるよう支援するためにフォローアップ研修の内容を検討する。



## 2. 認定看護師フォローアップ研修

担当者：地域交流センター 林辰弥、川島好子、新居晶恵、辻真弥

### 【事業要旨】

本学認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」修了生を対象としたフォローアップ研修を開催し、最新の知見や技術の習得によって認定資格取得後の各自の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

### 【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で感染対策の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

### I. 活動計画

対象者：認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」修了者（16名）

#### 【1回目】

日時：令和5年6月10日（土）午前9時～12時

会場：三重県立看護大学 講義室4（講義棟3階）

内容：過去問題を解答することにより、修了生が認定審査に向けて準備を行う。

#### 【2回目】

日時：令和5年8月19日（土）午前9時～12時

会場：三重県立看護大学 講義室4（講義棟3階）

内容：過去問題を解答することにより、修了生が認定審査に向けて準備を行う。

#### 【3回目】

日時：令和6年1月20日（土）午前10時～15時

会場：三重県立看護大学 多目的講義室（講義棟2階）

内容：認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」は、特定行為研修を修了した認定看護師として活躍を期待されている。今回、特定行為・認定看護師として活躍されている講師の活動の実際を学び、特定行為に必要な手順書の作成を演習する。

### II. 活動の結果と評価

<結果>

#### 1.参加者の概要

1回目：14名（三重県内9名、県外5名）

2回目：7名（三重県内5名、県外2名）

3回目：24名

（1期生12名、三重県内9名、県外3名）

（2期生12名三重県内5名、県外7名）



## 2. 研修内容

1) 1回目及び2回目 過去問題の解答と解説。

2) 3回目

講義「特定行為・感染管理認定看護師としての活動」

講師：藤田医科大学 岡崎医療センター 感染対策室 看護長

特定行為・感染管理認定看護師 梶川 智弘 先生

演習 手順書を作成する（グループワーク）。

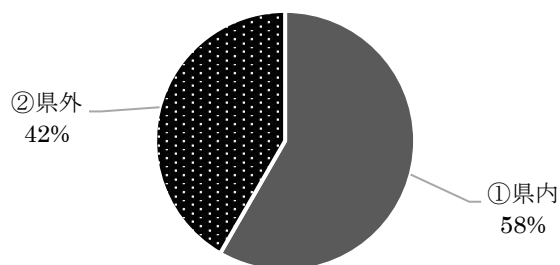
ファシリテーター：特定行為・感染管理認定看護師 梶川 智弘 先生

特定行為・感染管理認定看護師 藤永 和大 先生

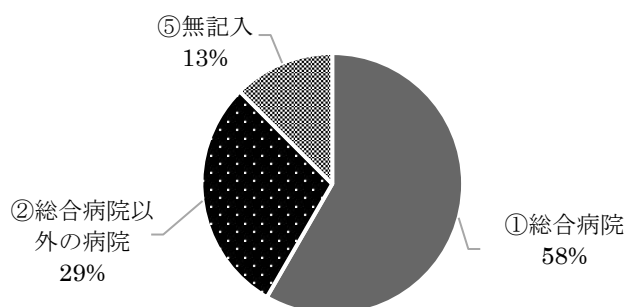
(名張市立病院)

## 3. 参加者アンケート

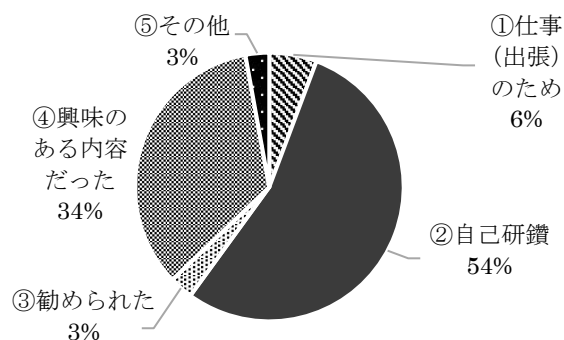
### 1) 所属の所在地



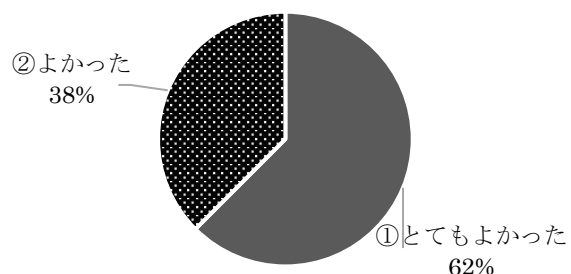
### 2) 所属施設の種類



### 3) 参加した理由



### 4) 研修の満足度



## < 評価 >

アンケート結果からも、参加者にとって本研修は満足度の高い有益な研修であったと考える。加えて、特定行為を所属施設でどう進めていくか、特定看護師としてどう活動していくか、今後の活動を考える良い機会になったという意見が多かった。

## III. 今後の課題

今回、感染管理認定看護師フォローアップ研修として、特定行為を含む認定看護師の実際の活動について学ぶ機会を提供することができた。今後も特定行為を含む認定看護師として活躍を期待されているため、引き続き本課程の修了生の支援は継続していく必要がある。

## V. 地域交流センター企画事業

### 1. 講師派遣

- 1) みかん大出前講座
- 2) みかん大リクエスト講座



# 1) みかん大出前講座

担当者：＜講師＞出前講座テーマ登録教員

＜運営＞地域交流センター 林辰弥、長谷川明子

## 【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

## 【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質向上に貢献する。

## 【昨年度からの課題】

- ・昨年度からアンケート集計の効率化のために一部で取り入れた Microsoft Forms によるアンケートを増やしつつ、アンケート回収率を維持する。

## I. 活動計画

[数値目標]

過去2年の実施件数43件(令和3年度)、49件(令和4年度)を上回る件数を実施する。

[実施計画]

1. 昨年度からの変更点
  - ・昨年度は、COVID-19の感染対策のため、出前講座の一般公開を行わなかったが、今年度より、従来通り公開の出前講座を行い、より多くの県民に参加を募る。
2. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
3. 申込受付の期限は、令和5年11月30日とする。
4. 申込があった際には、担当教員と日程調整を行い、日時を決定する。
5. 講座の開催は、令和6年3月末日までとする。
6. 出前講座のうち、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合は、本学ホームページで参加者を募り、公開講座として実施する。
7. テーマ毎の受付上限件数に達した場合は、本学ホームページに掲載し周知する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

今年度の出前講座のテーマを表1に示す。【A 健やかな暮らしのために】のテーマ数は25、【B 将来の職業選択のために】のテーマ数は5、【C 高めよう保健・看護の力】のテーマ数は6であり、合計36テーマの登録があった。一般の対象は幼児から高齢者まで幅広く、専門職では、看護職、介護職を対象とされていた。

表1 みかん大出前講座の全テーマ

分類	No.	テーマ
A 健やかな暮らしのために	A-1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ
	A-2	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感
	A-3	子どもの成長発達と毎日の生活習慣-子ども達の脳が疲れている？-
	A-4	思春期男子のこころとからだを理解しよう
	A-5	楽しく・おいしく減塩しましょう！
	A-6	子どもに関わる大人に必要な性のお話
	A-7	知っておきたい！「女性のこころとからだ」
	A-8	健康寿命をのばそう！
	A-9	救急蘇生のい・ろ・は
	A-10	薬に関する四方山話
	A-11	血栓症の発症原因とその治療薬
	A-12	出前します！「暮らしの保健室」
	A-13	体験して考える高齢社会
	A-14	健康で長寿な街づくり
	A-15	社会的活動としての話すこと・聴くこと
	A-16	「普通」ってなんだろう
	A-17	ストレスとうまく付き合おう
	A-18	認知症を知って、日々のケアに活かそう
	A-19	知って防ごう熱中症
	A-20	黙って働く腎臓、知って守って健やかに
	A-21	幼稚園・保育園のバス置き去り事故を防ごう！-ヒューマンエラーを防ぐための人間工学-
	A-22	英語の感覚を身につけよう
	A-23	音楽療法 de ヘルシー・ライフ
	A-24	ローカルな視点からエネルギーを考える
	A-25	土地の利用/保護と人間中心主義世界観の検討
B 選択のための職業	B-1	看護の仕事について
	B-2	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう
	B-3	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業
	B-4	大学で学ぶこと
	B-5	どんな仕事に興味があるかな
C 保健・高めよう 看護の力	C-1	赤ちゃん訪問で活用できる保健指導のポイント～現代の子育て、情報との付き合い方を学ぼう～
	C-2	そうだ！WOCに聞いてみよう！（褥瘡、ストーマ、フットケア等）
	C-3	性暴力被害を受けた方たちへの看護について考えよう
	C-4	ストレスを知り、看護に活かす
	C-5	医療事故はなぜ起きる？-ヒューマンエラーを防ぐための人間工学-
	C-6	職場のメンタルヘルス

申込件数は64件、実施件数は55件であった。参加者総数は、1562名であり、過去2年の総数（昨年度1351名、一昨年度904名）を上回った。この数字は、コロナ禍以前の参加者総数も大幅に上回る。また、一般公開をした出前講座は、10件であり、公開出前講座の参加者総数は237名であった。今年度は、COVID-19の影響による中止はなく、実施に至らなかった9件のうち1件はリクエスト講座への変更、3件は制限回数に達し実施不可、5件は、調整を重ねたものの担当教員の他職務等の都合により実施できなかったものである。オンライン講座の要望は、昨年度の4件から2件へ減った。

今年度の実績を表2に示す。出前講座のテーマ分類別では、【A 健やかな暮らしのために】が41件、【B 将来の職業選択のために】が3件、【C 高めよう保健・看護の力】が11件であった。特に今年度は、COVID-19が2類から5類に引き下げられ、一般県民、特に、地域の健康推進活動や社会福祉協議会等を通じた高齢者対象の講座、また、高齢者のサークル等からの依頼が増え、その内容は、心や体の健康増進に関する内容であった。

終了後のアンケートへの協力は、1078名より得られ、全参加者の80.3%より回答が得られた。講座への満足度は、「とてもよかった」が72.2%、「よかった」が25.8%であり、

参加者の 98.3%から肯定的評価が得られた。「あまりよくなかった」は 0.86%、「よくなかった」は 0.29%、無回答は、0.67%であったが、その理由の多くは未記入であり、内容の難しさや時間の延長が理由にあった。

表 2. みかん大出前講座実績

分類	テーマ	実施数	派遣先	参加者
A 健やかな暮らしのために	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	3	行政機関、教育機関	未就学児・親子、小学生、小学校教員
	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感	3	社会福祉機関	子育てボランティア、看護師、保育士、児童指導員、調理員、栄養士、心理士、事務職
	子どもの成長発達と毎日の生活習慣 -子ども達の脳が疲れている?-	3	行政機関、社会福祉機関 その他（PTA協議会）	こども園保護者、子育てボランティア 保健師・保育士 他
	思春期男子のこころとからだを理解しよう	2	教育機関	特別支援学校生徒
	楽しく・おいしく減塩しましょう！	1	ボランティア団体	高齢者、ボランティアスタッフ
	子どもに関わる大人に必要な性のお話	2	教育機関	小学生保護者、学校教職員
	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	1	教育機関	特別支援学校生徒
	健康寿命をのほそう！	4	その他	高齢者、協会会員、法人会員 他
	救急蘇生のい・ろ・は	2	教育機関、社会福祉機関	中学生、中学校教員、中学生保護者、介護士、生活相談員
	薬に関する四方山話	4	行政機関、社会福祉機関 ボランティア団体	高齢者、健康推進員、保健師 他
	出前します！「暮らしの保健室」	4	教育機関、社会福祉機関 その他（自治会）	高齢者 他
	健康で長寿な街づくり	1	その他（地域サークル）	高齢者
	社会的活動としての話すこと・聴くこと	1	社会福祉機関	介護支援サポーター、社会福祉協議会職員 他
	「普通」ってなんだろう	1	ボランティア団体	ボランティア会員、協会会員 他
	ストレスとうまく付き合おう	2	社会福祉機関、行政機関	管理栄養士・栄養士
	認知症を知って、日々のケアに活かそう	2	行政機関、その他	介護支援者、協会会員 他
	知って防ごう熱中症	1	行政機関	ケアマネージャー、包括支援センター職員 他
黙って働く腎臓、知って守って健やかに	1	その他（老人クラブ）	高齢者	
音楽療法 de ヘルシー・ライフ	3	教育機関、ボランティア団体	高齢者、ボランティア団体会員 他	
B 拆のためには	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知らう	3	教育機関	高校生
C 高めよう 看護の 力 保健・	そうだ！WOCに聞いてみよう！ （褥瘡、ストーマ、フットケア等）	3	医療機関	看護師、介護士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士
	ストレスを知り、看護に活かす	1	専門職団体	保健師
	医療事故はなぜ起きる？ -ヒューマンエラーを防ぐための人間工学-	2	医療機関、社会福祉機関	看護師、介護士、調理員、事務職 他
	職場のメンタルヘルス	5	医療機関、社会福祉機関	看護師、支援員、ケアマネージャー ヘルパー、介護士、事務員、職員施設管理者 他

[評価]

実施件数は過去 2 年間の実施件数を上回り、数値目標を達成した。参加者総数についても、過去最大数であった。さらに、公開の出前講座は 10 件に上り、本学教員の出前講座を広く地域住民へ公開することができた。

また、アンケート結果より講座への満足度は高く、本学教員の専門性を活かし、県民のニーズに沿った講座を展開することにより、県内の保健・医療・介護に関わる専門職だけでなく、高齢者や学生をはじめとする地域住民の健康への知識の獲得や意識の向上へ幅広く貢献できたと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

担当教員の受入れ可能件数に達し実施できなかったテーマや要望の多い内容については、そのテーマ・内容に関する講座の充実を図ることにより、県民の多様なニーズに応じた出前講座を展開する。

## 2) みかん大リクエスト講座

担当者：＜講師＞全教員

＜運営＞地域交流センター 林辰弥、長谷川明子

### 【事業要旨】

みかん大出前講座のテーマに該当しない講師派遣について、県民から要望のあったテーマ・内容に応じて講師を派遣し、有料で出張講座を行う。

### 【地域貢献のポイント】

- ・みかん大出前講座に該当しないテーマに対し、「みかん大リクエスト講座」により依頼に応じることで、県民の多様な要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

### 【昨年度からの課題】

- ・昨年度からアンケート集計の効率化のために一部で取り入れた Microsoft Forms によるアンケートを増やしつつ、アンケート回収率を維持する。

## I. 活動計画

[数値目標]

昨年度の実施件数(40件)を上回る件数を実施する。

[実施計画]

1. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
2. 申込受付の期限は、令和5年11月30日とする。
3. 申し込みのあったテーマや内容に合わせて、教員を選出し、依頼元と教員双方の条件が合致した際には、日程・テーマを決定し講師を派遣する。講座までの準備期間には、依頼元と教員間で講座の内容等について直接調整をすすめる。
4. 講座の開催は、令和6年3月末日までとする。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

申込件数は56件、実施件数は54件、今年度は、COVID-19の影響による中止はなく、実施に至らなかった2件は、提供できる内容と依頼内容が合致せず、依頼側と相談・調整を重ねたうえで実施を見送ったものである。参加者総数は、1303名であり、昨年度参加者総数の1179名を上回った。

派遣先は医療機関が最も多く43件(令和4年度19件)であり、テーマ・内容は、看護記録や看護倫理を含む看護実践に関するものが14件、看護研究に関するもの16件、看護教育に関するもの6件、看護管理に関するもの2件であった。医療機関では、全2～5回のシリーズで開催する施設が複数あった。特に、看護研究に関する講座では、研究に取り組む看護職またはそのグループへの継続的な支援を行った。医療機関に次ぐ派遣先は、行政機



関、教育機関が各 4 件、社会福祉機関は 3 件であった。対象は、一般県民から、子どもの居場所づくり関係者等の子どもの福祉に携わる方、学校の教員・養護教員、介護支援専門員など多岐にわたった。

なお、COVID-19 の感染防止対策として行ってきたオンラインによる講座は、今年度は 1 件にとどまった。今年度の派遣先分類別の実績を表 1 に示す。

終了後のアンケート回収率は 89.3% で、各講座の評価は、「とてもよかった」、「よかった」の肯定的評価が 99.7% と高かった。

### [評価]

実施件数 54 件は、昨年度のより 14 件増加し、数値目標を達成した。さらに、参加者総数 1303 名は、昨年度参加者総数を上回り、実施件数ともにコロナ前の数値を上回り過去最高の数値となった。この結果は、今年度、COVID-19 が 2 類から 5 類に引き下げられ、講座 1 回あたりの参加人数が増加したこと、また、医療機関からの依頼が昨年度に比べ 24 件増加したことによるものであると考えられる。

医療機関での講座は全実施の 7 割を超えており、そのテーマ・内容から、実践・教育・研究のあらゆる側面から看護職者のニーズに合わせた講座を開催し、県内の看護の質向上に寄与することができたのではないかと考える。その他の講座においても、県民一般から専門職まで、幅広い対象へ講座を提供できたと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

出前講座のテーマに該当しない要望への講師派遣として事業を展開し、4 年前には、より親しみやすい講座であることを目指し「みかん大リクエスト講座」と名称を変えた。以降、コロナ禍にも依頼は続き、年々増加していることから、県民に広く浸透しつつあると考える。次年度も講座を広く周知し、依頼側の多様なニーズに応じた講座を展開する。

表 1. みかん大リクエスト講座実績

派遣先分類	テーマ
医療機関	フィジカルアセスメント 入門編 呼吸
	フィジカルアセスメント 入門編 循環
	フィジカルアセスメントの基本 呼吸
	フィジカルアセスメントの基本 循環
	現場に活かすフィジカルアセスメント 応用編
	形態機能学を活かした看護実践 (ラダーⅡ)
	形態機能学を活かした看護実践 (ラダーⅢ)
	認知症ケア
	拘縮の予防とケアについて
	高齢者虐待について
	関連図を書いてみよう
	看護診断を学ぼう
	ケースレポートをまとめよう
	倫理 (同内容 4 回)
	看護研究 ラダーⅢ (全 2 回)
	看護研究 ラダーⅣ (全 4 回)
	日常の看護ケアの疑問から看護研究を考える (同内容 2 回)
	看護研究研修コンサルテーション
	看護研究～現場の疑問を研究へつなげよう～ (量的な研究の視点で)
	看護研究～現場の疑問を研究へつなげよう～ (質的な研究の視点で)
	看護研究～研究デザインの選択Ⅰ～ (量的研究)
	看護研究～研究デザインの選択Ⅰ～ (質的研究)
	看護研究～研究デザインの選択Ⅱ～ (量的研究)
	看護研究～研究デザインの選択Ⅱ～ (質的研究)
	看護研究～研究計画書の発表～ 講師Ⅰ
	看護研究～研究計画書の発表～ 講師Ⅱ
	コーチングの基本
	コーチング (ラダーⅢ研修)
役割モデルとしての効果的な指導方法	
ファシリテーション研修	
キャリアラダー評価について	
マネジメントラダーについて	
組織管理 (全 2 回)	
社会福祉	個性豊かな子どもへの関わり方
	食物アレルギーの知識について
	認知症について ～認知症かるとコグニサイズをとりいれて～
行政機関	子どもの家庭福祉
	子どもを理解するための基礎知識
	End of Life ケアと対応
教育機関	健康的な食生活を送るために
	思春期のこころから
	養護教諭に伝えたい 最新の性教育について
	学校におけるアレルギー対応
	食物アレルギーの基礎知識 (同内容 2 回)



## 2. 看護研究支援

- 1) 看護研究 SEED
- 2) 看護研究エッセンス
- 3) ハウツー看護研究
- 4) その他の看護研究支援



# 1) 看護研究SEED（オンライン研修）

担当者：＜講師＞片田範子、玉田章、安部彰、関根由紀、大西範和、上田貴子、灘波浩子  
＜運営＞地域交流センター、長谷川智之、川瀬浩子

## 【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を培うことを目的に、看護研究の基礎知識に関する研修をシリーズで実施する。集合研修と、地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者のためにオンライン研修とを毎年交互に行っている。本年はオンライン研修の年である。

## 【地域貢献のポイント】

県内の看護職者が、看護研究の基礎知識に関する研修を受講することにより、研究的思考や研究遂行能力の礎を築く。また日常の看護業務の中から研究テーマを見出すことによって、看護研究へ取組む意欲を高め、研究を実践し、結果、看護の質の向上につながる。

## 【前回オンライン研修からの課題】

- ・ 利便性の高い Microsoft Teams を利用したオンライン研修を継続する。
- ・ 双方向性のある方法を模索していく。

## I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 令和3年度のオンライン研修の受講者数（個人受講3名、施設受講4施設、平均25.2名/回）程度の受講者を獲得する。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 科目「研究計画の立て方と書き方」を「テーマの決め方と計画の立て方」に名称変更する。
- ・ オンライン研修を Microsoft Teams から利用者の多い ZOOM ミーティングを用いた研修に変更する。
- ・ 双方向性のある講義方法を実現するために、施設側の進行係を決める。

実施計画

- ・ 令和5年4月に研修計画を立て、研修は2週間程度の間隔を開け月2回程度となるように調整し、プログラムを作成する。
- ・ 受講案内は、県内各医療・行政機関等（151施設）へ送付するとともに、本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・ 6月1日から7月31日まで、オンラン研修を実施する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 研修の実際

研修プログラム（表1）のとおり9科目を5日間で実施した。

受講申込みは、個人受講で4名（内単回受講コース2名）、施設受講で5施設であり、

受講者の所属施設は県外1か所及び県内北部～伊勢志摩地域であった。各回の受講者数は20～26名で、延べ212名（平均23.6名/回）であった。

表1 令和5年度 研修プログラムと受講者数

開催日	科目	担当者	受講者数
6月1日(木)	看護研究の意義と文献の活用	学長 片田	24
	研究テーマの決め方と計画の立て方	玉田 章	24
6月15日(木)	看護研究における倫理的配慮	安部 彰	24
	研究デザインのタイプと選択	上田 貴子	24
6月26日(月)	質的研究(インタビュー)	関根 由紀	26
	量的研究(アンケート)	関根 由紀	25
7月13日(木)	研究論文作成	玉田 章	22
	量的研究(実験・計測)	大西 範和	23
7月31日(月)	プレゼンテーション(演習含む)	灘波 浩子	20



学長 片田



玉田 章



安部 彰



上田 貴子



関根 由紀



大西 範和



灘波 浩子



## 2. 受講者アンケート結果

### 1) 受講者の属性 (最終日: 回収率 78.1%)

受講者の年代(図1)は、20歳代が最も多く次いで40歳代、30歳代であった。経験年数(図2)は、5年未満と10年以上20年未満が最も多く、次いで5年以10年未満であった。職位(図3)は、スタッフが最も多かった。

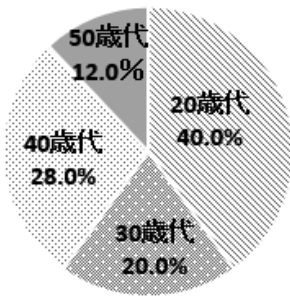


図1 受講者の年代

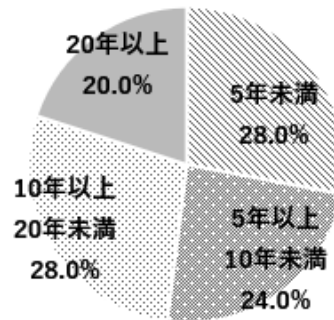


図2 受講者の経験年数

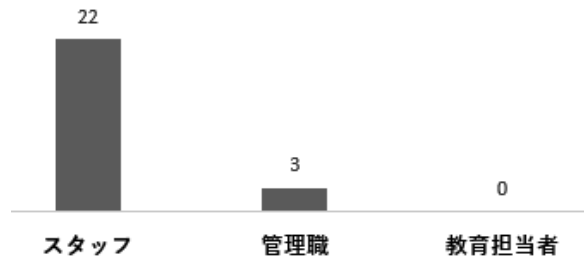


図3 受講者の職位（複数回答）

2) 講義内容について（各回：回収率 83.3～95.8%）

各講義内容の理解度を図4に示す。「理解できた」、「やや理解できた」を合わせて、「看護研究の意義と文献の活用」82.6%、「看護研究における倫理的配慮」95.5%、「量的研究（実験・計測）」70.0%、その他の科目では100%、平均94.2%であった。これらは、前回オンライン研修（R3：72.0～100%、平均89.8%）より良い結果であった。また「理解できなかった」を選択した者は全科目でみられなかった。「理解できた」、「やや理解できた」を選択した理由は、「例を交えながらの講義だったのでわかりやすかった」、「講義内容・資料ともわかりやすかった」などであった。一方「あまり理解できなかった」を選択した理由では「内容が難しかった」、「後半の流れについていけなかった」などであった。

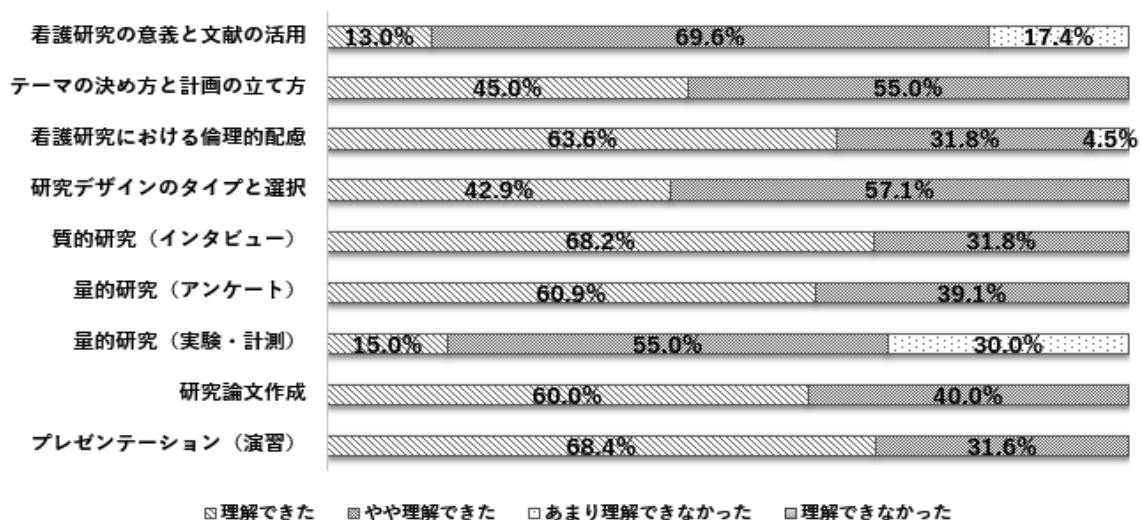


図4 講義内容の理解度

各講義の満足度を図5に示す。「大変満足」、「満足」を選択した者は「量的研究（実験・計測）」80.0%、その他の科目では100%、平均97.8%と満足度は高かった。これらも、前回オンライン研修（R3：平均94.1%）より良い結果であった。「大変満足」、「満足」を選択した理由は、「漠然とした、研究に対するイメージが、輪郭を持ったような気がしており、満足した」、「実際に研究に活かすことができると思った」などであった。「やや不満」を選択した理由では「あまり理解ができなかった」、「講義内容に関して時間が短いように感じた」であった。

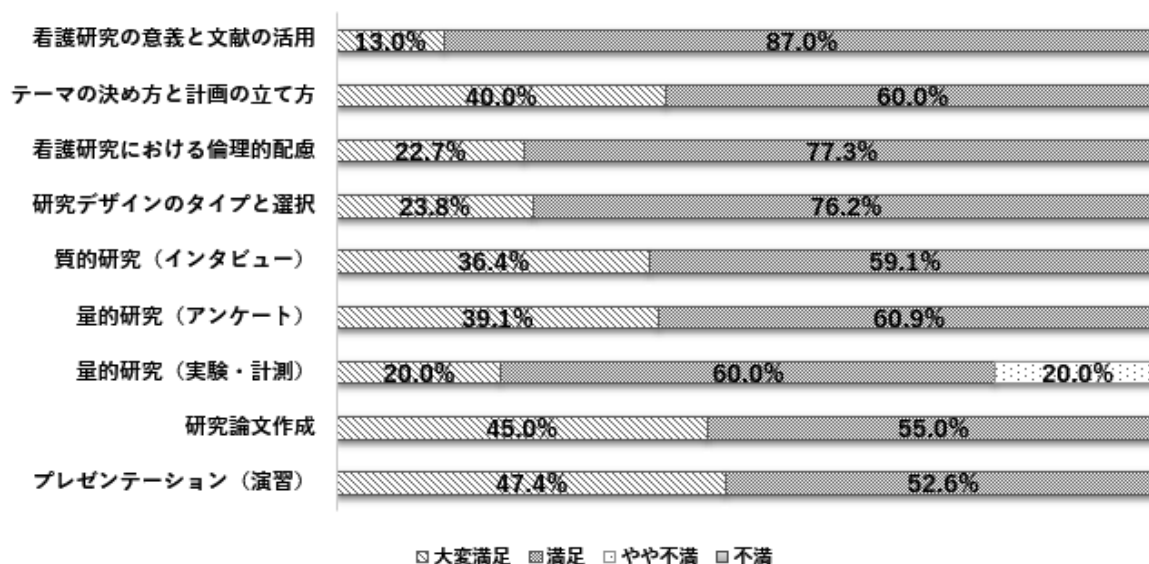


図5 講義内容の満足度

### 3) 本事業全般について（最終日：回収率78.1%）

研修全体に対する満足度（図6）は、「大変満足」、「満足」を選択した者は100%であった。これらも、前回オンライン研修（R3：平均95.7%）より良い結果であった。研修テーマ（科目）については、「短時間でわかりやすかった」などの意見があった。研修回数については、「必要な内容である」、「的確だった」などの意見に加え、「必要に応じて学べるのはよかった。」と学びたい科目を選んで受講できる方法が好評であった。その他のアンケート結果、「時間帯」では「このままでよい」が84.0%、「方法」では「隔年オンライン研修を続けてほしい」が92.0%、「この研修で学んだことは今後の役に立ちますか」については「とてもそう思う」、「そう思う」が100%であった。

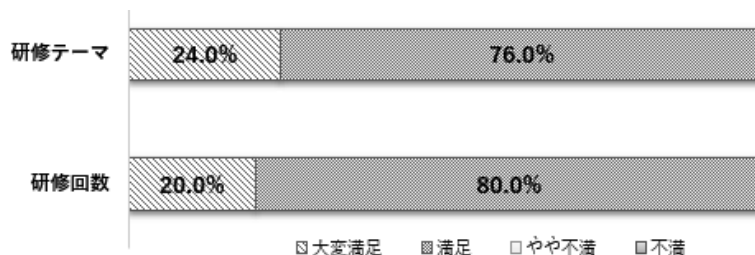


図6 研修全体の満足度



また、研究意欲への設問「この研修を受講して看護研究を開始または継続しようと思いましたが」については、肯定的な回答が 72.0%得られ、「看護研究のイメージが良かったから」、「とにかくやってみる」などの意見があった。

#### [評価]

数値目標の「令和3年度のオンライン研修の受講者数（R3：平均 25.2 名/回）程度の受講者を獲得する」については、前回より施設受講は1か所増えたが、受講者数は平均 23.6 名/回であり、若干少なかった。一方、県内北勢～伊勢志摩地区と広域にわたる受講者で、集合研修時は参加の得られにくい伊勢志摩地区からも参加が得られ、地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者のためのオンライン研修の意義はあったと評価する。

前回オンライン研修からの課題であった、「利便性の高い Microsoft Teams を利用したオンライン研修を継続する。」は、利用者の多い ZOOM ミーティングを用いた方法に変更し、より利便性が高まった。また「双方向性のある方法を模索していく」については、施設側の進行係を決め対応することにより、双方向性のある講義方法を実現でき、前回オンライン研修の際に聞かれた「実際の会話がしにくく、残念である」などの意見はみられなかった。

講義内容に関して、理解度及び満足度のいずれも高い評価であり、かつ前回オンライン研修より良い結果であったため、事業目的である研究の基礎知識を系統的に学ぶことにより、受講者の研究基礎能力を培うことができたと考える。また、研究への意欲についても、ほぼ前向きな回答であり受講者の意欲を高めるきっかけとなったことが伺えた。一方、講義内容の理解度について、「内容が難しかった」、「後半の流れについていけなかった」等、講義内容の満足度について、「あまり理解ができなかった」、「講義内容に関して時間が短いように感じた」等の意見もあるため、講義の理解度への反応も含め、科目の講義時間や講義内容の難易度の検討が必要である。

研修全般に関しても満足度は高く、研修テーマ（科目）・研修回数・時間帯・方法に関しても好評であったため、現行の方法を継続していく。ただし、講師とも相談し、時間が不足気味であった「看護研究における倫理的配慮」の科目では、講義時間を 30 分増やす、オンライン研修での ppt 演習は困難であった「プレゼンテーション」の科目では、次回オンライン研修の際、講義のみにすることとしたい。

### Ⅲ. 今後の課題

#### 【次年度に向けて】

- ・「看護研究における倫理的配慮」の科目の講義時間を 30 分増やす。
- ・科目の講義時間や講義内容の難易度の検討

#### 【次回オンライン研修に向けて】

- ・「プレゼンテーション」の科目は講義のみにする。

## 2) 看護研究エッセンス

担当者： <講師> 斎藤真、ドライデンいづみ  
<運営> 地域交流センター、長谷川智之、川瀬浩子

### 【事業要旨】

看護研究に取り組む看護職が、さらなるスキルアップのために、必要な知識や手法を習得し、より質の高い研究ができるよう支援する。

### 【地域貢献のポイント】

看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

### 【昨年度からの課題】

- ・ コースの名称や内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できるように、写真やイラストを追加した研修案内を作成する。
- ・ 施設単位看護研究支援の担当教員に、研修案内の配布および募集を依頼する。
- ・ 看護協会の研修時に、研修案内の配布および募集を行う。
- ・ 自身の研究について相談できる企画コースの増加を検討する。

## I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 10名程度の受講者が得られる

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 研修時の写真や昨年度の受講者の感想を掲載し、研修内容をわかりやすくした研修案内を作成する。
- ・ 研修ごとに受講者自身の研究についての相談時間を設ける。

実施計画

- ・ 令和5年4月に研修計画を立て、本学ホームページに募集記事を掲載する。
- ・ 令和5年5月に、研修案内を、県内各医療・行政機関等（150施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・ 看護研究SEEDやハウツー看護研究を実施する際、受講者へ広報を行う。
- ・ 施設単位看護研究支援の際や看護協会の研修時に研修案内を配布する。
- ・ 8月から11月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 研修の実際

例年開催の「統計解析（基本編）」に加え、「統計解析（応用編）」・「英語論文：APAスタイルでの参考文献引用及び参考文献の書き方」が登録された。研修プログラム（表1）の

とおり実施した。受講者数は、統計解析（基本編）1名、英語論文2名の合計3名（令和4年度4名）であった。うち、施設単位看護研究支援先からの受講者は1名であった。

表1 令和5年度 研修プログラム

コース	統計解析 (基本編)	統計解析 (応用編)	英語論文：APAスタイルでの 参考文献引用 及び参考文献の書き方
本コースの 対象	・統計手法をブラッシュアップしたい方 ・表計算ソフト（エクセル）を使ったことがある方	・統計解析（基本編）を修了された方	・英語論文執筆に興味がある方 ・APAスタイルで英語論文を執筆したい方
日時	9月2日（土） 10：40～16：10	1月27日（土） 10：40～16：10	11月11日（土） 10：40～16：10
担当者	斎藤 真	斎藤 真	ドライデンいづみ
概要	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。 アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。 基本編を修了された方を対象にパラメトリック検定、ノンパラメトリック検定について学びます。	初学者を対象に、便利な英語表現やつなぎの言葉を実際に使用しながら英文のニュアンスを理解し、英語論文執筆につなげるための講座です。 また、英語論文でよく用いるAPAスタイルでの参考文献引用の仕方と参考文献の記載方法を学びます。
担当者からの コメント	統計学について基本から学びたい方におすすめです。エクセルによるアンケート調査の解析と統計処理の基本について学びます。	統計解析の基本編を修了された方を対象に応用編となる統計解析手法を学びます。また、結果と考察の書き方についても学ぶ予定です。	英語論文は形式が整っていたり、内容の「道しるべ」となる転換語や一般化・程度表現を使用するだけでも読み手に内容が伝わりやすくなります。 英文作成練習を繰り返して使い慣れしましょう！
受講者数	1	0	2

## 2. 受講者アンケート結果（回収率 100%）

### 1) 受講者の属性

受講者は30～40歳代であった。経験年数は10年以上から20年以上、職位は管理職、教育担当者、スタッフと様々であった。

### 2) 講義内容について

講義の理解度は、「理解できた」が100%であり、その理由は「説明が端的で分かりやすかった」、「APAスタイルについて理解ができた」、「論文に使えるセンテンスが分かった」などであった。

講義の満足度は、「大変満足」、「満足」で100%であり、その理由は「わかりやすく、楽しく授業を受けられた」、「配布資料がいただけたので今後に生かすことができる」などであった。さらに「研修で学んだことは、あなたの今後に役立ちますか」では、「とても役に立つ」、「役に立つ」で100%であり、その理由は、「英論文を読む・書くに対しての障壁が少し下がった」などであった。

### 3) 本事業全般について

講義の回数については「満足」が100%であり、その理由は、「ちょうどよい時間配分であった」などであった。また、開催時間帯では、「少し遅めの開始のため、余裕を

もって挑めた」ため「このままでよい」の意見の者と、「早く終わったほうが帰路が混雑しない」ため「午前2コマ・午後1コマ」を希望する者があった。運営については、「よい」、「まあよい」で100%であった。研修ごとに受講者自身の研究についての相談時間を設けた結果、好評であった。

#### [評価]

今年度は例年のコースに加え、新たに2コース追加され、好評であった。また各コースの満足度は高く、その理由からも、受講者に対し、さらなるスキルアップのために、必要な知識や手法を習得し、より質の高い研究ができるよう支援ができたと評価する。一方、数値目標の「10名程度の受講者が得られる」については、達成に至らなかった。研修の質に対する評価が参加に繋がっていないため、HP等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内を作成し、広報に勤める必要がある。さらに今後は開催時間帯への要望より、現在10:40開始であるが、次年度は開始時間を検討し、終了時間を早められないかなど、プログラムを調整したい。

### Ⅲ. 今後の課題

- ・HP等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内の作成
- ・プログラムの調整



研修の様子

### 3) ハウツー看護研究

担当者：＜講師＞浦野茂、関根由紀、斎藤真、菅原啓太、長谷川智之  
＜運営＞地域交流センター、長谷川智之、川瀬浩子

#### 【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を演習により体験し、研究の実践に活かせるよう支援する。

#### 【地域貢献のポイント】

看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

#### 【昨年度からの課題】

- ・各コースの研修案内をそれぞれ作成し、コースの名称や内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できるよう、写真やイラストを追加した研修案内を作成する。
- ・施設単位看護研究支援の担当教員に、各コースの研修案内の配布および募集を依頼する。
- ・看護協会の研修時に、各コースの研修案内の配布および募集を行う。
- ・受講者が参加しやすい受講曜日や時間帯などを検討する。

#### I. 活動計画

[数値目標]

- ・10名程度の受講者が得られる

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・研修時の写真や昨年度の受講者の感想を掲載し、研修内容をわかりやすくした研修案内を作成する。
- ・研修ごとに受講者自身の研究についての相談時間を設ける。

実施計画

- ・令和5年4月に研修計画を立て、本学ホームページにて募集記事を掲載する。
- ・令和5年5月に、研修案内を、県内各医療・行政機関等（150施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・看護研究 SEED や看護研究エッセンスを実施する際、受講者へ広報を行う。
- ・施設単位看護研究支援の際や看護協会の研修時に研修案内を配布する。
- ・8月から2月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。

#### II. 活動の結果と評価

[結果]

##### 1. 研修の実際

例年開催の「質的研究コース（インタビュー）」・「量的研究コース（アンケート）」・「量的研究コース（実験・計測）」に加え、「統計学コース（SPSS 講座）」が登録され

た。研修プログラム（表1）のとおり4コースとも3回（計7コマ）を計画した。量的研究コース（実験・計測）は申込者がなく中止となった。

質的研究コース（インタビュー）は3施設より3名が参加し、研修が好評で、量的研究コース（アンケート）も続けて受講した。量的研究コース（アンケート）はさらに他施設より1名申込みがあり、4施設より4名の参加、統計学コース（SPSS）は1名の参加、計8名であった。

表1 令和5年度 研修プログラムと受講者数

コース	日時	担当者	テーマ	受講者数
質的研究コース （インタビュー）	①8月18日（金） 13：00～16：10	浦野 茂 関根由紀	インタビューによる 質的研究を行ってみる	3
	②9月1日（金） 13：00～16：10			
	③9月15日（金） 10：40～16：10			
量的研究コース （アンケート）	①10月7日（土） 9：00～12：10	斎藤 真 菅原啓太	「質問紙の作成と調査の実施」 ～職務満足度について考えをさぐる～	4
	②10月7日（土） 13：00～16：10			
	③10月28日（土） 9：00～14：30			
量的研究コース （実験・計測）	①9月13日（土） 9：00～12：10	斎藤 真 長谷川智之	「有効な血管拡張方法の検討 ～ポケットエコーを活用して（仮）」 ～身近にあるモノを使用し、 明日から使える実験研究！～	0
	②9月13日（土） 13：00～16：10			
	③9月16日（土） 9：00～14：30			
統計学コース （SPSS講座）	①2月10日（土） 9：00～12：10	斎藤 真	初めて使うSPSS ～SPSS Tips 2023～	1
	②2月10日（土） 13：00～16：10			
	③2月17日（土） 9：00～14：30			



質的研究コース（インタビュー）



量的研究コース（アンケート）



統計学コース

## 2. 受講者アンケート結果（最終回：回収率 100%）

### 1) 受講者の属性

受講者は 30～50 歳代、経験年数は 5 年以上から 20 年以上、職位は管理職やスタッフと様々であった。

### 2) 講義内容について

各講義の理解度（図 1）は、「理解できた」、「やや理解できた」が 100%であり、その理由は、「質的研究コース（インタビュー）」は「やるべき方向性とやり方のとっかかりを掴んだ」、「量的研究コース（アンケート）」では「例題を元にしたたり、現在進行中や過去の実際の研究テーマを取り入れて行ったから」、「統計学コース（SPSS 講座）」では、「SPSS 以前に、統計の手法での知識不足があったため」などであった。

各講義の満足度（図 2）は、「大変満足」、「満足」で 100%であり、その理由は、「質的研究コース（インタビュー）」は「質的研究のイメージがかわった。苦手意識がなくなり、純粹にすごく楽しかった。」など、「量的研究コース（アンケート）」では「実際の看護研究の例などを掘り下げて教えてもらえた」などであった。「研修で学んだことは、あなたの今後役に立ちますか」では、「とても役に立つ」、「役に立つ」で 100%であった。その理由は、「実践レベルで役だつ研修だと痛感しているため」、「分からないことが分かったこと」、「研究が何かもわからず、ただ苦手だったが、なんのためにどういう風にやるのか、という全体像がみえた。」などであった。

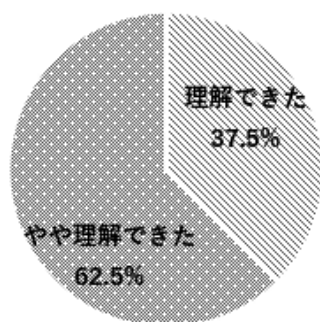


図 1 各講義の理解度

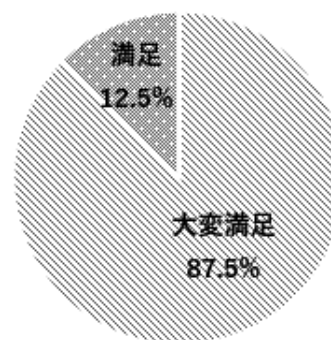


図 2 各講義の満足度

### 3) 本事業全般について

講義の回数では「大変満足」、「満足」が 100%であり、その理由は、「もう少し参加したいくらい楽しかった」、「ディスカッションや模擬事例を使用して実際に自身で行う事で、深く学習する事ができた」などであった。また、開催時間帯では、「このままでよい」が 100%であり、その理由は、「ちょうど良い時間設定だった」などであった。さらに「運営」についても、「よい」が 100%であり、その理由は「スムーズだった」などであった。本研修に対する意見等では、「久々に学ぶ楽しさを味わうことができた」、「他の人にも勧めたい」、「本当に参加して良かった」などであっ

た。さらに、今年度より研修ごとに受講者自身の研究についての相談時間を設けた結果、好評であった。一方開催してほしいテーマは「文献検討の研究」が挙げられた。

#### [評価]

今年度は例年のコースに加え、新たに1コース追加された。各コースの満足度は高く、また受講者が記載した「その理由」からも、受講者に対し、研究の実践に活かせるよう支援できたと評価する。しかし、数値目標の「10名程度の受講者が得られる」については、達成に至らなかった。研修の質に対する評価が参加に繋がっていないため、HP等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内を作成し、広報に勤める必要がある。また、土曜日開催の研修は9時開始であるが、紀勢・東紀州地区からなど遠方からの参加の場合、間に合わないため、開始時刻の検討が必要であると考えられる。さらに、量的研究コース（実験・計測）については、一昨年度・昨年度同様、申込者がなかった。臨床現場での看護研究手法として実験・計測は難しいと捉えられていることが考えられる。そのため、実験・計測は、身近な物品でも簡便に実施が可能な研究であることを広報する必要がある。今後は受講者の開催希望テーマを考慮し、研修を企画していきたい。

### Ⅲ. 今後の課題

- ・HP等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内の作成
- ・土曜日開催の開始時間の検討
- ・量的研究コース（実験・計測）の広報
- ・開催希望のテーマを考慮した研修計画



## 4) その他の看護研究支援

担当者：施設単位看護研究支援講師；大川明子、小池敦、前田貴彦、長谷川智之、  
関根由紀、上田貴子、川島珠実

看護研究発表会支援講師；大川明子

地域交流センター；長谷川智之、川瀬浩子

### 【事業要旨】

県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とする。看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループ又は個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行う「施設単位看護研究支援」と、看護研究発表会における講評・審査を行う「看護研究発表会支援」を実施する。

### 【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質の向上につながる。本事業により、地域の人々によりよい看護実践を還元することに繋がる。

### 【昨年度からの課題】

- ・ 必要時、事業参加者に研究の基礎知識や看護研究実践能力を養うために、看護研究 SEED やハウツー看護研究および看護研究エッセンスを紹介する。
- ・ 募集案内に、ロールモデルとして施設単位看護研究支援から看護研究発表会支援への繋がりを紹介する。

## I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 施設単位看護研究支援は過去 3 年間の平均利用件数 9 件を維持する。
- ・ 看護研究発表会支援は過去 3 年間の平均利用件数 1 件を維持する。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 看護研究発表会支援の募集案内をチラシに変更し、「利用者の声」などを掲載する。  
（施設単位看護研究支援は令和 6 年度募集から変更）
- ・ HP に開催レポートを掲載し、実施状況を広報する。

### 1. 施設単位看護研究支援

- ・ 令和 5 年 1 月に募集案内を県内医療機関等（158 施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切 2 月末日）
- ・ 令和 5 年 3 月～4 月に申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。
- ・ 令和 5 年 4 月に支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。
- ・ 令和 6 年 3 月迄、担当教員が研究指導を行う。

施設で看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し、本学の教員が出

張して指導を行う。施設からの申込みは1施設6研究以内とする。

支援の基本単位は、3時間×4回の指導とする。

## 2. 看護研究発表会支援

- 令和5年1月に募集案内を県内医療機関等（158施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切11月末日）
- 令和5年3月～4月に全教員から支援担当者を募集する。
- 令和6年3月迄に支援の申込みに対し、発表演題について対応可能な教員を派遣する。
- 施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

## II. 活動の結果と評価

[結果]

### 1. 支援の実際

#### 1) 令和5年度の支援状況

施設単位看護研究支援施設（表1）は7件であり、参加者76名、延べ239名（R4 75名、延べ267名）であった。看護研究発表会支援では、1施設より6題の講評の依頼があり、施設単位看護研究を担当していた教員が担当し、参加者は110名（R4 1施設60名）であった。

表1 令和5年度 施設単位看護研究支援施設一覧

No.	施設名	担当教員
1	藤田医科大学 七栗記念病院	長谷川 智之
2	武内病院	大川 明子
3	三重県立志摩病院	玉田 章
4	三重県立総合医療センター	関根 由紀
5	四日市羽津医療センター	小池 敦
6	松阪中央総合病院	前田 貴彦
7	鈴鹿病院	川島 珠実

表2 令和5年度 看護研究発表会支援施設

施設名	担当教員
武内病院	大川 明子

### 2. 受講者アンケート結果

#### 1) 施設単位看護研究支援

アンケート配布数は69名、回収数は48件（回収率69.6%）であった。支援（図1）に関して、「大変満足」、「満足」が95.9%（令和4年度97.5%）であり、その理由は「自分の研究の内容や意向など受け止めた上で、方向性など、わかりやすく導いてくれた」、「自分とは違った視点でアドバイスをもらい、大変わかりやすく、研究で途方に暮れることが少なくなった」、「(参加者に) 真摯に向き合い、丁寧な指導や支援で、発表に繋がっている」などであった。一方「やや不満」、「不満」が4.2%で、その理由は「前回のアドバイスで聞き取りにしたのに、アンケートと言われた」、「もう少し詳しく教えて欲しい」など、少数の意見ではあるが説明が届いていない状況が伺えたため、今後の支援を考慮したい。

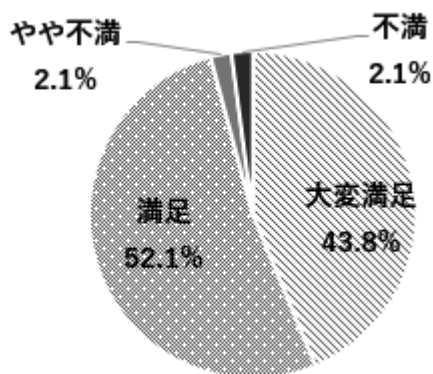


図1 施設単位看護研究支援の満足度

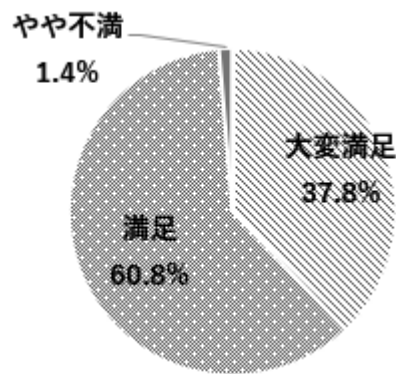


図2 看護研究発表会支援の満足度

## 2) 看護研究発表会支援

アンケート回収数は74件（回収率67.3%）であった。参加者の年代は20～60歳代、職位も管理職からスタッフと様々であった。支援（図2）に関して、「大変満足」、「満足」が98.6%（令和4年度94.6%）であり、その理由は「無事今日を迎えられた事感謝している。指導の際は研究者の思いを引き出して頂き丁寧に伝えて頂きわかりやすかった」、「実践にいかせる研究発表だった」などであった。「やや不満」は1.4%、その理由の記載はなかった。

### [評価]

「施設単位看護研究支援」・「看護研究発表会支援」とも満足度は高く、また参加者が記載した「その理由」からも、本事業の目的である「看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培う」ことに繋がったと評価する。特に「看護研究発表会支援」では、昨年同様「施設単位看護研究」を担当していた教員が講評したことが満足度の高さに繋がったことが伺えたため、引き続き来年度も、ロールモデルとして紹介していきたい。

数値目標では「施設単位看護研究支援」の「過去3年間の平均件数9件を維持する」は、達成に至らなかった。一方、地域交流センター企画の「リクエスト講座」では、看護研究支援に関する講座が令和4年度4件（2施設）から、今年度は17件（3施設）と大幅に増加していた。このことより、事業の募集にあたり、研究課題が少ない場合や、より専門分野に特化した研究支援を希望の場合など、「施設単位看護研究支援」の事業と支援内容が合致しない施設へは、「みかん大リクエスト講座」の利用を勧めていることが影響していると思われる。今後も、受講施設のニーズに合わせた支援方法の紹介と、リクエスト講座の動向も合わせ、地域交流センター事業として研究支援の目的が達成しているかを評価していきたい。

## Ⅲ. 今後の課題

- ・受講施設のニーズに合わせた支援方法の紹介
- ・リクエスト講座の動向も合わせた事業の評価



### 3. 公開講座



## 3. 公開講座

担当：林辰弥、長谷川明子、地域交流センター委員

### 【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的を実施する。

### 【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源を活かした生涯学習等を行う。

### 【昨年度からの課題】

- ・ 新型コロナウイルスに関する情報を注視し、それに応じた感染防止対策を講じつつ、来場人数を増やすことにより多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。

## I. 活動計画

### [数値目標]

- ・ 参加者数の目標値  
1回の開催につき、一般県民の参加者 100人以上。

### [実施計画]

- ・ 昨年度からの変更点
  1. 来場者定員を 100名から 300名へ変更する
- ・ 実施計画
  1. 来場(一般県民)とオンライン(学内関係者)の併設により、より多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。
  2. 案内パンフレットを作成し、県内各所に送付するとともに本学ホームページに掲載して周知啓発を行う。
  3. 定員 300名に満たない場合は、当日参加も受け付ける。
  4. 第2回公開講座は、本学同窓会と共催し、卒業生・修了生のオンライン参加の機会を設ける。今年度は、卒業生・修了生の来場も可能にする。

## II. 活動の結果と評価

### [結果]

1. 開催回数  
令和5年度は3回の公開講座を開催した。(実施の詳細は後半に記載)
2. 参加者数  
一般県民の参加者は、第1回 133名、第2回 214名(卒業生・修了生 48名を含む)、第3回 81名、平均 143名であった。
3. 参加者の背景  
参加した一般県民の年齢は、70歳代が最も多く、34.7%、次いで60歳代は19.9%、次いで50歳代15.8%、80歳代12.6%であり、60歳以上の参加者が6割を超えた。一般県民の参加者のうち医療・福祉・保健関係者は、25.2%であり、一般の方が7割を超

えた。公開講座を知るきっかけは、「大学からの案内」が最も多く 45.7%、次いで、「チラシ・ポスター」の 32.8%であり、チラシ・ポスターの配布・発送による案内での認知が 7 割を超えた。

#### 4. 講座の満足度

講座の内容について、「とてもよかった」が 64.6%、「よかった」が 26.5%であり、「あまりよくなかった」は、0.3%(1 名)あり、「よくなかった」は 0.0%、「無回答」が 8.8%であった。

#### 5. 今後希望する公開講座のテーマ

今後、希望するテーマは、「高齢者と健康」138 名「心の健康」131 名が非常に多く、次いで、「認知症」が 106 名、「生活習慣病」が 74 名、「在宅看護・介護」が 67 名の順であった。

#### [評価]

一般県民の参加者数について、第 3 回のみ 100 名を下回ったが、平均すると目標値を上回る参加があった。また、講座の内容については、第 1 回は新型コロナウイルス感染症が 2 類から 5 類に引き下げられたことから、新たな生活への提言として感染症関連をテーマにし、第 2 回、第 3 回は、昨年度の参加者からの要望を反映しつつ、「心の健康」、「女性の健康」にまつわるテーマとした。その結果、9 割以上の参加者から肯定的な評価が得られた。

一般県民の参加者の 6 割以上は高齢者世代であることから、会場内での安全の確保等にも配慮し、会場運営を行い、また、参加者の多様な状況に合わせ、駐車場や会場の座席の確保を行った。

県民のニーズに合わせたテーマの選定や会場運営により、多くの県民に参加いただくことができ、県民の心身の健康への意識や知識を高めることができたと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

次年度も、県民のニーズに合わせた講座を開催し、より多くの県民の参加と満足を得られるよう広報、運営を行う。

## 公開講座実施の詳細

### 1. 第 1 回公開講座

内容：人類と感染症の闘い～パンデミックの歴史～

講師：谷口 清州 氏

(独立行政法人国立病院機構三重病院 病院長)

日時：令和 5 年 7 月 1 日(土) 13 時 10 分～14 時 40 分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(学部生・大学院生・教職員)

参加人数：265 名

【内訳】来場者 165 名(一般：133 報道：3 在学生：12 教職員：17 名)

オンライン 100 名(学部生・大学院生：88 教職員：12)

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市





## 2. 第2回公開講座

内容：「こころ穏やかに生きるために」

講師：玉置 妙憂 氏

(非営利一般社団法人大慈学苑代表／僧侶・看護師)

日時：令和5年10月29日(土)3時10分～14時40分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(卒業生・修了生、在学生、教職員)

参加人数：324名

【内訳】来場者192名

(一般：166(うち当日受付12名)卒業生：6 在学生：2 教職員：18名)

オンライン132名(卒業生・修了生：42 在学生：75 教職員：15)

共催：三重県立看護大学同窓会

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



## 3. 第3回公開講座

内容：「スポーツ界におけるコーチングについて

～ジェンダーを超えて～」

講師：杉田 正明 氏

(日本体育大学体育学部体育学科 教授)

日時：令和6年2月4日(日)13時10分～14時40分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(在学生・教職員)

参加人数：156名

【内訳】来場者98名

(一般：81(うち7名当日受付) 在学生：1 教職員：16)

オンライン58名(在学生：55 教職員：3)

共催：三重県スポーツ協会 女性スポーツ指導者の会

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市





## VI. 連携

1. 連携協力協定
2. 県内病院等看護管理者意見交換会
3. 人事交流教員支援



## 1. 連携協力協定（医療機関・市町）

担当者：林辰弥、川島好子

### 1) 連携協力協定（医療機関）

目的：本学と医療機関が相互に連携・協力関係を構築することで、臨床現場における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

藤田医科大学七栗記念病院と今年度から新たに連携協力に関する協定を結んだ。

特にがん看護やリハビリテーション看護など特徴のある分野について連携した取り組み、臨地実習の受け入れなど協力を得て、より一層の連携・協力を図り、看護の質向上に向けて相互に連携強化に取り組む。

表 1. 連携協力協定病院（令和 6 年 3 月 31 日現在）

	医療機関名	協定締結日
1	県立こころの医療センター	平成 25 年 2 月
2	松阪市民病院	平成 26 年 3 月
3	済生会松阪総合病院	平成 26 年 3 月
4	厚生連松阪中央総合病院	平成 26 年 5 月
5	県立総合医療センター	平成 26 年 6 月
6	伊勢赤十字病院	平成 26 年 8 月
7	国立三重病院	平成 27 年 1 月
8	県立一志病院	平成 27 年 11 月
9	厚生連鈴鹿中央総合病院	平成 29 年 4 月
10	市立伊勢総合病院	平成 30 年 3 月
11	岡波総合病院	平成 31 年 3 月
12	伊賀市立上野総合市民病院	令和 2 年 8 月
13	藤田医科大学七栗記念病院	令和 5 年 6 月

### 2) 連携協力協定（市町）

目的：本学と市町が相互に連携・協力関係を構築することで、臨地における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 2. 連携協力協定市町（令和 5 年 3 月 31 日現在）

	市町名	協定締結日
1	名張市	令和 3 年 3 月
2	津市	令和 3 年 7 月

## 2. 県内病院等看護管理者意見交換会

担当者：林辰弥、長谷川明子

### 【事業要旨】

県内病院等の看護管理者を対象に、本学の取組について、理解と協力を得て連携を深めるとともに、地域に根差した看護の教育・研究機関である本学の役割を示し、地域の医療機関のニーズ把握を図るため、本学学長との意見交換会を実施する。

### 【地域貢献のポイント】

県内の病院等看護管理者の看護管理実践に有用な情報提供、意見交換を行い、各施設における看護実践・看護教育・看護研究の質向上に寄与する。

### 【昨年度からの課題】

意見交換を円滑に行うため、意見交換のテーマを案内送付時に周知し、事前に各施設で考えをまとめたうえで参加できるようにする。

### I. 活動計画

[数値目標]

3年ぶりの対面開催となった昨年度の看護管理者の出席者数 20 名を維持する。

[実施計画]

#### 1. 昨年度からの変更点

- ・行政からの情報提供では、三重県の医療、看護職の現状をふまえたテーマ・内容となるよう県の関係者と意見交換のうえ、検討を行った。

#### 2. 対象者

県内病院等の看護管理者

#### 3. 開催日時

令和 5 年 9 月 14 日（木）13 時 30 分～16 時 00 分

#### 4. 会場

三重県立看護大学 大講義室

#### 5. 内容

##### (1) 行政からの情報提供

「三重の医療を支える看護職員のキャリアサポートについて」

三重県医療保健部 医療人材課 看護職員確保班 副参事兼班長 金谷 康子

##### (2) 学長による講話

「地元と協働できる看護大学の在り方」

学長 片田 範子

##### (3) 本学からの情報提供

「令和 7 年度入学者選抜『多言語多文化選抜』について」 入試委員長 浦野 茂

##### (4) 意見交換

- ・昨今の卒後 1～2 年目看護師の傾向とかかわり方
- ・中堅看護師のやりがいを引き出すための方策

##### (5) まとめ

## II. 活動の結果と評価

[結果]

今年度は、昨年度の出席者より要望のあった「看護の人材育成」に焦点を当てた会とした。行政、学長、本学それぞれが情報・話題を提供したうえで、意見交換の時間を40分確保し活発なディスカッションが行われた。

### 1. 出席者の概要

出席者は42名で、看護管理者23名、三重県医療保健部より2名、学内教職員17名であった。看護管理者の医療圏別内訳は、北勢6名、中勢10名、南勢4名、伊賀2名、東紀州1名であった



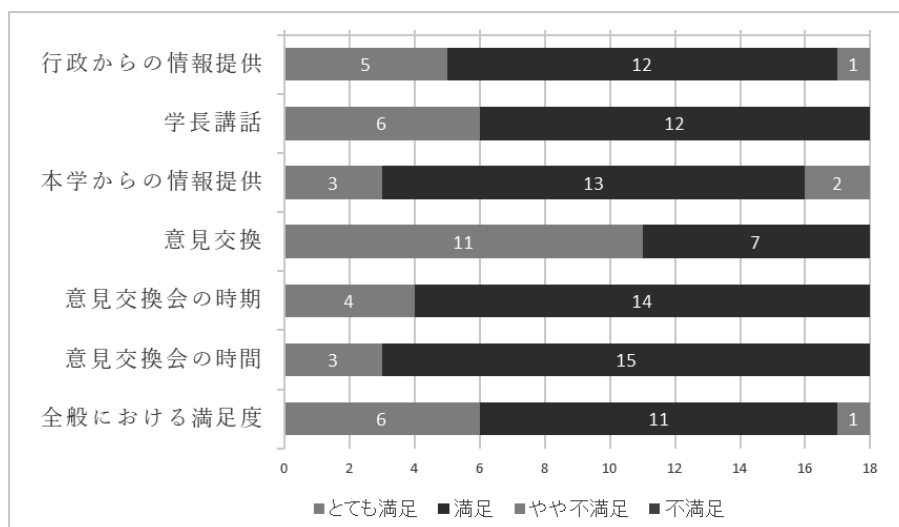
写真 学長による講話



写真 意見交換

### 2. 出席者によるアンケート結果

開催後、看護管理者へMicrosoft Formsによるアンケートを実施し、回収率は78.3%であった。アンケートは、各項目について、「とても満足」、「満足」、「やや不満」、「不満」の4段階で評価した。結果は、図1に示す。



行政からの情報提供については、「具体的データにより提示されたためわかりやすかった」、「現在の看護師の動向と当院の状況を踏まえて、今後に活かせる情報だった。」等の感想があった。また、学長による講話について、「大学の立場で地域とどのように接点をもちながら活動していくか、わかりやすかった。」、「大学の目指していることが

分かり、スタッフのキャリア支援にも参考になる。」等の感想があった。

また、昨年度に引き続き、本学より『多言語多文化選抜』について情報提供し、「取り組みの意図はわかったが、実際に導入するには、課題がありそう。」等の感想や「言葉に問題がなければ就職後も同じように進めていけるかとも思うが、国によって特徴があるため職場の理解が必要。」、「医療通訳との役割分担や、就職受入れ施設の考え方を統一することが必要」等、実際に受け入れる際の課題となる意見があった。

意見交換の満足度については、「とても満足」が昨年度の56.2%を上回り、61.1%、「満足」が38.9%であった。管理者からは、「多くの管理者の方とさまざまな課題や困りごとの情報の共有交換が行え、学びが多くあった。」、「看護管理者も承認される場として有り難かった。」等の感想があった。開催時期や所要時間に関しては、肯定的評価が100%であった。

全体を通しての感想や今後の本会への要望として、「昨今の三重県の就業者数、傾向、動向や県と大学での取り組みについて学びを深めることができ、三重県内で就業する人材の育成と体制が必要と感じた。」、「連携病院としての大学の現状を管理者間で共有出来る貴重な機会であった。」等の感想があった。

今後希望する意見交換の内容として、看護職のメンタルヘルス、離職防止やキャリア支援などに関する希望が複数あった。

#### [評価]

看護管理者の出席者数は、昨年度の数を上回り、昨年度出席のなかった伊賀と東紀州からの出席者もあった。しかし、コロナ禍以前の出席者数には満たず、コロナ禍のオンライン開催時の2年間の出席者数には満たない。コロナ禍以来、オンライン会議は利便性が高く、距離や時間的に困難がある場合も気軽に参加しやすいことから、多忙を極める看護管理者には適していると考えられる。

出席者によるアンケートの結果からは、県内の看護職の現状と課題について自施設の状況と照らし合わせつつ、見識を深めていただけたのではないかと考える。また、意見交換においては、2つのテーマをあらかじめお伝えし、時間を十分に確保したことにより、テーマに関連する各施設の現状だけでなく、さまざまな悩みや困りごとも共有することができ、満足度も高かった。これらのことから、出席者の看護管理実践に有用な情報の提供、情報交換ができたのではないかと考える。

### Ⅲ. 今後の課題

次年度も、看護管理者のニーズを反映したテーマ・内容を企画し、また、より多くの看護管理者に出席していただけるよう開催方法について十分検討する。



## 3. 人事交流教員支援

担当者：林辰弥、長谷川明子

### 【事業要旨】

本事業は、人事交流教員が1年間本学助手として教育、研究、大学経営および地域貢献を担うにあたり、新たな環境に順応し目標達成できるよう相談的役割を担う。

### 【地域貢献のポイント】

県内の病院より人事交流として派遣された看護職が、本学における教育や研究活動へのモチベーションを維持し、臨床での実践活動に反映することができる。

### I. 活動計画

<実施計画>

#### 1. 定期的なミーティング

人事交流教員の日ごろの活動を振り返り、気づきや学び、悩みごとなどを共有する。できるだけリラックスした環境で、時にはランチミーティングやティーミーティングとしてリフレッシュをはかる。2か月に1回程度とするが、状況を見て回数を増減する。

#### 2. 相談

随時メールによる相談を行う。支援側よりメールを送り、相談しやすい環境をつくる。

#### 3. その他の対応

- ・相談内容によって必要な場合は、本人の意向を尊重しながら、適所へ報告する。
- ・定期的なミーティングの実施日程については、配属先の領域長に情報提供する。

### II. 活動の結果と評価

人事交流教員の授業や実習等の業務上の都合を考慮しつつ、下記の日程でミーティングを行った。人事交流教員1名と地域交流センター配属の特任教員1名が参加し、毎回1時間程度で開催した。内容は、各時期に人事交流教員が取り組んでいる教育や研究、看護職としてのキャリア等について自由に語り合い、気づきや学び、悩み事を共有した。

- ・5月12日 「歓迎ミーティング」：臨床での経験や1年間の抱負について
- ・8月8日 「リフレッシュミーティング」：学生とのかかわり、臨床の経験などについて
- ・12月6日 「ランチミーティング」：領域別実習について
- ・1月26日 「おつかれさまミーティング」：実習を終えての感想、研究などについて
- ・3月8日 「ティーミーティング」：1年間の振り返り
- ・3月28日 「送別ミーティング」：1年間の振り返り、臨床への抱負などについて

上記日程に加え、状況に応じてミーティングを行った。

本事業により、人事交流教員が日常の職務から離れ、看護や教育、研究についてリラックスして語ることで、その時どきの悩みや不安を表出することにより、心身のリフレッシュにつながったのではないかと考える。

### III. 今後の課題

次年度も、対象となる人事交流教員の状況に合わせて回数、方法を検討し実施する。



## VII. その他

### 1. 情報発信・広報活動

### 2. 各種事業案内と申込用紙

- ・みかん大出前講座
- ・みかん大リクエスト講座
- ・看護研究SEED
- ・看護研究エッセンス
- ・ハウツー看護研究
- ・施設単位看護研究支援
- ・看護研究発表会支援
- ・三重県新人助産師合同研修
- ・助産師（中堅者・指導者）研修
- ・三重県看護職員認知症対応力向上研修
- ・三重県病院勤務以外の看護師等  
認知症対応力向上研修
- ・母子保健体制構築アドバイザー事業
- ・地域交流センター活動報告会



# 1. 情報発信・広報活動

令和5年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

## 1. 年報発行

地域交流センター年報 令和5年度 VOL.26

令和6年5月に発行予定

## 2. 報告会開催

令和5年度地域交流センター活動報告会

日時：令和6年3月18日（月）10時40分～12時00分

場所：三重県立看護大学 食堂

参加者数：55名

方法：ポスター発表による交流会形式

発表ポスター：

今年度より「事業実施から見えてきた地域の課題」の記載枠を設けた。



写真 報告会の様子

### 第一部

1. 令和5年度地域交流センター活動の総括 1・2

#### 【卒業生支援事業】

2. 卒業生のきずなプロジェクト

3. 卒業生支援プロジェクト

#### 【受託事業】

4. 三重県新人助産師合同研修事業

5. 助産師（中堅者・指導者）研修事業

6. 三重県認知症対応力向上研修事業

7. 母子保健体制構築アドバイザー事業

#### 【教員提案事業】（みえ保健・看護力向上支援事業）

8. 心電図を読もう！

9. 看工連携ものづくりシーズ発掘

10. 災害時における新任保健師の公衆衛生看護活動支援事業

### 第二部

#### 【教員提案事業】（県民のヘルスリテラシー橋上支援事業）

11. 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業

12. 手洗いチェックしてみませんか？

13. 医療的ケア児と家族のピアネット支援

14. みかん大健康バドミントン教室（中級編）

15. みかん大バリスタ for 認知症カフェ

- 16.赤ちゃんをむかえるママとパパのための「みかん大ハッピーマタニティ教室」
- 17.私たちに今できる災害の備え
- 18.子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト

【リカレント教育】

- 19.認定看護師教育課程「感染管理」

3. ホームページ（地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信）
- ・地域交流センターの活動の「みえる化」を目的に、積極的に活動記事をアップし、今年度は124件であった。（R4：65件、R3:91件、R2:91件）

4. 県内関係機関へのパンフレット配布

- ・「令和5年度 三重県立看護大学地域交流センター 講師派遣のご紹介」
- ・5月 県内医療施設、社会福祉施設、教育施設等へ1227件、2385部を配布
- ・適宜 地域交流センター事業にて配布（公開講座、イベントへの参加等）

5. イベントへの参加

1) フレンテフェスタ 2023

日時：令和5年6月4日（木）

10時00分～15時00分

内容：体組成測定・血管年齢測定等7つの測定と相談コーナー

参加人数：183名

主催・場所：三重県男女共同参画センター  
「フレンテみえ」



写真 フレンテフェスタの様子

2) みえアカデミックセミナー2023

(1) 公開セミナー

日時：令和5年7月27日(木)

13時30分～15時05分

場所：三重県文化会館レセプションルーム

テーマ：「“がん”を知ろう！

－正しく理解し、正しく対処しよう－

講師：教授 大川明子

参加人数：75名

主催：三重県生涯学習センター



写真 公開セミナーの様子

(2) 移動講座

日時：令和6年1月21日(日)13時30分～15時00分

場所：松阪公民館

テーマ：「健康寿命をのばそう！」

講師：准教授 日比野直子  
 参加人数：45名  
 主催：松阪公民館  
 共催：三重県生涯学習センター



写真 移動講座の様子

3) リカレント教育プラットフォームみえ  
 「三重のリカレント教育が目指すもの」  
 当センターのリカレント教育を紹介（展示）

日時：令和6年2月16日(金)  
 場所：鈴鹿医療科学大学  
 主催：リカレント教育プラットフォームみえ

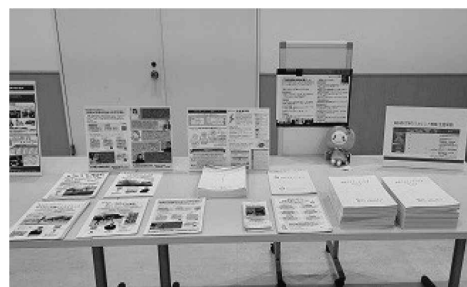


写真 展示の様子

## 6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

令和5年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオ、新聞掲載を下表に示す。

媒体		内容		掲載
TV	三重テレビ放送	News	第1回公開講座開催	7月1日
	CCNet	ウィークリーあさひ	出前講座「出前します！暮らしの保健室」開催	2月12日～18日
ラジオ	FMみえ	CampusCube キャンパスインフォメーション	第1回公開講座の開催案内	6月9日
			第2回公開講座の開催案内	10月13日
			第3回公開講座の開催案内	1月12日
			活動報告会開催案内	2月16日
新聞	三重タイムズ	開催記事	第1回公開講座	7月28日
		開催記事	教員提案事業「がん患者を有する家族：就学生の集い-I can cope with family-」	11月3日
	中日新聞	開催記事	教員提案事業「僕たち私たちでも出来る！夏の危険から身を守るための基礎講座～熱中症の基礎知識と予防方法について～」	8月4日
		募集記事	2/9出前講座「出前します！暮らしの保健室」	
情報誌	いきいき生涯&ゆうゆう学習 (三重県生涯学習センター)	募集記事	第1～3回公開講座	第39号（6月下旬）
広報紙	MCN REPORT	TOPICS 大学の出来事など	地域交流センター活動報告会	Vol.55（6月発行）
			認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」入学式	
			第1回公開講座開催案内	Vol.56（9月発行）
			第1回公開講座報告	
第2回公開講座開催案内	Vol.57（12月発行）			
「卒業生のきずなプロジェクト」第1回茶話会				
教員提案事業	Vol.58（3月発行）			
県内看護管理者意見交換会報告				
第2回公開講座報告				
第3回公開講座開催案内				
認定看護師教育課程の修了生インタビュー				
看護研究支援の取り組み				
第3回公開講座報告				

## 7. 地域交流センターリーフレット

既存のA4判チラシに加え、新たにA6 3つ折版のリーフレットを作成した。





## 2. 各種事業案内と申込用紙

### I. みかん大出前講座

本学の教員は、自身の教育や研究、社会活動の専門性や成果をもとに、県民の皆さまを対象とした出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。ページより掲載の「みかん大出前講座 テーマ一覧」より、ご希望のテーマをお選びいただき、ページの「みかん大出前講座」申込書にてお申し込みください。

#### 1. 目的

みかん大出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

#### 2. 対象者

県内に在住・在勤・在学の 5名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。広く地域の方を受講者として募集することができる場合は、公開講座としての開催をお願いします（本学ホームページに掲載案内を掲載します）。

#### 3. ご留意いただきたいこと

- ・ 各講座の時間は1講座90分以内となります。
- ・ 講師料は**無料**です。交通費のみご負担いただきます。（請求書は発行しません）  
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。  
\*規程がない場合、本学規程で対応いたしますので、お問い合わせください。  
\*ただし、本学から会場までの距離が 2km未滿の場合は、負担いただく必要はございません。  
\*交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 施設からの申込件数は、2件以内とさせていただきます。
- ・ 会場の手配、必要物品（PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等）の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。ただし、申込者様による開催の記録として、写真撮影が必要な場合は、事前に講師へ直接ご相談ください。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。なお、土・日・祝日や夜間（終了時間が20時以降になる場合）の開催については対応いたしかねますので、ご了承ください。
- ・ 各講座の受付件数には上限があるため、やむを得ずお断りすることがございますのでご了承ください。受付を終了した講座の情報は、本センターホームページに随時掲載いたします。

#### 4. お申し込み期間

令和5年度のお申し込みは、令和5年11月30日（木）まで受付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

講座ごとに、開催上限回数になり次第、受付終了となります。

#### 5. テーマ選定～お申し込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご留意いただきたいこと」をよくお読みください。

本冊子「令和5年度 三重県立看護大学 地域交流センター 講師派遣のご紹介」に記載されている「みかん大出前講座」から、ご希望のテーマをお選びください。

ページの「みかん大出前講座」申込書にご希望のテーマ名、必要事項等を記載してください。

必要事項を記入した申込書を、FAXまたはE-mailにて送付し、本センターまで、お申し込みください。（TEL/FAX：059-233-5610、E-mail：rc@mcn.ac.jp）

#### 6. お申し込みから実施までの流れ

申込書に記載していただいた希望内容に応じ、本センターにて担当講師と日程を調整します。

日程調整後、本センターから申込者様宛に決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。

（日時の調整がつかず、やむをえずお断りすることがあります。ご了承ください。）

決定通知書を受領後、講座内容の詳細について、申込者様と担当講師との間で直接打ち合わせをしていただきます。

※申込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座」

では、みかん大出前講座一覧が確認でき、申込み多数にて受付を終了した講座に関する情報や、「みかん大出前講座申込書」をダウンロードできます。

※尚、申し込み後2週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

# 令和5年度「みかん大出前講座」申込書

## 三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和5年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他( )
連絡先	(ふりがな) 担当者名			
	住所	〒	電話	
	FAX		E-mail	※必ずご記入願います

\*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

出前講座の希望内容	希望日時 第1～3 (土日・ 祝日不可)	① 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分	② 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分	③ 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分
	希望 会場名	参加予定人数		名
	会場 所在地	参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)		
	番号/ テーマ名	No. -	テーマ名	
出前講座資料	<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい <small>*資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。</small>		広く地域の方を受講者として募集することができる (本学HPに掲載案内を掲載)  可能    不可能    要相談	

以下は地域交流センター使用欄

### 三重県立看護大学地域交流センター「みかん大出前講座」決定通知書

受付No( )

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和5年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名	
	開催日時	令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分		
	教員氏名	教員連絡先		

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX:(059)233-5610 E-mail:rc@mcn.ac.jp

## Ⅱ. みかん大リクエスト講座

本センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。それらの講座以外の内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などのご要望に合わせて、講師を派遣いたします。ご要望の際には、ページの「みかん大リクエスト講座」申込書にてお申込みください。なお、「みかん大リクエスト講座」は有料となりますので、あらかじめご了承ください。

### 1. ご留意いただきたいこと

- ・ 講師料はお問い合わせください。別途交通費もご負担いただきます。  
(請求書は、講座が終わりましたら、当センターより送付いたします)  
\* 本学から会場までの往復に要する交通費をご負担いただきます。  
\* 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金(素泊まり料金)を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 会場の手配、必要物品(PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等)の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます(有料)。
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。ただし、申込者様による開催の記録として、写真撮影が必要な場合は、事前に講師へ直接ご相談ください。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。

### <新型コロナウイルスの感染防止対策について>

- ・ 本講座においては、十分な感染防止対策のもと行っていただくことをお願いしております。
- ・ **オンライン講座**についても、ご相談に応じます。
- ・ 感染拡大状況に応じて、お申し込み者さまの判断で、中止またはオンライン講座としていただくことが可能です。その際は、**地域交流センターまでご連絡、ご相談ください(場合によっては、オンラインでご対応できない場合もあります)。**
- ・ 感染拡大状況により、本学の方針に従い中止させていただくことがあります。

### 2. お申し込み期間

令和5年度のお申し込みは、令和5年11月30日(木)まで受け付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

お申し込みの前に、講師派遣のテーマ・内容等について、お問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページの「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大リクエスト講座」では、「みかん大リクエスト講座」申込書をダウンロードできます。

※希望の教員名についてはなるべくご記入いただきますようお願いいたします。

各教員の担当授業科目や研究課題等は、本学ホームページ「三重県立看護大学＞大学案内＞教員一覧＞教員個人名」からご確認いただけます。

※尚、申し込み後 2 週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

【過去 3 年間にリクエストのあったテーマ】

派遣先	テーマ ※ 重複した内容のテーマについては掲載を省略していません
医療機関	フィジカルアセスメント～新人編～ / フィジカルアセスメント～呼吸・循環～
	形態機能学を活かした看護実践
	看護診断 / 関連図
	マネジメントラダー評価について / マネジメントラダーの見直し
	新キャリアラダー評価の検討会
	コーチング
	リーダーシップ（管理者編）
	キャリアディベロップメント（管理者編）
	看護研究
	看護研究個別指導
	研究論文の読み方、活かし方
	ケースレポートをまとめよう
行政機関	施設・訪問サービスにおける感染症対策と業務継続のポイント
	施設・居宅における感染対策～あれ？防護服ってどう着る＆脱ぐ？～
	大規模災害時の対応 業務継続のため平時から備えておくこと
	介護施設等における感染症のリスクマネジメント
	認知症ケアについて
	こころの健康づくり講演会～ストレスとうまく付き合うコツ～
	今どきの育児の理解と保健指導のポイント
	子どもを理解するための基礎知識
	子どもの家庭福祉
	子育て支援員研修修了者に期待する活動
教育機関	新型コロナウイルス感染症について～知識と予防～
	学校における感染症の予防と対策
	思春期のこころとからだ
	薬物乱用防止講座
その他	感染症予防対策
	熱中症 with 新型コロナウイルス ～急変時対応も含めて～
	コロナ禍におけるフレイル予防
	認知症について
	認知症の正しい理解と虐待の未然防止
	認知症の初期症状、地域での見守り、気付きについて
	高齢者の事故防止のための研修
	健康寿命をのばそう！
	ストレスと上手に付き合うために
	ボランティア活動における熱中症対策について
子どもに関わる大人に必要な性のお話	

# 令和5年度「みかん大リクエスト講座」申込書

## 三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和5年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他( )	
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒	電話		
	FAX		E-mail	※必ずご記入願います	

\*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

講師派遣の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分 ③ 令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分	参加予定人数	名
	希望会場名			参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)
	会場所在地			
	希望する 教員氏名	テーマ名		
具体的内容 *別紙添付可				*その他ご希望がありましたらご記入ください。

以下は地域交流センター使用欄

### 三重県立看護大学地域交流センター「みかん大リクエスト講座」決定通知書 受付No( )

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和5年 月 日

決定事項	テーマ名				
	開催日時	令和 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分			
	職名 教員氏名		教員 連絡先		

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がありましたら下記の連絡先までご連絡ください。

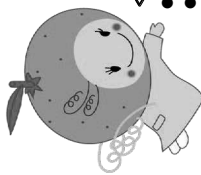
【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX:(059)233-5610 E-mail:rc@mcn.ac.jp

# 看護研究SEED

はじめてみませんか？



## <目的>

看護研究の基本的内容に関する講座を通して、研究を進めるための基礎的な方法を身に付けることを支援します。

## <対象>

- 看護の現場で看護実践を行っている方
- これから看護研究に取り組みたいという方、もしくは現在取り組んでいる方

## <事業概要>

受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取り組めるよう企画しました。今年度は、昨年度の集合研修からオンライン研修とし5日間の開催とします。申し込み方法は2通り、個人でオンライン受講する方法（全5回受講と単回受講の2コース）と、施設単位（施設の代表PCに配信し、内部の方が集まって受講）でオンライン受講する方法です。

## <費用>

個人申し込み：全5回受講コース 9,372円（消費税込）  
 単回受講コース 5,973円（消費税込）  
 施設単位申し込み：13,200円（消費税込）

## <受講決定>

受講決定者および施設には、受講決定通知を送付します。  
 血算締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

## <申込方法>

### 個人申し込みの場合

QRコードを読み込んでいただくと、申し込みフォームに移動します。  
 必要事項をご記入のうえ、送信してください。



看護研究SEED個人申し込み

### 施設単位申し込みの場合

下記のメールアドレスに、  
 件名を「看護研究SEEDの申込」として、  
 必要事項を記載のうえ、お申し込みください。  
 E-mail: rc@mcn.ac.jp

- 必要事項：①施設名  
 ②施設の郵便番号・住所  
 ③施設電話番号  
 ④代表者のお名前  
 ⑤受講人数  
 ⑥受講に使用するメールアドレス  
 (webアドレスに限る)

※記載いただく個人情報、本事業の運営のみを使用します。  
 なお、本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。

## <プログラム>

令和2年度より、従来の「看護研究の基本STEP」研修に、新規テーマ「看護研究における倫理的配慮」と「研究デザインのタイプと選択」を加え、受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取り組めるよう企画しています。また、看護研究研修の次のステップである「ハウツー-看護研究」につながるような「量的研究(実験・計測)」のテーマもあります。

回	日程	テーマ	時間	講師
1	6月1日(木)	センター長あいさつ・オリエンテーション 看護研究の意義と文献の活用 テーマの決め方と計画の立て方	10:25~10:30 10:30~12:00 13:00~14:30	センター長 林 学長 片田 玉田 章
2	6月15日(木)	看護研究における倫理的配慮 研究デザインのタイプと選択	10:30~12:00 13:00~14:30	安部 彰 上田 貴子
3	6月26日(月)	質的研究(インタビュー) 量的研究(アンケート)	10:30~12:00 13:00~14:30	関根 由紀 関根 由紀
4	7月13日(木)	量的研究(実験・計測) 研究論文作成	10:30~12:00 13:00~14:30	長谷川 智之 玉田 章
5	7月31日(月)	プレゼンテーション(演習含む)	13:00~15:00	渡波浩子

## <受講のご案内> 必ずご確認ください

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレットをご用意ください。  
 (当日、回線やパソコンの不具合等により万が一受講ができない場合は、再度ご受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いいたします。)
2. マイク・カメラ内蔵型のパソコン・タブレットまたはそれに接続可能なマイク・カメラをご用意ください。  
 双方向のオンライン講義等で使用します。
3. お申込みいただいたアドレス(webアドレス)に、開催日が近くなりましたら、視聴URLと講義資料等を送ります。
4. アプリのダウンロード  
 機能が制限される場合があるので、差し支えなければお使いのPC等にZoomのアプリのインストールをお勧めします。

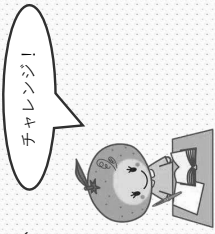
開催の様子は本学ホームページ(//三重県立看護大学>地域交流センター>看護研究SEED)をご参照ください。

## <お問い合わせ先>

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子  
 TEL: 059-233-5610(平日9時~17時) E-mail: rc@mcn.ac.jp

# 令和5年度 看護研究エッセンス

- **目的**  
看護研究遂行能力を強化する方法を学び、演習型の研修を受講することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。
- **対象**
  - ・ 本学の「看護研究SEED (旧：看護研究の基本ステップ)」または、同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方
  - ・ しばらくぶりに看護研究にチャレンジしようと思っっている方
- **費用** 1 コース (3 コマ) 7,106 円 (消費税込)



コース	統計解析 (基本編)	統計解析 (応用編)	英語論文：APAスタイルでの参考文献引用及び参考文献の書き方
本コースの対象	・統計手法をブラッシュアップしたい方 ・統計ソフト (エクセル) を使ったことがある方	・統計解析 (基本編) を修了された方 または基本的な看護研究の統計解析を習得している方	・英語論文執筆に興味がある方 ・APAスタイルで英語論文を執筆したい方
日時	8月26日 (土) 10:40~16:10	2月3日 (土) 10:40~16:10	11月11日 (土) 10:40~16:10
担当者	高橋 真	高橋 真	ドライデンいつみ
部屋	第2情報処理教室	第2情報処理教室	第2情報処理教室
持ち物	USBメモリ	USBメモリ	USBメモリ
概要	初學者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方や実際の使い方を学びます。 また、修了された方を対象にパラメータ、アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講義を行います。	初學者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方や実際の使い方を学びます。 また、修了された方を対象にパラメータ、アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講義を行います。	初學者を対象に、便利な表現やつなぎの言葉を実際になら英語の論文に使えるようになる取組を行います。 また、英語論文でもよく用いるAPAスタイルの参考文献の書き方について学びます。
担当者からのコメント	統計学について基本から学びたい方に対するアンケートによるアンケート調査の解析と統計処理の基本について学びます。	統計解析の基本編を修了された方を対象に、応用編の手法を学ぶための準備講座として、結果と考察の書き方についても学ぶ予定です。	英語論文は形式が整っていたり、内容の濃いものとなる取組を行います。 また、英語論文でもよく用いるAPAスタイルの参考文献の書き方について学びます。
最小催行人数	1人	1人	1人

開催の様子は本学ホームページ (三重県立看護大学>地域交流>国際貢献・国際交流>地域交流センター->看護研究エッセンス) をご参照ください。

申込み方法は、裏面をご覧ください

## 研修の様子



★昨年度の受講者の声  
【統計解析 (基本編)】  
「実際にパソコンを使用して演習もできたのでよりわかりやすかった」、「自分の研究を相談できてもありがたかった」などです。

研修の様子  
「統計解析 (基本編)」

申し込み方法 QRコードの申込みフォームに必要事項をご記入のうえ送信してください  
starting a new course



申込締切 8月3日 (木) R6年1月12日 (金) 10月20日 (金)

- お申込み後、本学より返信があります。  
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。  
返信メールが届かない場合は、お問い合わせください。
- 「研修会参加のご案内」は郵送いたします。  
応募締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- 収集した個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。
- 会場内の写真撮影・録音・録音を禁止いたします。ご了承ください。

## 会場/住所

三重県立看護大学/三重県津市夢が丘1-1-1

## お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬  
TEL：059-233-5610 (平日9時~17時) E-mail：rc@mcn.ac.jp





# 令和5年度 ハウツー看護研究

- **目的**  
看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。
- **対象**  
本センターの「看護研究SEED（旧看護研究の基本ステップ）」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方。  
原則として、申し込んだコースの全日程に参加できる方。  
※ご希望の各コースを受講できます。
- **費用** 1コース 90分×7回 8,239円（消費税込）



## ● 内容

コース	日時	担当者	開催場所	テーマ	担当者からのコメント	持ち物	最少参加人数
質的研究コース (インタビュ)	①8月18日(金) 13:00~16:10 ②9月1日(金) 13:00~16:10 ③9月15日(金) 10:40~16:10	浦野 茂 阪根由紀	多目的講義室	インタビューによる 質的研究を行うてみる	質的研究とは、一つで済むとは異なり、調査対象からデータを収集し、分析し、結論を出すまで、なかなか難しい作業ですが、ながらこそその面白さもあり、そこから学びたいと思います。		2人
量的研究コース (アンケート)	①10月7日(土) 9:00~12:10 ②10月7日(土) 13:00~16:10 ③10月28日(土) 9:00~14:30	斎藤 真 豊原啓次	多目的講義室 第2情報処理教室	「質問紙の作成と調査の実施」 -職務満足度について考えをさぐる-	「アンケートを作りたいけど、どうやって作るのかわからない」という声も聞かれます。アンケート作りには、ちょっとしたコツがあります。コツを知り、ゼロから一緒にアンケートを作ってみませんか。そのための参加をお待ちしています！	USBメモリ	1人
量的研究コース (実験・計測)	①9月13日(水) 9:00~12:10 ②9月13日(水) 13:00~16:10 ③9月16日(土) 9:00~14:30	斎藤 真 長谷川博之	実験室5 第2情報処理教室	「有効な実験調査方法の検討」 -カフェを訪問し、その場にいる人々による実験研究！- 明日から復える実験研究！	実験研究は、高額の機材を使用しなければできないというイメージがある方もいらっしゃいますが、本研修ではそのイメージを払拭します。こんな場面に実験がもたらすさまざまな効果を知る機会を、ぜひご活用ください。参加者全員で実験を作り上げていく内容ですので、その雰囲気に参加がおすすめです！	USBメモリ	1人
統計学コース (SPSS講座)	①2月10日(土) 9:00~12:10 ②2月10日(土) 13:00~16:10 ③2月17日(土) 9:00~14:30	斎藤 真	第2情報処理教室	初めて使うSPSS -SPSS Tip 2023-	本講義では、統計ソフトSPSSを初めて使う方を対象に操作の基本、関数種類の後、み方について解説を行います。さらに解析結果から、結果の読み取り方についても指導します。	USBメモリ	1人

開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献・国際交流>地域交流センター>ハウツー看護研究）をご参照ください。

申込み方法は、裏面をご覧ください

## 申し込み方法

QRコードの申込みフォームに必要事項をご記入のうえ、送信してください。

### 申し込みコース



令和5年度ハウツー看護研究  
質的研究コース（インタビュー）



令和5年度ハウツー看護研究  
量的研究コース（アンケート）



令和5年度ハウツー看護研究  
量的研究コース（実験・計測）

申込締切 7月28日(金)

9月15日(金)

8月22日(火)

## starting a new course

## 研修の様子



令和5年度ハウツー看護研究  
統計学コース（SPSS講座）



★これまでの受講者の声  
「講師の先生方がとても良心的であたたかくてありがたかったです」「自分の研究の曖昧なところも解決してくれて助かりました」などです。



申込締切 1月19日(金)

- お申込み後、本学より返信があります。メールに受信制限をかけている方は、本学から返信メールを受信できない場合があります。予め、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 「研修会参加に関するご案内」は郵送いたします。
- 収集した個人情報（本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。）は本学ホームページ等に掲載いたしません。
- 会場内での写真撮影・録音・録音を禁止いたします。ご了承ください。

## 会場/住所

三重県立看護大学/三重県津市夢が丘1-1-1

## お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬  
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：rc@mcn.ac.jp



## 令和5年度「施設単位看護研究支援」のご案内

### ■施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループまたは個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行います。お申込みのあった県内医療機関等に本学教員がお伺いし支援します。状況によっては、オンラインでの支援も可能です。

\* 研究課題が少ない場合は、リクエスト講座を活用し研究支援を受けることも可能ですので、ご相談ください。

### ■目的

三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

### ■研究支援期間

研究支援決定日から令和6年3月29日（金）（最長）まで

### ■研究支援の方法

1回につき3時間の研究支援（1回あたりの指導件数は最大6件を目安）×年4回を標準とします。研究支援期間が長期になりますので、計画的に進めていただきますようお願いいたします。支援の方法（対面支援、またはオンライン支援）、および日程は担当教員と直接相談して決めてください。

＜対面支援の場合＞

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。

＜オンライン支援の場合＞（Microsoft Teams・ZOOMの場合）

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。

推奨：パソコン（高速インターネット回線に接続しているもの）

マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備

2. アプリのダウンロード

Microsoft Teams・ZOOMアプリを使用されるパソコン（スマートフォン可）にダウンロードしてください。

3. 受信希望のメールアドレス（webアドレスに限る）に、E-mailにてお送りします会議用のURLから参加してください。

## ■ 支援料金について

- ・講師料および対面の場合の交通費（本学から会場まで）をご負担いただきます。
- ・講師料は、年間4回（1回当たり3時間）の支援を標準として算定した額、税別12万円（担当教員の職位に関わらず一定額）となります。なお、実際の支援時間が標準支援時間（3時間）に満たない場合でも講師料は減額しません。

## ■ ご留意いただきたいこと

- ・各研究は、各自もしくは施設にて主体的に進めてください。
- ・研究を進めるにあたり、基本的な看護研究の研修を修了した方が望ましいため、看護研究 SEED およびハウツー看護研究の研修をご活用ください。
- ・担当教員は、特定の領域に所属しておりすべての看護領域に精通している訳ではありません。担当教員の専門領域でない研究に対しては、対応しかねる場合があります。専門的な研究支援をご希望の場合は、「みかん大リクエスト講座」をご利用ください。
- ・担当教員については、ご希望に添えない場合があります。また、本センターの取り決めにより、3年以上同じ支援担当は継続できませんのでご了承ください。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。
- ・支援内容に研究発表会に係る審査および講評は含まれません。
- ・申し込み後のキャンセルなどがないよう、十分に検討しお申込みください。

## ■ お申込み方法

- ・所定の申込用紙により本センターまで、E-mail または FAX のいずれかでお申し込みください。申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞施設単位看護研究支援）からもダウンロードできます。
- ・申込みの締切期日は、令和5年2月28日（火）とさせていただきます。

## ■ お申込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 本センターから担当教員決定通知書をお送りします。（4月末の送付を目途）
- ③ 貴施設と担当教員との間で支援日程等を調整された後、研究支援開始となります。
- ④ すべての支援終了後、本学より講師料と対面の場合の交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払いください。（恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

## ■ 問い合わせ先・申し込み先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川  
TEL/FAX：059-233-5610 E-mail：rc@mcn.ac.jp

## 令和5年度 三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」申込書

申込〆切 : 令和5年 2月28日 (火)

施設名					
担当者連絡先	住所	〒			
	担当者	役職：			
	電話		FAX		E-mail

\*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や支援実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

<b>支援を希望する 研究テーマ数</b>	件 ( MAX 6 件まで )
<p style="text-align: center;"><b>研究内容</b> (各テーマ名をお書きください。 別途、資料添付可)</p>	
<p><b>*支援希望教員名</b> (あればご記入ください)</p>	

\*支援希望教員については、ご希望に添えない場合があります。また、3年以上同じ教員は継続できませんのでご了承下さい。

.....  
以下は地域交流センター使用欄

### 三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援について、支援教員を、下記のとおり決定しましたのでお知らせします。

令和 5 年 月 日

決定事項	施設名			
	支援教員名	本学での担当：	教員名：	
	支援教員連絡先	TEL：	E-mail：	

上記の支援教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。  
ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター 担当：西川  
TEL/ FAX (059)233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

令和5年度

# 看護研究 発表会支援

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とした支援で、  
看護研究発表会における講評・審査を担当します。お申込みの  
あった県内医療機関等に、本学教員が出向き支援します。また、  
オンラインでの支援や書面での講評も可能です。

**この事業の狙い** 三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究  
遂行能力を培うことを目的とします。

**支援対象：** <対面支援・オンライン支援>

5題以上の研究発表がある看護研究発表会

<書面での支援の場合>  
本学教員が研究支援を行っていた看護研究  
に限る

**申し込み締切：令和5年11月30日（木）**

開催希望日の60日前までにお申し込みください。

## お申込み方法

QRコードよりお申し込みください。

★昨年度の利用差の声  
「2年間研究指導をいただいた先生に講評をいただいた。つたない研究計画書から発表でき  
るまでに仕上げる事が出来たことが研究者にとって貴重な経験となりました。」  
「ご指導いただいた先生のお言葉は大変ありがたいもので、今後の励みになりました」 などです。

- お申込み後、本学より返信があります。本学からの返信メールを受信できない場合があります。  
メールに受信制限をかけている方は、本学ドメイン「mon.ac.jp」を指定受信設定してください。  
返信メールが届かない場合は、お問い合わせください。
- 収集した個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。

## お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

津市夢が丘1-1-1 担当：川瀬

TEL：059-233-5610（平日9時～17時）

E-mail：rc@mon.ac.jp



## 研究支援の方法

### <対面支援>

担当教員が専ら施設に向きましますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。  
支援の日程は、担当教員と直接相談して決めてください。

### <オンライン支援>（ZOOMの場合）

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意く  
ださい。

推奨：パソコン(高速インターネット回線に接続しているもの)

マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備

2. アプリのダウンロード

ZOOMアプリを使用されるパソコン（スマートフォン可）にダウンロードしてください。

3. 支援の日程は、担当教員と打ち合わせして決めてください。  
受信希望のメールアドレス（webアドレスに限る）に、お送りします会議用のURLから参  
加してください。

### <書面での講評>

事前に発表原稿をお送りいただき、担当教員が書面で講評し、依頼者に返信します。支援の日程  
は、担当教員と打ち合わせをお願いします。

## 支援料金について

\* 講師料は、お問い合わせください。

### <対面支援>

・ 講師料および対面の場合の交通費（本学から発表会場まで）をご負担いただきます。

・ 現地宿泊が必要となる場合はお申込者側で宿泊施設を予約ください。なお宿泊料金（業泊まり  
料金）は、直接宿泊施設にお支払いください。

### <オンライン支援>

・ 講師料をご負担いただきます。通信にかかる費用は、依頼者のご負担となります。

### <書面での講評>

・ 講師料をご負担いただきます。

## ご留意いただきたいこと

### <対面支援・オンライン支援>

- ・ 会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側をお願いします。
- ・ なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

## お申込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 表面QRコードより、本センターまでお申し込みください。
- ② 担当教員決定後、決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と打ち合わせを行ってください  
（お申し込み内容に大きな変更があった場合は、本センターにもご連絡ください）。
- ④ 対面支援・オンライン支援は、研究抄録を、開催1週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後、本学より講師料と対面支援の場合は交通費を請求いたします。  
料金は本学指定の口座への振込によりお支払ください  
（恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

事業の詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献・国際交流>地域交流センター>看護研究支援）  
をご参照ください。

## 三重県立看護大学 地域交流センター

令和5年度三重県受託事業

# 三重県新人助産師合同研修

～新人助産師集合!! 三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”高め合おう～

<研修開催にあたって>

助産師として就業して1～2年のみなさんは、日々の助産実践に試行錯誤されていることと思います。本研修は、厚生労働省策定の「新人看護職員研修ガイドライン」に示された新人助産師の到達目標に沿いながら、助産師同士の交流を通して、モチベーションを高めることを目的としています。

【対象】 → 三重県内の医療施設等にて周産期医療に携わる

就業1～2年目の助産師

【方法】 → ハイブリッド方式

(オンライン・対面の組み合わせ)

【会場】 → 三重県立看護大学 (対面ご希望の場合)  
(三重県津市夢が丘1丁目1番地1)

定員  
30名程度  
事前申込み

プログラム

日程	午前 (10:00～12:00)	午後
11月4日 (土) 1日目	周産期分野における感染看護の実践 【講義】	『母乳育児成功のための10のステップ』に基づいた支援 (13:00～16:00) 【講義・演習】
	市立四日市病院 感染管理認定看護師 奥村 恵美子	日本母乳の会理事 パルモア病院看護部長代行 井田 久留美
12月9日 (土) 2日目	周産期のメンタルヘルス 【講義・演習】	インシデントから学ぶ (14:40～15:30) 【講義】
	三重大学医学部附属病院 看護部長・母性看護専門看護師 森貫 かおり	三重県立看護大学 教授 中西 真美子
1月8日 (祝・ 月) 3日目	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 【講義】	ハイリスク新生児の看護 (13:00～15:30) 【講義・演習】
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内園 広匡	国立病院機構三重中央医療センター 副看護部長・新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美
2月10日 (土) 4日目	産婦人科診療ガイドラインにもとづく 緊急時の対応 【講義】	事例検討をとおした助産師の判断と看護実践 (13:00～15:50) 【演習】
	伊勢赤十字病院 部長 前川 有香	伊勢赤十字病院 部長 前川 有香 国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 総合看護部長 鈴木 薫、副看護部長 東 真由美

## 新人助産師合同研修 お申込み方法

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。  
必要事項をご記入のうえ、送信してください。 個人でのお申込みになります

2023年度  
新人助産師合同研修申込み



申込み締切

2023.10.10 (火)

参加者の声:「母乳育児の学びはなかなか自己学習では補えないので参加してよかった!」「新生児のアセスメントの重要なポイントを理解できた!」「グループワークで他の人の考えについても知ることができ学びを深められた!」など

- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mon.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 「研修会参加に関するご案内」は所屬先に送付いたします。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- 収集した個人情報には本研修のみに使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

## <オンライン受講の方へ> △必ずご確認ください

1. 高速インターネット回線につながったパソコン・タブレットをご用意ください。  
当日、回線やパソコンの不具合等により万が一受講ができない場合は、再度ご受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いいたします。
2. マイク・カメラ内蔵型のパソコン・タブレットまたはそれに接続可能なマイク・カメラをご用意ください。双方向のオンライン講義等を使用します。
3. お申込みいただいたアドレス (webアドレスに限る) に、開催日が近くなりましたら、視聴URLと講義資料等をお送りします。
4. 機能が制限される場合がありますので、差し支えなければお使いのPC等にZoomアプリのインストールをお勧めします。

## お問合せ先

詳細は本学ホームページ  
(三重県立看護大学>地域貢献>国際交流>地域交流センター>各種研修 新人助産師研修)をご参照ください。



三重県立看護大学 地域交流センター 担当:川瀬 浩子  
TEL:059-233-5610 (平日9時～17時) E-mail:rc@mcn.ac.jp



令和5年度 三重県受託事業

三重県助産師（中堅者・指導者）研修

助産師のReskilling ～助産ケアの暗黙知を共有しよう～

定員  
30名程度  
事前申込み

<研修目的>

妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、関係職種と連携・協働するために必要な知識や技術を習得し、助産実践能力の向上を図ることを目指します。

全3回

- 【対象】 → 三重県内の医療施設ならびに教育機関で就業している経験年数概ね5年以上および指導的立場の助産師
- 【方法】 → ハイブリッド方式（オンライン・対面の組み合わせ）
- 【会場】 → 三重県立看護大学（対面ご希望の場合）（三重県津市夢が丘1丁目1番地1）

プログラム

日種	午前 (10:00~12:00)	午後 (13:00~15:30)
第1回 10/21 (土)	胎児・母体の急変時の対応 【講義】 伊勢赤十字病院 部長 前川 有香	三重県の母子保健のトピックス～伴走型子育て支援～ 三重県の状況 【講義】 (13:00~14:00) 三重県子ども福祉部 次長 野瀬 水泉 西崎 西崎
第2回 11/11 (土)	性暴力被害者支援と助産師の役割 【講義】 三重県立看護大学 母性看護学 講師 杉山 泰子	志摩市の状況 【講義】 (14:50~15:30) 志摩市健康推進課 母子保健係 係長 杉本 順子 保健師 相可 由実 保健師 金子 亜希
第3回 12/23 (土)	母子と家族のための減災～助産師のための減災ドリル～ 【講義】 日本赤十字社医療センター 看護部 中根 直子	産後ケア事業の実践と多職種連携 【講義】 くつろが助産院 院長 濱地 祐子

申込み方法は、裏面をご覧ください

参加申込み

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。必要事項をご記入のうえ、送信してください。

★ご希望の回にお申し込み下さい★ 個人でのお申込みになります

第1回申込み R5.9.20 (水)

申込み締切 R5.10.11 (水)

第3回申込み R5.11.29 (水)



- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 「研修会参加に関するご案内」は登録いただいたメールアドレスに送付いたします。応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- 収集した個人情報（本研修のみ）に使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録音・録音を禁止いたします。ご了承ください。

<オンライン受講の方へ> △必ずご確認ください

1. 高速インターネット回線につながったパソコン・タブレットをご用意ください。当日、回線やパソコンの不具合等により方が一受講ができない場合は、再度受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いします。
2. マイク・カメラ内蔵型のパソコン・タブレットまたはそれに接続可能なマイク・カメラをご用意ください。双方向のオンライン講義等で使用します。
3. お申込みいただいたアドレス（webアドレスに限る）に、開催日が近くなりまして、視聴URLと講義資料等をお送りします。
4. 機能が制限される場合がありますので、差し支えなければお使いのPC等にZoomアプリのインストールをお勧めします。

詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献・国際交流>地域交流センター>各種研修 助産師（中堅者・指導者）研修）をご参照ください。



お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子  
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：rc@mcn.ac.jp

## 令和5年度 三重県受託事業 診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等の 看護師・歯科衛生士等の医療従事者向け 認知症対応力向上研修

**目的**  
高齢者と日頃から接することが多い、病院勤務以外（診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等）の看護師、歯科衛生士等の医療従事者に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や認知症ケアの原則、医療と介護の連携の重要性等の知識について修得するための研修を実施することにより、認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となることを支援します。

**対象**  
県内の診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等の看護師、保健師・歯科衛生士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・診療放射線技師・栄養士等の医療従事者

三重県から修了証書が交付されます

**日程**  
【第1回】日程：令和5年11月5日（日）午前9時30分～12時20分  
【第2回】日程：令和6年2月3日（土）午前9時30分～12時20分

**会場**  
三重県立看護大学 講義棟 1階 大講義室

**定員**  
100名

①原則として、お申込み順にて受講を決定します。  
②受講希望者が定員を超えた場合は、受講を1施設1名に調整いただくか、受講のお断りをさせていただきます。

**講師**：清水 律子（三重県立看護大学 老年看護学 准教授）

### カリキュラム

1回目・2回目は同内容

時間	内容
9:30～11:10	講義 1. 基本的知識(20分) 認知症の人や家族の視点に立ち、その生活を支えるために必要な基本的な知識を習得する 2. 地域における実践 (70分) 認知症の人のQOLの向上を図るため、コミュニケーション、ケア及び多職種連携による支援の実践を理解する 3. 社会資源等 (10分) 認知症の人を取り巻く、医療・介護及び地域の社会資源の活用的重要性を理解する
11:20～12:20	事例検討とGW 講師から事例を提供します

開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域交流センター>地域貢献・国際交流>各種研修 認知症対応力向上研修）をご参照ください。

申込み方法は、裏面をご覧ください

令和5年度

診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等の看護師等医療従事者向け  
認知症対応力向上研修 申込方法



受講料無料

所属施設の申込担当者様がお申し込みください。  
QRコードを読み込んでいただくと、申し込みフォームに移動します。  
必要事項をご記入のうえ、送信してください。

受講希望者3名以上の場合は、再度お申込みください。  
\*必要事項：所属施設名・所属施設の住所・電話番号、申込担当者名・メールアドレス、受講者氏名（フリガナ）、生年月日、職名



令和5年度 11月5日（日）  
看護師等医療従事者向け  
認知症対応力向上研修受講申込



令和5年度 R6年2月3日（土）  
看護師等医療従事者向け  
認知症対応力向上研修受講申込

申込締切 9月20日（水）

12月20日（水）

★昨年度の受講者の声  
「基礎から対応、事例まで学び、日々の対応について確認することができた」  
「他職種のいろいろな考えを聞くことができた」 などです。

○お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。  
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合があります。そので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。  
○「研修会参加に関するご案内」は所属施設宛てに送付いたします。  
○募集締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。  
○収集した個人情報（本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。）  
○本事業の様子は、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。  
○会場内での写真撮影・録音・録画を禁止いたします。ご了承ください。

お申込・お問合せはこちら

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子  
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：event.rc@mcn.ac.jp





令和5年度 三重県受託事業  
三重県看護職員  
認知症対応力向上研修

3日間研修

目的

認知症の人と接する機会が多い看護職員に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴等に対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達をすることで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を支援します。

対象

次の各号を満たす者  
①三重県内の医療施設等で勤務する指導的立場の看護職員（主任クラス以上）  
②3日間の研修に全て参加できる者  
③研修受講後、半年以内に自施設での研修を実施し、指定期日までに報告書を提出することができる者（様式等詳細は研修にてお知らせします）

三重県から  
修了証書が交付されます

日程

令和5年 9月10日（日）午前 9時30分～16時10分  
9月11日（月）午前10時00分～16時10分  
9月12日（火）午前 9時30分～17時00分

会場

三重県立看護大学 講義棟 1階 大講義室

定員

100名  
①原則として、お申込み順にて受講を決定します。  
②受講希望者が定員を超えた場合は、受講を1施設1名に調整いただくか、受講のお断りをさせていただきます。

★昨年度の受講者の声  
「基礎知識を再確認でき、グループワークで、いろんな視点でみる事ができた」、  
「自分のケアを見直す機会となった」、  
「明日からの実践に活かせるように努力していきたい」  
などです。

注意事項

①この研修は、診療報酬の認知ケア加算2・3の施設基準に該当する研修です。  
②遅刻、早退は認められませんので、ご注意ください。

申込み方法は、裏面をご覧ください

カリキュラム

日程	時間	講師	科目
9月10日（日）	9:30～10:15 (講義45分)	小松 美砂 (福山女学園大学 老年看護学 教授)	認知症に関する知識 (講義180分)
	10:25～12:40 (講義135分)	山川 伸隆 (いせ山川クリニック 院長)	
9月11日（月）	13:40～16:10 (講義150分)	荒木 学 (三重県立看護大学 精神看護学 助教 精神看護専門看護師)	認知症看護の 実践対応力 (講義30分・演習120分)
	10:00～12:00 (講義120分)	藪下 茂樹 (錦鹿中央総合病院 社会福祉士)	
9月11日（月）	13:00～14:30 (講義30分・演習60分)	横山 智子 (桑名市総合医療センター 認知症看護認定看護師)	
	14:40～16:10 (講義30分・演習60分)	荒木 学 (三重県立看護大学 精神看護学 助教 精神看護専門看護師)	
9月12日（火）	9:30～12:30	奥野 歩 (済生会松陵総合病院 認知症看護認定看護師)	体制構築・人材育成 (講義90分・演習300分)
	13:30～17:00	中真 麗 (済生会松陵総合病院 認知症看護認定看護師)	

開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域交流センター>>地域貢献・国際交流各種研修 認知症対応力向上研修）をご参照ください。

申込方法

所属施設の申込担当者様がお申し込みください。  
QRコードを読み込んでいただくと、申し込みフォームに移動します。

受講料無料

必要事項をご記入のうえ、送信してください。  
受講希望者3名以上の場合は、再度お申込みください。  
\*必要事項：所属施設名・所属施設の住所・電話番号、申込担当者名・メールアドレス、受講者氏名（フリガナ）、生年月日、職名 申込締切 7月26日（水）



お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。  
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合があります。その際、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。  
○「研修会参加に関するご案内」は所属施設宛てに送付いたします。  
○応募締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。  
○収集した個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。  
○本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。  
○会場内での写真撮影・録音・録音を禁止いたします。ご了承ください。

お申込・お問合せはこちら

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子  
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：event.rc@mcn.ac.jp



# ミニ講座及び情報交換会

(オンライン研修会)

**目的**  
これまでに見出された課題やニーズに沿ったミニ講座や情報交換会を行い、地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実に図る

**対象**  
市町や保健所等で母子保健業務、子育て支援に携わる職員など

**方法**  
Zoomによるオンライン開催

## プログラム

研修企画・運営 三重県立看護大学 公衆衛生看護学

回	日程	時間	テーマ	講師
1	9月26日(火)	10時30分～11時30分	妊娠SOSみえの相談現場から～特定妊婦の地域連携による支援 2023～	NPO法人 MCサポートセンター みくくみえ 代表 松岡 典子
2	10月25日(水)	13時30分～14時30分	発達障害を持つ子どもの育ちと将来の展望	三重県立看護大学 精神看護学 准教授 長南 幸恵
3	11月27日(月)	10時30分～11時30分	小児難病児と家族のQOLの向上	東京保健医療大学 立川看護学部看護学科 教授 久保 恭子

申込み方法は、裏面をご覧ください

お問い合わせ  
三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子  
TEL:059-233-5610 E-mail:rc@mcn.ac.jp

## 参加申込み

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。  
必要事項をご記入のうえ、送信してください。

R5.9.5 (火)  
申込み締切  
R5.10.4 (水)



R5.11.6 (月)



○お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。  
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。

○「講座参加に関するご案内」はメールで送付いたします。  
応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

○収集した個人情報には本講座のみに使用し、講座終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。

○本講座の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。

○会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献・国際交流>地域交流センター>母子保健体制構築アドバイザー事業）をご参照ください。

★昨年度の受講者の声  
「具体例を交えた非常にわかりやすい講義と、現状の各市町の具体的な取り組みを知ることができ、とてもよかったです」、「現場からの実際の具体的なかわり方について学べた」、「参加したみんなが、元気になるための時間を共有できました」などです。

## <オンライン受講の方へ> ⚠️ 必ずご確認ください

1. 高速インターネット回線につながったパソコン・タブレットをご用意ください。  
(当日、回線やパソコンの不具合等により方が一受講ができない場合は、再度ご受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いします。)
2. マイク・カメラ内蔵型のパソコン・タブレットまたはそれに接続可能なマイク・カメラをご用意ください。双方向のオンライン講義等を使用します。
3. お申込みいただいたアドレス（webアドレスに限る）に、開催日が近くなりましたら、視聴URLと講義資料等を送ります。
4. 機能が制限される場合がありますので、差し支えなければお使いのPC等にZoomのアプリのインストールをお勧めします。

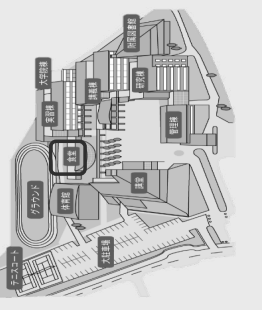
# 令和5年度 三重県立看護大学 地域交流センター 活動報告会

三重県立看護大学地域交流センターでは、  
本学の教育・研究の成果を地域社会に還元するため、地域社会との連携・協働および地域の皆様との交流をおとして地域貢献活動を行っています。  
地域の皆様にご参加いただき、貴重なご意見を頂戴する交流会のスタイルで開催します。

**日程** 2024.3.18 (月) 10:40～12:00  
(受付10:10～)

**場所** 三重県立看護大学 食堂  
(住所：三重県津市夢が丘1-1-1)

令和5年度三重県立看護大学  
地域交流センター活動報告会  
参加申込



**申込方法**  
QRコードまたは

電話・FAXのいずれか

お申し込みの際は、

・お名前 (所属先)

・ご住所 (市町村までの記載)

・電話番号をお知らせください。

**申込期間** 2024.1.9 (火)～3.6 (水)

- ◆ 車いすをご利用の場合など、特定の対応が必要な場合は、事前にお問い合わせください。
- ◆ 記載いただく個人情報、本報告会の運営にのみ使用します。
- ◆ 本報告会の様子を写真等で本学のホームページ等に記載します。
- ◆ 報告会場での写真撮影・録音・録画を禁止いたします、ご了承ください。

**お申込み・お問い合わせ先**  
三重県立看護大学 地域交流センター

Tel : 059-233-5610 | E-mail : rc@men.ac.jp



## 内容

### 第一部

1) 令和5年度地域交流センター活動  
の総括

【卒業生支援事業】

- 2) 卒業生支援プロジェクト
- 3) 卒業生のきずなプロジェクト

【委託事業】

- 4) 三重県新人助産師合同研修事業
  - 5) 助産師 (中堅者・指導者) 研修事業
  - 6) 三重県認知症対応能力向上研修事業
  - 7) 母子保健体制構築アドバイザー事業
  - 8) 子どもの居場所づくりアドバイザー事業
- 【教員提案事業】
- (みえ保健・看護力向上支援事業)
  - 9) 心電図を読もう!
  - 10) 看工連携ものづくりシリーズ発掘
  - 11) 災害時における新任期保健師の  
公衆衛生看護活動支援事業

### 第二部

【教員提案事業】

- (県民のヘルシステラシー橋上支援事業)
  - 12) 社会的養育が必要な子どもを  
育てる家族の交流支援事業
  - 13) 手洗いチェックしてみませんか?
  - 14) 医療的ケア児と家族のピアネット支援
  - 15) みかん大健康バドミントン教室 (中級編)
  - 16) みかん大バリススタfor認知症カフェ
  - 17) 赤ちゃんをむかえるママとパパのための  
「みかん大ハッピーマタニティ教室」
  - 18) 私たちに今できる災害の備え
  - 19) 子どもたちに「たいせつなからだ」を  
伝えるプロジェクト  
【リカレント教育】
  - 20) 認定看護師教育課程「感染管理」
- プログラムは都合により変更になる場合があります  
ますので予めご了承ください

## 昨年度の様子



3月16日(木)、令和4年度地域交流センター活動報告会を開催しました。ポスター展示による交流会形式で、地域交流センター活動の総括や教員提案事業、三重県受託事業、卒業生支援事業など、15事業について意見交換を行いました。参加者からは「事業を行なっている方と直接話せる機会には意義があった」「地域貢献活動について、意見交換ができた」などの声をいただきました。  
報告会は、本学の地域貢献活動を地域の方知ってもらう重要な機会です。ぜひご参加ください

開催の様子は本学ホームページ (三重県立看護大学>地域貢献>国際交流>地域交流センター>広報) 活動報告会) をご参照ください。

## 編集後記

本年度も令和 5 年度三重県立看護大学地域交流センター年報の発刊時期となりました。まだまだ感染予防対策は必要であるとしながらも、2020 年 1 月からの WHO による COVID-19 の「公衆衛生上の緊急事態宣言」が 2023 年 5 月 5 日に宣言終了が発表されました。以来、人々の流動が増し、すべての本事業の開催で多くの方々にご参加いただくことができました。ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

当センターの講師派遣事業は、平成 21 年度に始まり 15 年が経過しました。おかげをもちまして、県民の皆様にも本事業が周知されてまいりました。事業開始当初は「出前授業」「公開講座講師派遣」「その他の講師派遣」の 3 事業、平成 27 年度からは「出前講座」「その他の講師派遣」事業の 2 事業に集約され、令和 2 年度からは「みかん大出前講座」「みかん大リクエスト講座」という名前に変更されました。皆様からの派遣申し込みも年々増加しており、今年度は 2 事業で 109 件を実施し、教育・研究の成果を地域に還元できていると感じております。

また、看護職を対象とした「看護研究支援事業」「受託事業」など、教育支援事業も充実しております。また、「リカレント教育」事業では、令和 4 年度から認定看護師教育課程（B 課程）「感染管理」を開講し、今年度終了時点で 36 名の認定看護師修了生を輩出することができ、令和 6 年度にも開講しております。

今年度の各事業内容を「教員提案事業」「卒業生支援事業」「受託事業」「リカレント教育」「地域交流センター企画事業」「連携」の 6 事業にまとめ、資料と共に本年報に収録いたしました。本年報を通じて、多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献について、さらなるご理解・ご協力をいただければ幸いです。

これらの事業を進めるにあたり関係各位、地域の皆様に多大なご理解・ご協力いただきましたことをここにあらためて感謝申し上げます。

地域交流センター 副センター長 大川明子

三重県立看護大学  
地域交流センター  
令和 5 年度  
Vol. 26

---

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1
発行年月	令和 6 年 5 月

---





P-00061  
この印刷物は、CSR  
に取り組む印刷会社が  
製作した印刷物です。



GREEN PRINTING JFPI  
P-B10216  
この印刷製品は、環境に配慮した  
資材と工場で製造されています。